

春城雜纂

六

44
經濟資料

特別
14
1919
679

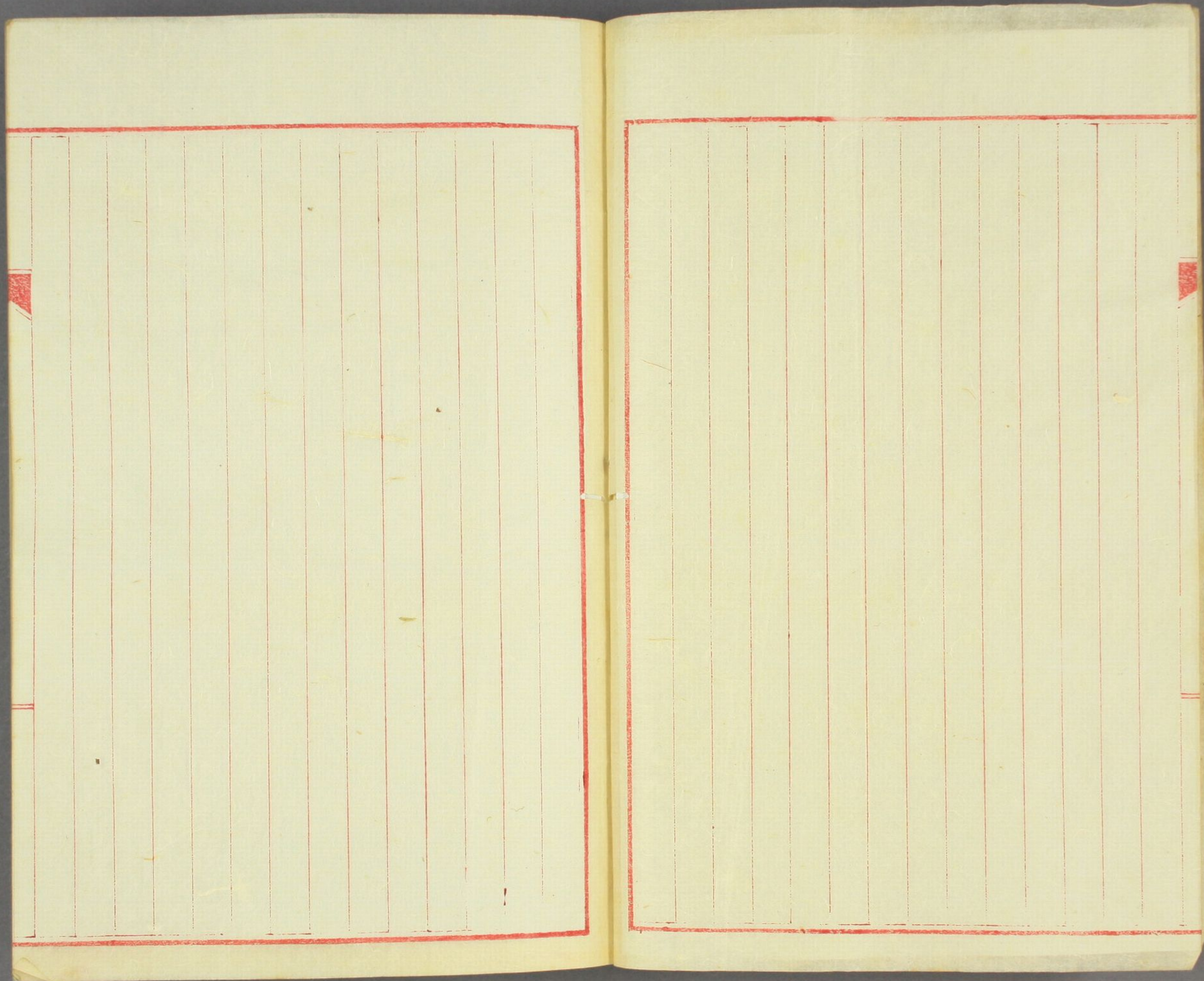
Blank lined page with vertical red lines.

特
門 14
號 1919
卷 68

~~門 15
號 1380
卷 44~~

679

昭和十六年十月五日
市島謙吉氏贈



以下
6 丁
白紙



親船ノ事

我々國ニテ耕地、物産ヲ交換シテ有無ヲ平均シ社會、利便ヲ濟スモノハ何人ナリヤト問
 一モ、マラハ吾輩ハ之ニ答テ親船、船頭ナリト云ハントス何ヲ以テ之ヲ云フ曰ク我々國
 於テ前從ヨリ回漕、物品ニ對シテ荷物換、貸金ヲ為スモノハ船頭、外マルヲ聞カス然
 一ハ即船頭ナルモノハ物産、運輸ヲ本業トシ傍ヲ商人ト銀行者トヲ併セ兼ルモノト云フ
 一ニシ既往ニ徵シ現今ヲ視ルニ我々日本國中ニ於テ運漕壹貫貨金、三業ヲ兼テ實際ニ營
 業スルモノハ實ニ親船、船頭ナリ故ニ船頭ナルモノハ其地ニハ下等社會ニ墮スト虽其
 業上ヨリスレバ真ノ高貴タリ又其ノ銀行者ト云ハサルヲ得キルナリ
 親船ト唱ヒテ日本沿海ヲ回漕スル所ノ船數ハ確知スル能ハズト虽其多キコト蓋シ方ヲ
 以テ算フニシ而シテ此船ノ所有主ニ二様アリ一ハ船持ト稱シ一人ニテ數艘ヲ所有シ數多
 ノ船頭水主ヲ傭使シ自己、高貴品ヲ運搬セシメ或ハ他ノ荷物ヲ賃積スルモノ又一ハ船頭
 ニシテ船ヲ所有シ(直乘ト云フ)自ラ其船ニ乘シ物品ヲ賣買或ハ回漕スルモノナリ
 船持ノ船頭水主ヲ傭フ手續ニ或ハ年給ヲ以テシ或ハ運賃ノ數分ヲ附与シ或ハ積荷ノ容捨
 ナリ以テ給料ニ代ルモノアリテ一様ナラスト虽其現ニ船頭以下ヲ傭使シテ其船ニ乘組マシ

ル時ハ其船中ノ事ハ細大トナリ船頭ニ委任スルヲ以テ回漕ノ賃料也為換貸金モ搭載ス
ル物品ノ賣買モ皆尽ク船頭ノ專ラ擔任スル所ナリ故ニ船頭ノ權限實ニ大ナリト云フベシ
然リト雖モ船頭ノ為換貸金ヲ為スハ元ヨリ明文ノ規則モナリ歐洲諸國ノ為ス所ト同日ニ
語ルベカニス大体ハ物品價格ノ五分ヨリ七分マテヲ貸スモノニシテ中ニハ證據金ノ名ヲ以
出スモアリ蓋シ其因テ起ル所荷主ノ船頭ヲ危ラシ海上不都合ノコトアルキノ證據金ニシ
テ又以テ海上危險受合ノ性質ヲ有スルモノナリ尤モ此金ノ利子為換料等ハ別ニ徵收セ
サレモ運賃ヲ高價ニシテ之ヲ償フト云然レハ船頭ナルモノハ賣買ト運漕ト銀行ト保險ト
ヲ併セ行ト云フモ敢テ過言ノ言ニアラズ

油賣買ノ事

油ハ何地ニテモ必需ノモノニテ之ヲ製造スル場所モ夥アレハ一般ニ下リ油ト唱フル品ハ
大坂和泉伊勢天坂和泉伊勢ヤ近國ニテ絞出ス油ハ総テ此ノ三ヶ所へ積出シ樽詰ヲ直シ燒
鉛ヲ印シ其上東京へ積廻ラ故攝津近傍ニテ造ル者ヲ總テ坂水ト唱セ美濃尾張等ニテ産ス
ル品モ尽リ伊勢油ト稱スルナリノ三ヶ所ヨリ運送スルモノニテ地水ト云ハ重ニ常陸下総
ノ兩所ニテ製造スル物ナリ而シテ水油ノ中色物ト唱フル荏水胡麻桐油等ハ皆地廻リノ生産

ニテ下リ物ニハ絶テアルコトナシ御一新前東京ニテ油ノ賣消セシ高ハ凡ソ十萬樽ニテ其
五六分ハ諸大名屋敷及ニ上野芝山其他大小ノ寺院ニテ賣消セル由ナリシカ目今ハ都下
ノ人負モ減シ且近年石炭油ノ輸入盛ナルヨリ水油ノ入荷高大ニ減却シ漸ク八萬樽ニ過
ギズシテ其中一万五六千樽位ハ秩父其外上州辺へ賣出ス趣ナレバ惣體ノ賣消高昔年ニ比
スレハ其三割餘モ減少セシナルベシ

凡ソ油一樽ト唱フルハ上方摂津和泉伊勢物四斗入地水三斗八升入りノ極リナレト坂水杯
ハ其名ノミニテ正実三斗九升位ヲ以テ一樽トナセシカ近頃汽船ノ廻漕開ケシヨリ樽数ノ
ミ多クシテ石数少ク時ハ無益ニ多ク運賃ヲ拂フコトニ成行ニ其損耗ヲ避クニ為メ當今
ハ四斗一升入ト唱セ四斗五合ヨリ四斗一升五合迄ヲ入実トナス由地水ニハ従前ヨリ此慣
習ヲ入実ニ増減ナキナリ

扱此油ノ賣捌ヲナス間屋ハ下リ間屋ト唱セ上方荷ヲ扱フ者御一新前ハ十軒餘リナリシニ
漸次ニ増加シ今ハ二十三軒アリ地廻間屋ト唱ヘ東國産ノ油ヲ賣捌ク者十五軒アリ此間屋
ハ御一新以來間屋株ヲ解シ後ハ素ヨリ定マル規則モナリ公然間屋ト稱スベキ者ニハア
ラ子ド自ツト從來ノ慣習ヲ追ヒ仲間ノ申合アリテ二百四ノ示談金ヲ出シ極リタル突合ヲ

ナサチハ下リ同屋ノ故ノ列ニ入り水油賣捌ノ業ニ従事スルコトハナシ難キ取極ノナリ地
廻リ同屋ニ加入スルモ此ト同ク若干ノ示談金ヲ要スル趣ナリ如示談金ハ些少ノ高故
同屋仲間へ加入スルコト容易ナレド油同屋ノ横習ニ限リ米酒等ノ同屋トハ反對ニテ時價
ノ高低ヲ上テ油元へ報告シ同時ニ價値ノ八分金ヲ廻送セサレハ油元ヨリ送荷セサル故結
局一旦買切リ利ヲ見テ之ヲ高ナト同シ譯ニテ多分ノ金額ヲ要スルコトナレバ同屋ノ中ニ
テモ現時其業ヲ廢シ各ノミヲ存スル者モ多クナリ

傍觀者ヨリ之ヲ窺フ時ハ油元ニテ時價ノ八分金ヲ領收セサレバ送荷セサル横習ナレバ強
テ同屋ニ依頼スルニモ及ハス誰ニテモ金ヲ出シ價ヲ善ク買フ者ハ直ニ賣渡ス姿ニ成行ク
様思ハレト此患ヲ防シ為同屋仲間ニ申合マリテ若モ同屋名目ナキ者へ直賣渡セシ證跡
ヲ見出ス時ハ其油元トハ一切同屋中ニテ取引ヲナサレ故一時ノ利ニ由テ終世ノ營業ヲ
失フガ為ト油元ニテハ此等ノ処置ハ決シテナシ得サルナリ

錢ヲ擇ルかきてのうつりかハリ洋々社談第二十二号
大沢清臣述

むろし和銅元年に和同開珎といふ錢を鑄造り世に行ハしめ給ひよりつきくみたりよつ
とる事ノヤ、多くなりして來て世人ノ其を嫌ふあまりよおほやけにてつくらしめ給ひ

もも文字まじからず或ハ輪郭のかけたることをきらいて之ヲ捨し事ありきまたのちハ
外國のを大い求めて世にはとらしめたりしよ其をつらふべき制のうつりかハリしあ
らましといハんと其ハ續日本紀ハ和銅七年九月甲辰制自今以後不得擇錢若有實知官錢
輒嫌擇者杖一百其濫錢者主客相對破之即送市司とみえまた三代實録に弘仁十一年六
月九日下知大藏省曰鑄錢司所進新錢文字頗不明而失體勢亦有小派行用無妨宜猶檢納
而伺愚者不悟此語事任己心擇棄不受或稱文字不全計十端二三或號輪郭有缺拳百欠八九是
以要件未者飢口難餉買七綿者寒身不暖宜勝于路頭嚴加禁止若有乘虛隨即決答と之ま
同書に貞觀七年六月十日己未禁京畿及近江國賣買之輩擇棄惡錢と之えいふとよてい
とあきらかなりしハあれともたねえり棄るものやまざりしハ貞觀十四年九月廿五日
壬辰新鑄貞觀錢文字破滅輪郭無全凡在賣買嫌棄大半遣責鑄錢司令分明鑄作と三代實録よ
見之たるが如き事もありしかりか、りしよりのち天德二年ハ乾元大寶といふ錢を鑄造ら
しめ給ひしころまでハ大なたおなじ判かりし事ハ延喜の大藏式ハ凡鑄錢司所貢錢文字
不明而失體勢無妨行用者美擇棄とみえたるにていちあきま建武元年ハ錢をのくらん
とし給ひし時の詔書ハ降及近古求之外國と建武記ハ見えたる如く當時はやく外國の錢を

ものして世は行はるゝことありふりかの室町の如きは永樂錢を強ちよ外國よこし未
めてよへ用いしめたりしまゝ其用ふる制もまたいたくおとせうよ成りたり其ハ建武式
目追加ハ高貴輩以下撰錢事堀應 一近年迄撰錢之段太不可然所詮於日本新錢料足者堅可
撰之至根本渡吾錢永樂洪武宣德等者向後可取渡之但如自許之錢可相交 若有違背之旗者速可被處嚴科矣松
田丹後守長秀とみえまゝ 定 一七イセンノギ京錢ウケヒラノソク其外ノトタウ錢
エイラクゴウブセントクワレ 錢租ワレトラ以下トリ合テ百文ニ三十二文ケリヤウ三分一
ケリヤウハ假令ノ於向後トリソクスベキ事 一アリ 錢壹貫儀一切可停止事 右條々堅
被禁止訖若背此旨族アラバ権門勢家ノヒリクワンライハス於其身者處嚴科至私宅者堀所
ニオコナハルベキ由所被仰下也仍下知四件 永正五八七 沙彌信祐 近江守三善朝臣貞
運トみえまゝ東寺文書ヲ 定 撰錢事 一百文の内口おしの分あるせよ十文洪武ニ文宣
徳ニ文 永樂ニ文 已上廿文なり 一地せよの内よき永樂五文 大觀嘉定以下うらゝ文字のあ
るせよよき錢の内たるべし 一少分つゝもこれをかふて用べし 一日本せよわれせよ
ものせく但少かけたるはよき錢の内たるべし 一口おしの程うり物をかふがきにあす事
あらば罪科同左 右條々堅被定置訖若有違背之輩者男ハ頸をきり女はひびきをきらるべ

きなり恣にえり又えらする輩あらば町人として注進せしむべし見かくさは同罪たるべ
し私けんだん同町人可致注進之由被仰下也仍下知四件永正九年八月卅日 對馬守平朝
臣 散位神朝臣 近江守三善朝臣 美濃守藤原朝臣とみえたるなごめて其うつりかはり
のあらましハいとくあきらめかりあ不天正十五年子豊臣氏の鑄造らゝのれし錢の事よ
りこかいさまの事をいはいはま不しかれど其はいともあらん時よものすべくなむ

日本家屋保險論 東京大学医学部教授兼大藏省御倉 東京日新新聞書六七抜萃

日本全国ニ於テ年々火災地災風災水災戦争災等ノ為ニ起ルル家屋損害ノ平均及ニ總
テ此危難ニ方リ家屋保險ノ為ニ必需ナル方法ヲ設ケ所有物ヲ保護スルカ為メト家屋主
地ヲ確實ナル典物トカスカカメト並ニ金銀貸借ヲカスニ容易ク人ニ信ラテサシガ為メニ
設ケルル契約ノ方法ヲ左ニ述ブ

夫レ文明國保險法ノ廣大ナル言語ニ尽シ難シ余ハ博ク其事ヲ述フルヲ欲セス爰ニ保險
ノ方法ニ就テ尤モ著名ナル專門學士ノ一人ヲ挙ケント欲ス千八百六十九年普魯士國民撰
議院ニ於テ貿易及ニ職業ノ委員タリシ顧問ヤコビー氏ハ火災保險ノ事ニ関セル普魯士政

府ヨリ布告スル所ノニケ條ノ議業ニ就テ左ノ條件ヲ明言セリ

本朝金銀銅外國へ入シ禁教ノ事 同朝旧章録抜萃
新井白石編纂

慶長五年ヨリ前上古ヨリノ事ハ暫ク論セス室町殿ノ代ヨリ信長秀吉兩代ニ至ル迄西國中
國ノ地ヨリ外國へ入シ金銀ノ教イカ程ト云事シルベカラズ是レ一

慶長六年ノ夏交趾ノ船来リ當家ニ及ジ海船ノ来レル始ナリ是ヨリ正保四年マテ四十六年
カ間我國ノ金銀外國へ入リシ事イカ程ト云事シレス是レ二

慶長六年ノ夏外國ノ船ヲ我國へ入リ始テ寛永元年マテ二十四年ノ間九州ノ内イッレノ浦
へモ心俣ニ船ヲヨセテ高賣シタリ東國へモ船ツキ高買セシトモアリ 慶長四年ノ上総大湊
浦ニ黒船着シテアリ

長寄ヨリ外ニテノ高賣ヲ禁セラレシ事ハ寛永二年ニ始レリサレバ二十四年カ間諸國ノ浦
ニテ外國船高賣セシキ取行ヘシ金銀ノ教ハシムヘカラズ是レ三

慶長六年ヨリ寛永十一年マテ三十三年間ハ御朱印船トテ我國ノ商人ハ西馬港ノビスパン
置 安南呂宋等ノ國々ニ年毎ニ行テ高賣シ此外ニハ私ニ行テ高賣ノ事年々ニ絶ス其時ニ我國

ノ金銀ヲ持行シテ其教イキテト云事ヲ知ラス是レ四
寛永ノ始マテハ今来レル國々ノ外ニ交趾占城南安呂宋ビスパンイキスレウタイタリヤ西

馬港ト云國々ヨリ年々ニ来リアキナシタリ其後耶蘇ノ法ヲイタク禁セラレシヨリ是

等ノ國ヨリ來ル事ヲヨルカレズ是等ノ國々ハ持行シ金銀ノ數ミシルベカラズ是五
 寛永ノ始耶蘇ノ法ヲイタリ禁セラレシ前カク三十四年カ何我國ニテ是法ヲ信更セシモ
 六年ヨリ其國々ノ師ノ元ハ賜禮物ノ金銀是ハ高クイリラト三事ヲシラス是六
 近年ニ至テ長崎ニテ高賣ノ外私ノ高賣ニ外國ハ入シ金銀ノ數ヲシルベカラズ是七
 慶長ノ始ヨリ今年ニ至テ對馬國ヨリ朝鮮ハ入シ金銀ノ數詳ニシルベカラズ是八
 古ヨリ今ニ至テ薩摩ヨリ琉球ハ入シ金銀ノ數詳ニシルベカラズ是九

右九ヶ條ノ事ハイツレモ詳ニスベカラズ

此九ヶ條ノ外ニ長崎一所ヨリ外國ハ入シ金銀銅大數光レシトコロヲ左ニ記ス

- 一金二百三拾九万七千六百兩
- 一銀三拾七萬四千貳百九拾目余
- 一銅壹億壹萬壹千四百四拾九萬七百斤余
- 一金六百拾九萬貳千八百兩余
- 一銀百拾貳萬貳千六百八拾七拾目余
- 一銅貳億貳萬貳千八百九拾九萬七千五百斤余

正保五年ヨリ寶永五年マテ凡六十二年
 間外國ハ出シ數

全上

寛永三年ヨリ寬永五年マテ凡三十二年
 間外國ハ入シ數

慶長六年ヨリ正保四年マテ凡四十六年
 間外國ハ入シ數并ニ正保二年共カク總數

慶長六年ヨリ正保四年マテ凡四十六年
 間外國ハ入シ數并ニ正保二年共カク總數

寛永三年ヨリ寶永五年マテ凡六十二年
 間外國ハ入シ數并ニ正保二年共カク總數

三年ヨリ此カクノ數ヲ二倍セシ積ナ

諸國風説記 經商要録抜萃
佐藤信淵著

余州物ノ法ヲ研究センコトヲ欲シテ遍リ海内ヲ將歴シ各國ノ土性ト氣候ヲ考ルノ餘間ニ傍
 ヲ其風俗ヲ巡覽シ且其民談ヲ聞キ竊ニ日本全國ノ事跡ヲ熟察スルニ凡ソ西南諸州ハ早
 リ開ケタルヲ以テ諸事行届テ開物ノ業ニ於テ遺策少ナシ東北諸州ニ至リテハ國土甚々稚
 シテ遺策極テ多シ然レモ國土ノ虛實ヲ以テ其輕重ヲ論スレハ東北ハ重クシテ西南ハ輕シ
 是西南ハ東北ヨリ頗ル奢侈ナルガ故ナリ且又銀札ヲ用ルノ國ニ至テハ境內極テ空虚ナル
 者多シ何トナレバ金銀ノ代リニ紙札ヲ用ルガ故ニ己カ國內ニハ金銀ノ代リニ札ノ遺
 リ真ノ金銀ハ皆他國ニ出テ出ルヲ以テナリ銀札ハ虛利ノミ有リテ實禍ヲ為スコト此レヲ以
 テ察スベシ萬一不虞アルノ時ニ及テハ必至ト窘急ニ迫ルベキハ此銀札ノ禍ナリ抑モ此銀
 札ヲ製スル初ニハ凡ソ金十萬兩分ノ札ヲ製スレハ必ス真金十萬兩ヲ積置テ其兌換スル時
 ノ料ニ備ルコト法ナリ最初ハ法ノ如クニ真金ヲ備タルモ江戸ニテ財用ノ手窘ナル時ニハ先
 コ此金ヲ代物願ヲシテ或ハ千兩遣ニ或ハ二千兩遣ニ漸クニ皆コレヲ用テ尽シテ今ハ金藏

ハ懸磔ト为リ壁土ミ剥落ケテ出入スルヤウニナリテ有ル國多シ故ニ益暮ニ季ニ大金
ノ拂ラユスニ及テ国内ニハ紙札バカリニテ真金ナリ依ニ勝手役人金ノ才覚ニ大坂ニ赴
ク等大騒ナル者アリ且又或ハ分外ニ金ヲ遣ニ棄テテ欲シテ今新クニ銀札ヲ製ラントテ
頼フ國ニ有リト云フ大ナル失策ナリ從來用ヒ来リシ國ハ虎ニ騎タル勢ニテ令更急ニ止
リ難ケレハ新ニ頼ヒユス國ニ至リテハ一桉アルニキナリト云フ東北ノ諸州ニハ銀札ヲ用ル
者鮮シ此レモ先年ハ用ヒタリシモ今ハ大抵崩壊テ止タル由ナリ然レハ近來米札ヲ用ル者
ト西替屋ノ頼リ札ト名ケル者アリ此レモ亦銀札ニ近キ者ナレハ銀札ヨリハ其禍少ナシ然
レハ此等ノ諸件ハ共ニ其國ヲ衰微セルノ一端ナリ土佐ノ國ハ改令甚ク嚴正ニシテ痛ク奢
侈ヲ警メ固リ浮華ヲ禁ス故ニ其國風極テ質朴ニシテ萬民能ク其家業ヲ勤ム南海ノ諸國
何レモ銀札ヲ用カル者ナキニ独リ土州ノミハ嚴正ニ此レヲ禁シ凡ソ貨物ヲ賣買スルニ大約
錢ヲ用ヒテ金銀ヲ用ルル稀ナリ故ニ金高ノ物ヲ買ント欲スルハ必ズ錢ヲ數多ク馬
馳テ出行リナリ國ヲ治ルル土州ノ如キハ道ニ近シト云フベシ
近來何レノ國モ豪民ヲ尊敬シテ甚ク窮民ヲ輕ニス是大誤ナリ何トナレバ貧民ノ國家ノ害
ヲ作ス一歩シ然ルニ豪民ニ至リテハ國家ノ禍ヲ為ス一極テ大ナリ其故ハ豪民ハ其富盛

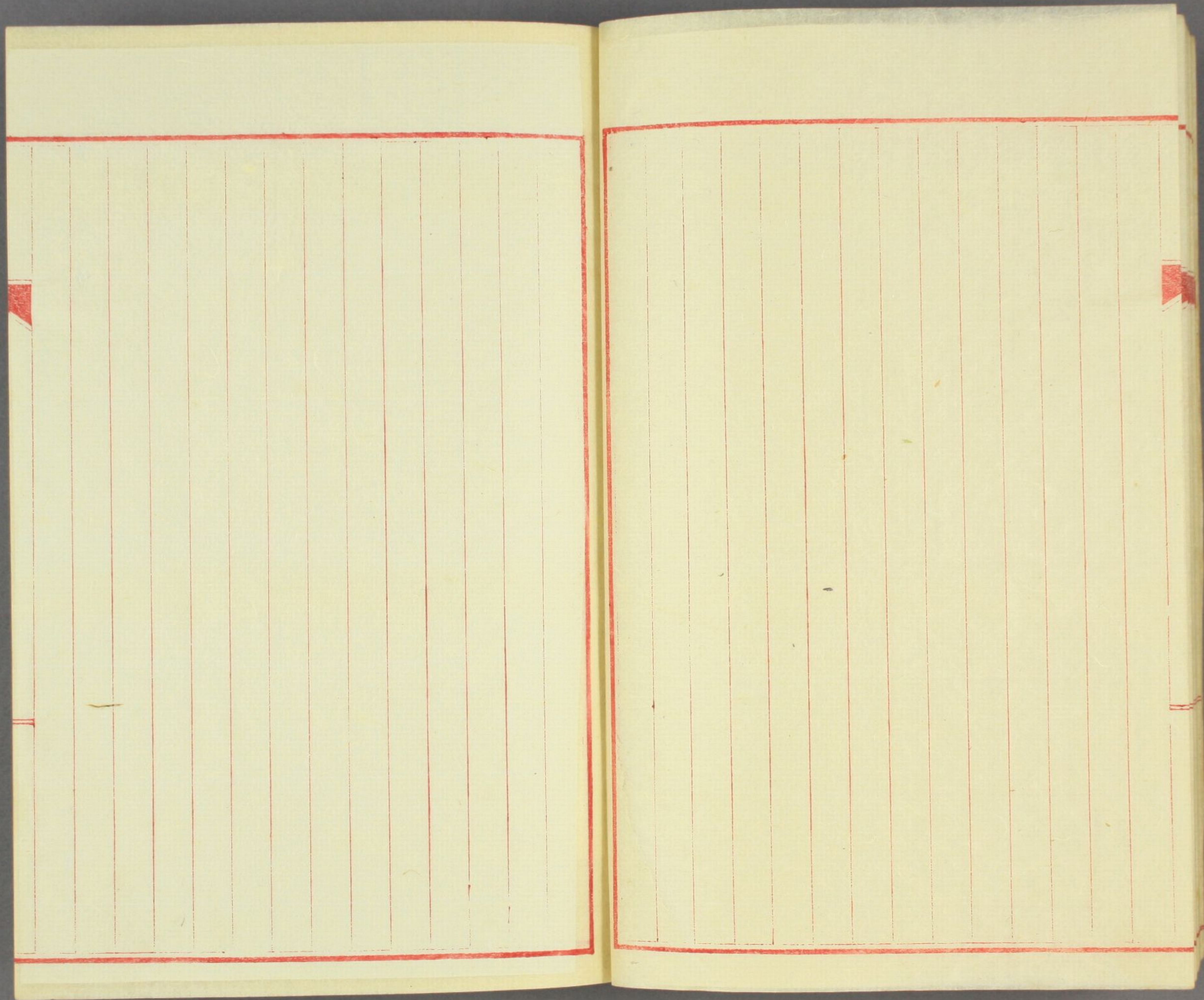
ノ勢ニ乘シテ數十家ノ産ヲ兼併ス故ニ小百姓ノ病難禍災等ニ遇テ困窮スル者ハ田島モ
家屋敷モ悉皆豪民ニ賣ヒ取ラレ佃客ト为リ流民ト为テ終ニ他國ニ離散スルニ至ル故ニ
凶年饑歲ニモ非スシテ百姓ヲ饑寒ニ迫ラシムル者ハ豪民ナリ其禍モ亦極テ大ナルニ非ズ
ヤ余遍リ諸國ヲ巡覽シテ熟ク考ルニ享保ノ初ッ吾祖父不昧軒翁ノ游歴中ニ記スル所ノ
人別ト此文化ノ末年ニ余カ算タル所ト比較スルニ大ニ減少セリ國ニ因リテハ増加ケル所
モ無キニハ非サレハ實ニ驚ベキノ減耗ナリ今夫レ諸國ノ郷里ヲ審カニ閱スルニ小民ノ家
家ニ兼併セラレテ既ニ其産ヲ失ヒタル者將ニ十中ノ三四ニ及ハントス田島ノ益荒レ戸數
ノ益減少スルルハ皆是豪農ニ併吞セラルルカ为ナリ然レハ奉世富人ヲ尊敬シテ小民ノ
流散セルヲ首ニス人民繁息スルルハ能ハカル所以ナリ獨リ日向ノ飯肥候ノ國ハ古來而度
嚴肅ニシテ田島ヲ始メ山林廣野ニ至ルマテ悉皆國君ノ有ニシテ絶テ百姓ニ委ルル無シ故
ニ一時富ク致ス者有リト虽レ他ノ産業ヲ兼併スルル能ハス莫クシテ豈豪ノ秀タル家ニ鮮
ク又飢寒ニ迫ルル民モナシニ
日向延岡候ノ國ハ土地頗ル廣ク飯肥候ニ倍ス然レハ此國ハ田島ヲ始メ山林山澤原野古來
皆百姓ニ委テ賣買セシムルガ故ニ山林ノ諸材木ヲ領主ノ自由ナラケルル多ク國君唯其

の荷積をのしはして積切し旨なる早酒をへ通しおれども
みへた酒は贈りて早酒は相場佛儀をぬらして之を賣拂
能はれども佳しとの好みおし早酒者何賣拂の好むとい
入れ拂とあはさる

屋敷の初荷と唱へるは上方(根州)高下限りしるを中玉と
初荷の税をのんはれどもおれども賣出を向て現時と斯く
改進せりといふ所なり

府下ニ又直し酒をと称する者ありと酸敗せし酒を大馬手
料をとりて酸味を除き汚濁を海へ丹敷出せるを中玉
とせりといふ中玉は日ごとく酒を賣出り直して賣出
たりともあり候し酒を直し酒を元一旦酒敗し酒を
府下にて賣出らば酒を直し酒を賣出るとかや酒を
酒を直し酒を賣出るとかや酒を賣出るとかや酒を

ハ方徳海岸一賣出るといふ之を酒といふ酒あり酒を
日酒情合し自あるといふ



以下
8 丁
白紙

芝窓漫筆卷之二

目錄

芝窓漫筆卷之二

目錄

安政五年ハルリス氏日米開港入税則制定日々新聞
十一年七月十五日

初、米国公使故トウシロバハルリス氏々日米兩國ノ為ニ條約ノ稿業ヲ草セシニ當リ
テヤ一方ニ向テハ日本政府ヲシテ將來ニ於テ相當ノ海關稅ヲ收入シ以テ貿易ヲ保護スルノ
貴額ヲ償フニ餘アラシモノト望ミ又一方ニ向テハ外商ヲシテ海關稅ノ重荷ナルヲ為ニ
貿易ノ通路ヲ漸進セラル、ノ嘆ナカラシ、ントテ冀テ深ク稅目ヲ制定スルニ思慮ヲ費シ
其宜キニ從テ之ヲ取極メタルハ即テ安政五年(十八百五十八年)ノ條約ニ附シタル稅則第
七則ニ於テ明カナリ其法タルヤ輸出入品ヲ簡易ナル數類ニ分テ第一類(貨幣、造鑄シ或ハ
造鑄セサル金銀、日用衣服、賣品、ナラサル家財、書籍、無稅品トシ)第二類(船舶ヲ造修、裝載スル
用具、捕鯨用具、鹽漬食物、麵包及料粉、鳥獸、石炭、材木、米、穀、蔗、鐵、錫、鉛、錫、生糸)五分稅品
トシ第三類(一切ノ酒類)三分稅品トシ第四類(前條ニ奉ケサル諸品)二分稅品トシ又
金銅、樟銅、外ハ一切ノ輸出品ヲ五分稅トシタリ若シ此時ニ於テハルリス氏ニシテ公卒ノ
心ヲ失ニ偏頗ノ念ヲ懷カシメハ稅目ヲ左右スルニ何、難ク之レアラシヤ然レハハルリス
氏ハ條約ニ福ノ重事ニ付キ幕府ノ無知ニ乘レテ其不利ヲ謀リ已レカ信任ニ負リ忍ビサ
ルヲ以テ其苦心ノ結果ヲ輸入稅ニ割輸稅五分ノ適度ニ顯ハシ幕夫カ開港ヨリ五年後ノ

税則改正ニ於テ更ニ其實験ヲ以テ利害ヲ明折シ日本ノ為ニ收税ノ益ヲ失ハサラン
希回シタリキ是レハルリス氏カ日本ニ在ルノ間ノ言行ト及ニ帰國後ノ演説等ヲ以テ其然
ルヲ知ルニ足ル所ナリ

ハルリス氏カ此條約ヲ江戸ニ調印セシハ其ニ安政五年戊午六月十九日ナリ(第七月廿九日)
引続キ和蘭魯西亞、二國モ其七月ヲ以テ同様ノ條約ニ調印セシカ同日ノ英吉利條約
ニ於テ初ラ木綿及ニ羊毛ノ織物ト云ヘル一語ヲ税目ノ第二類中ニ挿入セシヨリ此重
五タル輸入品ハハルリス氏ノ注意アリシニ拘ラス夫ノ二割税ヲ脱出シテ忽ニ五分
税タルノ特例ヲ右ノタレバ其後ニ取結ヒタル仙蘭西葡萄牙日耳曼以太利諸州
ノ條約モ亦皆コレヲ標準シ殊ニ日本政府ヨリ向後外國政府及ニ其臣民ニ許可
スヘキ殊典アル時ハ我政府國民ヘモ同様ノ免許アルヘシト云ヘル不都合、個
條ハ條約中ノ明文タルヲ以テ木綿及ニ羊毛ノ織物、五分税ハ一般普通ノ輸入税
法トナリ未ダ開港ニ至ラサル前ニ於テ早ク日本政府ヲ一割五分ノ減税ヲ行ハ
シメタリ而シテ幕吏カ之ヲ覺ラリシハ残念ノ事ナリト是レ原來之ヲ覺ルニキ
實驗モテク學問モ無ケレハ宜ニ止ムヲ得サルノ不幸ト云ハケルベカラス

野蒜港疏鑿ノ概要 中外物價誌報

夫レ北上川ハ三陸第一ノ大河ニシテ船路五十里ヲ經石ノ卷港ニ至リ海ニ入ル
然ルニ其吐口タル甚タ險惡ニシテ且ツ沙洲ノ山ヲ為スヲ以テ干潮ノ時ハ水深
六尺ノ上ニ出ス故ニ親船ハ洋上ニ在テ物貨ノ揚ケ卸ヲ為サ、ルヲ得ス假令空
船ニテモ濤潮ノ井ニアラサレバ川内ニ入ル能ハズ殊ニ吐口ハ南風及ニ東風
ノ激風ニ向テテ以テ偶々川内ニ入りシモノハ空シク三十日間モ滯泊スルニ至ル
況ヤ蒸氣船ノ如キハ二里ヲ隔ル抵テ濱ノ灣ニ繫リ幸クシテ船荷ノ積卸
ヲ為ス故動モスレハ其際小船ノ覆没アリテ許多ノ利益ヲ妨害セラル、
實ニ嘆息ノ形態ナリ

然ルニ今般州鑿垂セラル、運河ハ石ノ卷ヲ距ルニ里余北上川ノ上流ナル高
屋敷村ヨリ直線ニ赤井村ノ辺定川ニ至リ同川ヲ横斷シ夫ヨリ海岸ニ沿テテ
直行シ鳴瀨川ノ吐口ニ達ス而シテ高屋敷ノ閘堰ヲ造リ北上川ト分隔シ
漲溢ヲ防クト云フ

鳴瀨川ノ吐口野蒜ノ近傍ニ入江アリ之ヲ深川ト唱フ運河ヲ此入江ニ取リ其

然河流ニ
祖河運改
三ノ上ノ大
運シ石卷
廣州村ヨ
疎鑿垂シ
運シ以上
北上川ノ
至リ海ニ

税則改正ニ於テ更ニ其實験ヲ以テ利害ヲ明折シ日本、カノ、收税ノ益ヲ失ハサランイラ
布回シタリキ是レハルリス氏カ日本ニ在ルノ間、言行ト及ニ帰國後、演説等ヲ以テ其然
ルヲ知ルニ足ル所ナリ

ハルリス氏カ此條約ヲ江戸ニ調印セシハ其ニ安政五年戊午六月十九日ナリ(第七月廿九日)
引続キ和蘭魯西亞、二國モ其七月ヲ以テ同様ノ條約ニ調印セシカ同月、英吉利條約
ニ於テ初ラ木綿及ニ羊毛ノ織物ト云ヘル一語ヲ税目ノ第二類中ニ挿入セシヨリ此重
五タル輸入品ハハルリス氏ノ注意アリシニ拘ラス夫ノ二割税ヲ脱出シテ忽ニ五分
税タルノ特例ヲ右ノタレバ其後ニ取結ヒタル仙蘭西葡萄牙日耳曼以太利諸州
ノ條約モ亦皆コレヲ標準シ殊ニ日本政府ヨリ向後外國政府及ニ其臣民ニ許可
スヘキ殊典アル時ハ我政府國民ヘモ同様ノ免許アルヘシト云ヘル不都合、個
條ハ條約中、明丈タルヲ以テ木綿及ニ羊毛ノ織物、五分税ハ一般普通、輸入税
法トナリ未ダ開港ニ至ラサル前ニ於テ早ク日本政府ヲ一割五分、減税ヲ行ハ
シメタリ而シテ幕吏カ之ヲ覺ラリシハ残念ノ事ナリト是レ原來之ヲ覺ルニキ
実験モナク字例モ無ケレハ望ニ止ムヲ得サルノ不幸ト云ハカラルベカラス

野蒜港疏鑿ノ概要 中外物價誌報

夫レ北上川ハ三陸第一、大河ニシテ船路五十里ヲ經石ノ卷港、至リ海ニ入ル
然ルニ其吐口タル甚タ險惡ニシテ且ツ沙洲ノ山ヲ為スヲ以テ干潮ノ時ハ水深
六尺ノ上ニ出ス故ニ親船ハ洋上ニ在テ物貨ノ揚ケ卸ヲ為サ、ルヲ得ス假令空
船ニテモ滿潮、井ニテラサレバ川内ニ入ル能ハス殊ニ吐口ハ南風及ニ東風
激風ニ向テテ以テ偶々川内ニ入りシモノハ空シク三十日尙モ滯泊スルニ至ル
況ヤ蒸氣船ノ如キハ二里ヲ隔ル抵テ濱、灣ニ繫リ幸クシテ船荷ノ積卸
ヲ為ス故動モスレハ其際小船ノ覆没アリテ許多ノ利益ヲ妨害セラル、
實ニ嘆息ノ形態ナリ

然ルニ今般州鑿セラル、運河ハ石ノ卷ヲ距ルニ里余北上川、上流ナル高
屋敷村ヨリ直線ニ赤井村ノ辺迄川ニ至リ四川ヲ横斷シ夫ヨリ海岸ニ沿テ
直行シ鳴瀨川ノ吐口ニ達ス而シテ高屋敷ノ閘堰ヲ造リ北上川ト分隔シ
漲溢ヲ防クト云フ

鳴瀨川ノ吐口野蒜ノ近傍ニ入江アリ之ヲ深川ト唱フ運河ヲ此入江ニ取リ其

北上川ノ石ノ卷ニ通ル
國ヨリ天然ノ河床
ノ後三世ニテ改
運河ニ至リ海ニ注

水面、東部ヲ浚ニ干潮五尺、深サニ至ラシメ其西部ハ港口ニ適セン為メ二間
二尺、水深ヲ取ル、因テ深川ノ入江ハ即チ内港トナリ其港ノ幅ハ五十間其
長サハ二百五十間ニシテ巨大、海船三十艘ヲ容ルモ尚ホ小船ノ通路ニ障
碍アルコトナク又後來何程ニ開廣スルモ自在ナル地形ナリ海港ノ西側ニ干
潮ノ水深三間ニ達スベキニワ堤ヲ築キ出シ海船ノ出入ヲ護シ又宮戸島ノ
後背ニシテ此堤ト相對スル海面ハ即チ外港ニテ蒸汽船等ノ安全ニ碇
泊シ得ベキ場所トナルナリ物貨ヲ積ミ北上川ヨリ下ル川船ニシテ船足シ
三尺以上ニ至ラサルモノハ高屋敷ヨリ運河ヲ經テ深川ニ來リ其積荷ヲ親船
ニ移シ或ハ右二堤ノ間ヲ出テ蒸氣船滯泊ノ所ニ至ルヲ得、北上川ヨリ深川ニ
至ル運河ノ全長ハ高屋敷ヨリ深川迄三里五丁ニシテ其水底ノ幅ハ五間
深サ干潮五尺ナリ而シテ掘鑿セシムヲ以テ兩岸ニ馬踏ニ二間程ノ堤
ヲ築キ平常ノ往還トス、北上川ヨリ運河ハ分流ノ所ハ水制ヲ置キ沿岸
ノ毀壞ヲ防ギ又鳴瀨川ノ吐口ヲ西ニ移シ堤ヲ以テ港ト分隔シ沙泥ノ
港内ニ流レハルヲ防ク為メニス

右ハ工業ノ概畧ナレド又以テ一班ヲ知ル足ラシ此工事後エバ陸前陸中ノ物
産ハ盡ク此ニ輸送セン如何トナレバ第一ニ北上川全川ノ運輸ヲ引付ケ第二
ニ鳴瀨川ノ運輸ヲ第三ニハ塩竈辺ノ海運ヲ招ク等皆此一ヶ處ニ蒐集シ
加フルニ巨艦大船モ安全ニ碇泊シ風雨ノ際モ容易ニ荷物ノ揚ケ卸シヲ為
シ得ル等ノ便益アル決テ他ニ比スベキモノナシ之ニ反シテ石ノ巻港ハ全ク無用、
地トナルヲ以テ其地ノ人民ハ野蒜ニ轉居セサルヲ得スト、且ヒ之ニ畢竟一時ノ
事ニシテ斯クノ如キ良港ヲ得テ之ニ移住セハ漸次物産ノ運輸ヲ増加シ
商賣モ為メニ數層ノ繁昌ヲ如ヘンコト必セリ少シク前途永遠ノ利益ニ注目
スル者ハ一時移住ノ不便ヲ鳴リ、久而已ナラズ却テ雀躍シテ其支度ヲ為ス
ベシト信ズ

吾輩ハ此工業ニ就テ又更ニ自ラ心ニ期シテ一大美舉ノ近キニ在ルベキヲ信ス、
ハ何トナレバ該地ニ比隣ナル阿武隈川ハ其源ヲ白川ニ發シ福島ヲ經テ凡三十里
ニシテ海ニ入ル實ニ樞要ノ運路ナリト、且ヒ如何メン海口ノ險惡ナルヲ以テ舟船
碇泊スル能ハス天然ノ運路モ全ク死物ト同シ、豈ニ痛惜セサルベケンヤ、若シ

該川ノ吐ロヨリ左批シテ運河ヲ塩竈灣ノ入江ニ達シ野蒜ノ港ニ合スルヲ得バ若
代船名陸前等富饒ニ名アル地方ノ今日迄終テ陸送ニ頼シモノハ尽ク其物産
ヲ此ニ運漕シテ野蒜ニ送ランコト論ヲ族タズ膏テ聞ク今ヲ去ルニ百余年
前田仙臺藩ノ頃此ニ見ルアリテ一旦着手セシガ如何ノ事故アリテカ半途ニ
シテ廢シ今尚ホ其痕跡ヲ存スルト云フ況ヤ今日州明ノ政府進歩ノ工業ヲ以
テ之ニ従事センコト何ノ難キ事アラシ吾輩ハ深ク信ス政府ハ費用ヲ吝マズ
又今回ノ築港ニ満足シテ之ヲ等閑ニ附セス断然トシテ起業セラシムコトヲ
原稱物産漕ヲ載セタシヒ茲ニ有畧ス

右ノ額ハ僅少ナリト云フベカラズト虽氏其地勢ト天然ノ富トヲ見ル時ハ輸出入
ノ額ハ實ニ僅少ニシテ未タ以テ人智ト地カトヲ尽シタル者ト云フベカラズ蓋シ
其道路ヲ妨害スルモノハ運輸ノ便ナラサルニ因ルナリ今ヤ幸ニ蒸氣風帆船
アリテ時ヲ選ハス航海ヲカスモ良港ナキヲ以テ充分ニ其ノ便利ヲ活用スル
事能ハス為メニ物價ニ影響シ徒テ天然ノ富ヲ埋没セシモノト云ハサルベカ
ラズ試ニ見ヨ現今石ノ巻ニ於テ米ヲ買ヒ蒸氣船ヲ備フテ東京へ廻サンニ

其運賃ハ百石ニ付六十五回ヲ去リルヲ得ス又風帆船ヲ備フモ五十八回ヲ要
ス而シテ石ノ巻ハ東京ヲ距ルコト蒸氣船ナレバ僅ニ一晝夜ニシテ達スル地ナリ
風帆船ト虽モ七八日ノ上ニ出テズ然ルヲ斯ク高價ノ運賃ヲ為スモノハ或ハ未ダ
蒸氣風帆船ヲ所有スルモノ少ク稍專賣ノ如キ権アリテ為メニ致分ノ高價ナ
ル額ヲ免ケレサルモノ有ベキト虽モ要スルニ該地港口ノ險惡ニシテ安全ニ碇泊
ヲ為ス能ハサルト所謂沖積ニナルヲ以テ常ニ積付ニ日數ヲ徒費スルトヲ笑シ
大シ夫レノ高價ヲ要スルハ又已ヲ得ザルモノアラシ然レミナラス該地積付ニモ折
ケ漲ナレバ五回(百石ニ付)寒風澤ナレバ七回ノ入費ヲ要シ其上船方ニ待賃ヲ出ス
コトアリ故ニ危険受合其他ノ入費ヲ笑スレバ百石ニ付殆ト九十回ノ失費アリトス
此夥多ノ入費ハ結局其物品ノ代價ヲ殺減セサレバ買フ者ナキハ普通ノ定理ニテ
之レ該地方ト東京ト物價ノ非常ニ懸隔アル所以ナリ物産ノ隆興ヲ妨害スル之
ヨリ甚シキモノナシ

八郎潟開港報知新聞

秋田縣下秋田郡ヨリ山本郡ニ亘リテ一湖アリ八郎潟ト曰フ此湖ヤ本縣ノ西海

岸に接シ大丸長サ七里幅四里大湖ニシテ西方ニ其口ヲ開キ以テ海ニ吐リ夫レ
秋田縣ハ東北ノ一隅ニ在リテ其僻遠ナル他縣ニ比テ隨テ人民モ亦時様ニ後ル
是レ其地位ノ僻陋ニシテ三面皆テ高山ヲ以テ繞匝シ陸路運輸ノ便ニ乏シク一
面ハ西海ニ接スト虽ニ大船ヲ以テ碇泊スヘキ良港ナキカ故ニ海路モ亦其
便宜ヲ欠クニ奇シ是レ本縣ノ開明ニ後ルヲ致ス所以ナリ縣令石田君大ニ此
ニ憂フルアリテ此ハ郎潟ヲ以テ港州ヲ開カントテ希望セラレタリ工部ニ大ニ
此議ヲ自トセラレシマ則ニ工部大掌櫃ノ教師ペーリー氏ヲシテ其生徒十余名
ヲ隨ニ派出シテ實地ヲ親檢セシメラレタリ是レ本年四月ナリレペーリー氏ハ此地
ヲ親檢シ更ニ一策ヲ案出シ港州ヲ開クハハ郎潟ニ於ケンヨリ寧ロ其湖ヨ
ニ近接セル舟川ヲ改良シテ安全ノ良港ニカスニ若ストセリ蓋シハ氏ノ意匠ニ
ルハ八郎潟ハ水底甚タ浅キヲ以テ之ヲ開墾スルニ費用又隨テ多カラストモス
然ルニ舟川ノ若キハ其地ノ西南ナル右方ニ山岬アリテ海ニ出テ天端海底ニ
定テ暗礁ヲ作り自カラ天工ノ港体ヲ具ヘ從來一二ノ船舶ヲ置クモ稍ヤ
通セシヲ以テ今更ニ之レヲ改良スルモ亦難カラケルヲ考定シ来リシモノナ

ラシム本縣ノ廳議ニ出タル策ハ則テ此湖ノ正北三里許ヲ隔ツル米代川ト東南
四里許ヲ距テ雄物川トヲ分水シ共ニハ郎潟ニ注ケシメ兼テ舟川ニ近接セ
ル取本村ニ湖口ヲ開カントスルニ在リタリ云而レ後又土木局長石井君ハ同
局所雇蘭人工師ドブソン氏ヲ隨ニ更ニ實地ヲ駭セラルドブソン氏ハ此地
ヲ駭セシ考案タルトハ八郎潟ヲ開クモ又舟川ヲ改良スルモ元ヨリ難キ工
事ト謂ニテラ不而レテハ郎潟ヲ開クニハ其湖口ヨリ湖中ニ一條ノ深水路
ヲ設ケ其西側ニ水堤ヲ築クベシ又舟川港ヲ改良スルニハペーリー氏ノ説
如ク暗礁ヲ基礎トシ水堤ヲ築クニ外ナラスト云

凡ソ山岳ノ間ニ在テ海水ニ臨ムルノ無ク且大河ノ流モナキ固ハ貨物ノ運送
不自由ニ山沢ノ間ハ相类及ヒ栗柿蒲桃等皆上品ヲ生ス又山谷ノ利ハ蠶及
漆ヲ出スト大ナリ因テ以テ諸漆器ヲ製シ描金ヲ風雅ニシテ夥ク作り出ス
ベシ尚又諸良材山等ハ固リ山國ノ物ナリ又金銀銅鐵錫鉛等モ多カルベク
其他美玉寶石及ヒ越砥、硯石、硫黃、明礬等ノ諸藥石類モ有ベク或ハ

鳥獸ノ皮角羽毛モ多ナルニシテ山間ノ國ハ能ク農政ヲ脩ルハ富実ナルト
甚ク易シ唯ク運送ノ不自由ナルヲ以テ通移州國法ノ施シ難キ耳肥後相
良豊後竹田美作津山大和郡山近江彦根美濃大垣奥州會津白川二本
松出羽米澤山形秋庄信濃松本松代植田上野厩橋高崎下野宇都宮
其他丹波伊賀飛彈甲州等ノ如キ是ナリ然レバ関東諸國及ビ甲州ト美濃
等ノ大河ノ流アリテ舟運モ亦難カラスニ出羽ノ米澤新庄等ハ最上川ヲ
以テ運送スレバ坂田港ニテ搬括セラル奥州ノ二本松福島等ハ阿武隈河ノ
流シマレ石巻ニテ管轄セラル肥後ノ相良ハ玖摩川ノ巨流アレバハッ代ニ
テ支搭セラル故ニ他邦ノ糶スベキ物産多シト雖モ海港ノナキ國ハ先ツ此
レヲ他國ノ港ニ輸シテ然レ後ニ巴カ欲スル所ニ運送スルヲ以テ他人ノ唇吻
ヲ借リテ吐納ムルカ如シ頗ル憂フベキノ一事ナリ是故ノ海港無キノ國ニ於テハ
合壁融通ノ法ヲ行テ先ツ金ヲ聚メ他國ノ港ニ厩倉ヲ補理シ其官署ニ
於テ典守ノ物ヲ取リ花利板還ノ策ヲ施スベシ板還ハ年賦成リ斯ノ如クセサ
レハ地子及ビ諸抽稅ヲ侵占ルノ損耗ヲ償フテ能ハス此レヲ海港ナキ國
ヲ富スノ秘法トス

総州印幡沿疏鑿分利并開拓 熊倉氏立案

印幡沿ハ総州印幡郡ニ位シ水面凡ソ五千丁余ヲ占ムル大沼ナリ而シテ柳リトコ
ロニ據レハ内地ニ於テ回益ノ大ナルベキハ蓋シ之ヲ疏通スルニ若モナシト故ヲ
以テ旧幕府兩度迄之ニ着手セラレタリ而シテ天保度ノ如キハ工事既ニ半ハニ
過キ擔任尙夫ノ免職ニ回リ其業終ニ止息スルニ至リタルハ遺憾ノ事ナリ
キ尤モ當時運輸ノ便ヲ唱ヘタルユヘ該業ハ單ニ沿沼開拓ニ着目シ從來
沿ヨリ利根川ハ通スル水路ヲ安食口ニテメ切其水行ヲ絶ツベキ見込ナリト云
フ然レバ沿沼鑿鑿ハ成果ハ独リ開拓ノミニ止ラス兼テ運輸ヲ通シ水害ヲ
除クノ三大有益ノ事業ナリ其次弟ハ夫ノ利根川ハ鉾子北浦椰珂港等
ヨリ陸羽磐常其他ノ産物ヲ東京ヘ輸送スルノ船路ニシテ從前鉾子ヨ
リ関宿ニ溯リ江戸川ヲ下リ東京ニ八九五十有余里ノ長途ニシテ且関宿ヨリ
下流中利根川十里内外ノ河沙泥埋堆シ渴水ノ時ニ舟運通セス十日乃
至二三十日河途上滯泊スルヲ常ト為ス然レバ今印幡沿疏通ノ水路

俟見川海へ通シ同川尻ヨリ江戸川マテ海岸へ溝渠ヲ通シ以テ船路ト為ス
キハ夫、銚子ヨリスルハ安食ヨリ直ニ印幡沼ヲ経テ俟見川ニ至リ江戸川
ヲ品キ東京ニ達スル三十里余、提路トナリ従前船路ニ比スレハ約十五
六里、里程ヲ減シ且滞泊等、不便ナキユヘ他、小貝川鬼奴川ヨリ輸スル
モノモ又其便路ニ就クテ得ベシ然レバ安食ヨリ江戸川ニ至ル船路
沿傍ノ村聚ハ勿論最寄牧羊場及陸軍陣營等、便利モ不少旁田ヲ
以テ生スル所ノ公益實ニ量ルヘカラサルナリ又利根川ハ遠ク源ヲ上毛
ニ發シ武蔵常三州ヲ経許マ、川流ヲ合セテ数十里銚子港ニ入ル而
シテ例宿ヨリ同港ヲ距ル三十余里水行緩漫ニシテ洪水ノ節安食ニ至レハ
先ツ印幡沼ニ入ル然ルニ同沼疏通、水路ヲキユヘ漲水沼中ニ充滿シ利
根川ノ水量稍減スルニ隨ニ漸リ落下スルヲ以テ沼中、漲水落ケ尽テ
レバ利根川モ亦常水ニ復エルナシ是ヲ以テ年々洪水ノ節十町又ハ
二三十町同沼沼村ハ云々及ハス下利根川沿傍村ハ、水害莫大
ニ既ニ一昨年、如キハ同川ノ决堤數ヶ所及ニ沿傍一國水押シトナ

リ其慘狀實ニ憫クニ思ヒカルモノアリ然ルニ今印幡沼疏通、水路ヲ
開キ同沼ヨリ利根川へ通スル水路ハ通船ノ障リヲキト疏通水路注水ノ通
度ヲ計リ安食口ニ於テ左右ニ堤堰ヲ築テ之ヲ狭ク口川ノ漲水ヲ量
テ安食ノ沼中ニ暴流セシメサルハ高ヨリ低ニ就クハ水ノ本分ナレバ沼水
ノ奔流ニテ海ニ歸スルハ必然ノ勢ニシテ三四ヶ所歩、水面忽ケ乾涸シ
テ良田トナルハ足ラ奉テ羨ツヘキノ業已ニ此ニ至レバ沼中止ク一條ノ
水路ヲ餘ニスヘキニ付之ニ堤防ヲ設ルハ復々水ノ漂蕩留滞スヘキ
閑地ナリ利根ノ安食ヨリスル漲水ハ直ニ内海へ疏注スルヲ以テ沿沼
水害ヲ免ル、ハ勿論利根本流且ノ水害ニ亦必ス減却スルヲ得シ是
其三大益タル大略ナリ而シテ斯ノ如ク印幡于瀉トナルハ其水路一手
賀沼ヨリ一里余ノ水路ヲ通スレバ同沼ヨリ手賀沼ノ地位高キヲ以
テ是又一朝、ソノ開拓ニ至ルニ蓋シテ手賀沼ハ大村家経費ヲ擔當
セラル、由テ前年ヨリ開拓頼人アレニ更ニ是見ナリ屢々見セシヲ
變更セシ上昨年、至リ同沼ヲ印幡沼へ通シ其堤割ハ助テ三十丁程

用て夫ヨリ習志野、辺ヲ経テ船橋、中央ヨリ海向カ落スヘキ見込ヲ
立船路測量、上ル後許可ノ儀ヲ千葉縣へ願立シ、其利害ノ得失ヲ考ルニ
開拓成功ノ見込ナキ、ミナラス為メニ不測ノ水害ヲ醸スヘキ憂之アリ、又其經費
ニ百六十萬圓余計、莫ク由ナレハタトモ充分ノ成功ヲ見込ムモ、費用支消ノ道
ニヘカラサルヲ以テ到底實際行ハルヘカラス故ニ、他日印幡開拓成功ノ上始
テ其功ヲ見ルニ至ルベシ然レモ該業ノ如キハ不容易大業ナレハ其經費タレ
ハ亦大ナリ之ヲ測リ天保度既ニ旧幕府ニ於テ之ニ費スモノ凡三十萬圓余ナ
リト此ヲ今ノ金位ニ比セハ少ナクモ百萬圓ニハ下タラサルベシ故ニ通計百四十萬
圓ヲ要スル事業ヲ今ヤ四十萬圓ニシテ成功スヘキヲ以テタトモハ百萬圓ノ達
莫アルモ尚損莫キキモトス況ヤ今其成功ニ回テ得ル所ヲ豫算スルニ決シ
テ益アリテ損ヲ見ケルニ於テヲヤ

今印幡沼ノ大量概畧五千町步之ヲ疏通シテ七分ノ結果ヲ見ルモ凡三
千五百町ノ良田ヲ得ヘシ然ルニ其地タル元來ノ治地始テ乾涸シ地味
膏腴ナルヲ以テ培養ヲ要セス、初年ヨリシテ收穫ノ上田ヨリ多キハ

必然ナレト今之ヲ中田ニ以準シテ一反步一石三斗ト仮算スレハ米四万五千
石ヲ得之ヲ一石四圓替トスレハ則金十八万二千圓ナリ、又其地價ヲ
計ルニ一反步二十四トスルニハ合金七十萬圓ナリ、加之該疏鑿ノ水路通航
ノ稅ヲ概スルニ一昨年千葉縣廳ノ調ニ仍レハ利根川運送船大小合シテ
二萬艘アリトス、因テ今一艘一ヶ年中僅カニ五度發シ五度歸ルトナスモ往復
十回ニシテ則二十萬艘ノ大數ニ及リ、其大ナルハ一艘米千俵ヲ積載シ小ナル
モノモ二三百俵ニ下ラス而シテ鈿子ヨリ東京迄五十八里間米百俵ノ運賃金
凡七圓五十錢トス、回テ百俵ニ付稅金五十錢ヲ收ムルニハ其大ナルモノ一艘ニ
金五圓ナリ、然レ今船ノ大小ト途中往復ニ止マルモノトヲ酌量シテ輕ク之ヲ豫
算スルニ年々收ムル所十四萬圓ニハ下タラサルヘシ、是又莫大ノ益ニシテ唯之ノミヲ以テス
ルモ尚ホ三年ヲ出スレテ經費ヲ償餘ナリ、或人云ク其莫大ノ利アルハ我之ヲ了セリ
然レモ從來利根川暴漲ノ際安食ニシテ杭一奉ヲ添ルモ猶下流ノ水量ヲ
増スヲ見ル況ヤ今之ヲ狭ムルニハ其水害ヲ加ハルヤ知ルヘシ、且利根川沿傍ノ地勢
ヨリ見ルニ印幡沼ノ開拓ハ措キ利根川ヲ分利シ、其水害ヲ却除セサルヘカ

ラス然ルニ今同沼開拓ノ故ヲ以テ從來ノ水路ヲ狭クシテ欲スルハ誤レリト
是レ決シテ然ラス從前同沼疏通ノ水路ナキヲ以テ少シク安食ノ水行ヲ
支テルモ下流ノ水害ヲ加シ氏既ニ疏通ノ水路アルハ利根川ノ漲水内海ニ疏
注スルヲ以テ若シ安食ヲメ切テサルヨリハ從前ニ比スレハ利根川ノ水量
ヲ減却スルヤ言フ族ヲ且夫利根川ノ水勢タル從來ノ景状ニ仍レバ沼ア
ルカガメニ却テ水害ノ時日ヲ長クスルモノアリ故ニ水理ヨリ云フハ寧ロ
利根河ノ漲水ヲニテ留滞セシムルノ沼ヲク堤防ヲ堅クシ水カヲ強クシテ遠
注下セシメ從前ノ如ク水勢漫散左衛右突西岸ヲ潰決シ却テ中央ニ洲
ヲ出ス等ノ事ナカラシムルニ若カス由之觀之若シ利根ノ水害ニニ處セント
欲セハ斷然安食ヲ切ルモ不可ナルナカルヘシ況ヤ今之ヲメ切ルニ非ス
又更ニ疏通ノ水路ヲ開クニ於テ豈ニ其水害ヲ加ルノ理アラシヤ

千葉縣令夙トニ此三大益ヲ起サント旧幕府着手ノ工業再奉アラシ
ラ去明治九年申内務大藏兩省へ上申アリシ由ニテ同年土木寮官負並
同寮御座和蘭工師トブルン氏出張見分アリシニ疏通線路中花島村地内

泥地ノ場所曾テ旧幕府着手ノ節工事ニ困難セシトノ唱來ニ懸念アリシカ其
場所中間少シク土質ヲ試験シ若シ此地脈ヲ遠ク左右ニ延クハ工事至難ニ
屬スヘク又從來沼ヨリ利根川ニ通スル水路安食ヨリ沼ニ至ル僅ニ半里程ニ
其幅凡六十間許ナルヲ以テ沼ヨリ檢見川海ニ至ル四里余ノ新水路ニ適當
ニ幅負ヲ得サレハ利根川ノ漲水ヲ充分疏注スヘカラスシテ其ノ水害ヲ除キ
難ク然レハ印幡沼開拓モ亦為シ難シ然レ氏獨リ通航ノ一事ハ旧疏通線路
ニ平河ヲ設ルハ之ヲ得ヘシトノ建言ニ仍リ遂ニ之ニ決セラレ既ニ起業公
債金二十五萬圓ヲ其工費ニ當テラレシ由聞知ス然ルニ印幡沼疏通ノ業
カク旧幕府ノ成功ナキヲ以テ之ヲ疑難スル者多シト雖レ其成功ナキ
ハ工事ノ難易ニ回ルニ非スノ實ニ擔任ノ閣老水野越前守ノ退職ニ回リ
又夫ノ泥地ノ場所開鑿ノ工事ニ困難セシト唱來レ氏先年大坂安治川瀨
替之節同地質ノ場所ニテ鑿築ノ工事ヲ施セシテアリ敢テ為シ難キノ
事ニ非ス大凡事自然ニ任シテ人意ヲ加ヘサレハ成ラサル者多シ而シテ今此
一事ノ如キ其人意ヲ加フヘキモノニ唯着手ノ順序ト此泥地開鑿アルノシ

而シテ其泥地、如キモ此大有益ノ事業ヨリスルハタトハ、兩岸木材ヲ以テ泥番ヲ為
スモ亦難カラコル、トシテ他ノ事業ニ比スレハ蓋シ甚タ輕易ナル者ナルニ惜哉和
蘭工師唯其為スヘカラサルモノヲ挙テ為スヘキ所以ノ者ヲ言ハス然ルニ若シ其
言、仍リ輒ケ他ノニ大益ヲ地棄シ僅カニ卒河開設ヲ以テ止マント欲スルハ横
ヲ買テ壁ヲ返スノ憾アルノミナラス平河ノ事タル一轉漕コトニ多量ノ水ヲ要
スヘキ今其原水ニ充ツヘキモノハ唯横戸栢井兩村地歟曾テ田幕府開鑿
セシ所、溜リ水アルノミ他ニ流水絶テ之ナケレハ之ヲ以テ利根川ヲ教ノ舟運ニ
供セント欲スルモ其決シテ豎ハサルヤ明カナリ然則如斯大金ヲ擲テ如
斯不便ノ工事ヲ起サンコト蓋シ止ルノ勝ルニ若カサルナリ

檜ノ事

良材ヲ作ル
相應ノ地質

疎伐

此山直著山林新説第二編抜萃

檜ハ山谷ヘ直ニ種子ヲ下スハ冨カラス先ツ苗木ヲ作リ山谷ヘ移シ植ルヲ可トス然シ本
邦ニテハ地面ノ直シキ所ヘ苗木ヲ作り荒キ土、山谷ヘ移シ植ルハ冨シカラス山谷ト同
様ノ土ニ苗木ヲ作ルヘシ種子ハ山林ニアル大木ノ種子ヲ蒔クヘシ、九州四国辺ニテ
ハ下種セズ新植法ヲ用レモ亦候暖ナルヲ以テ善ク根ヲ生セリ此法冨シカラス

枝ハ元トツシク曲リヲ帶タルモノナレバ苗木ニハ直シカラス、土地燥テ悪キ地ナレバ必ス
二尺間ニ植ヘシ地味好キ所ナラバ四尺五寸ヨリ五尺迄ニ植テ可ナリ木ノ長スル早其所以
ハ地、悪シキ所ハ樹ノ生スル遅クシテ其間ニ風雨ノ変アリトモ枝葉相接スレバ相助ケ
ケ折傷ノ害ヲ免ル、苗木漸ク長シテ二尺ノ距離ニテハ狭クナリ強キ木ハ早ク長シ
弱キ木ハ枯ルニ至ル此ノ如ク強キ木ノミ残ル様ニナスハ良木ヲ得ルニ最モ悪キ事
ナリ故ニ人カラ加ヘテ疎伐ヲナスヘシ、田舎ノ風習ハ下枝ヲ伐落癖アリ甚タ悪キ事ナ
リ元來樹木ノ枝葉密接スレハ下枝ハ自然ニ枯レルモノナリ木ト木トノ距離遠クシ
テ一本生ノ樹ノ如クナレバ枝左右ヘ蔓延ス故ニ多ク密ニ植レバ伐枝ニ及ハス若シ枝
ヲ伐レハ幹ノ長スル遅クナリ縦令贏餘ノ枝トシテ伐ルモ入跡ヘ枝ヲ生シテ伐タ
ル跡ハ遂ニ板橋ヲナシテ悪質トナルノ基ナリ故ニ檜ノ良材ヲ獲ント欲レハ決
テ下枝ヲ伐ルヘカラス木ノ為ニ用ナキ枝ハ自然ニ枯レ落テ盡ルモノナリ右ハ地味
好キ山ニテ四尺五寸ヨリ五尺ノ植付ノ法ナリ、本邦ニテハ檜ノ天然適度ト云ハ高サ
十三尺百二十尺ヨリ四十尺百二十尺ノ間ナリ、檜ニ適當スル地質ハ粘土質ノ地デ
アリシ所ヘ花岡石此石ハ地層ノ最現レテ地質ヲ換ヘタル所ヲ最モ良好トス花岡石

ノ粘土ヲ換ルニニツアリ花園石ニ換ヘテタル粘土質ヲ粘土板石ト云フ紙ノ如ク抵ル
粘土ナリ粘土板石ハ常ニ火石質交ルモノナリ此地質ニモ檜生スルヲ得ベシ花園石ト
粘土質ト交雜タル地ハ檜ノ最ニ良木ヲ生ス檜ハ山ノ傾斜ニ拘ラス如何ナル
炭山ニテモ生シ又山陰ヲ好ムモノナリ山陽ノ地面ニハ當今未ダ檜アルヲ見ズ若
シ山陽ニアレバ必其南ヲ塞クモノアルニシ今山陽ニ生セサル所以ヲ説クシ檜ノ種
子ハ輕クシテ小種ノ中ニ多クアリ南方ハ夏ノ末秋ノ始ニ種開テ風ノ為ニ四方ヘ
散布スレバ暑熱ノ為ニ焦テ生セス又秋落タル種モ冬ヲ越ル内ニ寒威ニ凍
死シテ生セス檜ノ天然適地ニテハ春末ノ頃種開キテ種子落ツ新芽發生ス時
ナレバ暖氣及ニ濕氣適度ニシテ忽ケ種子萌生ス北方ヲ善トスルハ春末
ノ頃空氣溫暖ナルニ至リテ種開リ故ニ自然ニ陸續生シテ已カレニ至ル
本邦ニテ檜ノ適シタル所ハ飛騨川ト木曾川上流ニアル山ナリ此山ハ本邦中
檜山百分ノ四十二ナルヘシ美濃ハ百分ノ十七陸前ハ百分ノ三十信濃飛騨川ト木
曾川ト上流ハ百分ノ三並江ハ百分ノ三紀伊ト他ノ國ト合セラ百分ノ二ナルヘシ此中良材ハ飛
騨川木曾川ト上ニシテ此地ハ檜ノ生長ニ第壹等ノ地ナリ陸前ハ木少ナリ陸中ハ

信濃ヨリ少シ惡シトス

貿易差引 東京日々新聞
十二年二月十日

世ノ貿易ヲ皮相スル論者ハ大藏省関稅局ノ編纂タル各港輸出入表若クハ半
年表若クハ全年表ノ報スルトコロニ據リ明治十一年十二月ノ輸入ハ二百七十四万
九千四百七十七圓、輸出ハ八百九十九万三千七百七十八圓、即ケ三十四萬九千
三百八十四圓ノ輸入超過ハ貿易ノ差引ニ於テ我ニ損ナリト云ヒ又明治九年度ノ輸
入ハ二千七百五十九万三千四百五十七圓、輸出ハ二千五百十二万八千九百九十七圓
、ナレバ即ケ二百三十八万五千九百九十九圓、即ケ輸出超過ハ貿易ノ差引ニ於テ
我ニ利アリト云ヒ其損利ヲ一言ノ下ニ断定スルニ付テ更ニ難色アルヲ見スト
至氏畢竟スレバ是レ速ク断定シ未ダ差引ノ事實ヲ確知スル者トスル
ニ足ラサル也

何ヲ以テカ関稅局ノ輸出入表ハ貿易ノ差引ヲ断定スルニ足ラズト云フ乎
曰ク其元價ノ太々信ヲ置クニ足ラレバナリ請フ各港ニ於テ外商等ガ
我稅関ニ呈スル元價目錄ヲ見テ其輸出品ニハ甚シキ低價ヲ記セ

後醍醐中興ノ後源尊氏及シテ天子蒙塵尊氏光明天院ヲ北朝トナシテ自幕府ヲ開ク
子孫相繼テ十二代ニ及凡二百卅八年三渡ノコノウチ南北戦争五十四年應仁乱後百七年
クナレ東國ハ皆足利殿ノ末織田家勳興シテ將軍ヲ廢シ挾天子令天下ト謀リシカト事不
成シテ凡十年カ其臣无喬ニ弑セラル豊臣秀吉其故智ヲ用ヒ自ラ關白トナリテ天下ノ權
ヲ恣ニセシエト凡十五年其後終ニ當代ノ世トナル五

莊園ノ事 君美洞答 足基郷答

君美洞庄ハ古ニモ聞ヘス中頃ヨリ庄官庄司ト申モ、地頭ヲ置ナト申事相聞ハ東鑑ノ中
之カレト庄名モ多ク相見ト當時ニ諸國ニ庄ト申モノ散在ト得共群ニモアラヌ郷ニモアラ
ズ其地又モ今ハ慥ナラスカ歎昔庄ト申物出来ト事起リ如何ト哉
豐基答 是ハ今ノ知行所ノ起リナリ庄ハ俗字ニテ莊字ナリ韻會ニ田舎也トナリ正字通
ニ代莊三十所云々ナリ國ハ説文ニ所以樹果也トナリ今樞ニルニ莊園ハ其始人ノ讓リモ
リ又私ニ買得タル地モアリ以不封地賜田稱莊園ナリ故ニ歎ニ五莊園ト申ナリ末ノ世
ニハ給リタルモアリ然レ先王ノ法ニ非ス私事ナリ故ニ廣キ地ナレ俗ニ云下屋敷白屋
敷トト申意ニテ莊園ナリ此起ハ我邦上古李唐ニ倣テ租庸調ノ法ヲ用ヒ以戸計口班田戸

主人以下子弟奴婢十人ナレハ一戸十口ト五一口ニ付田ヲ給フ男ハ田二段威三分一ト
リ一段ノ田ニ縮五十束ヲ得而シテ束ヲ春テ得五升ノ由令義解ニ見ユサレバ尊ハ大改大
臣ヨリ卑ハ奴婢ニテモラシナヘテ口分田ヲ受而シテ口分ノ租一段ニ束ニ把ヲ出シ男ハ九
十五束ヲ一人ノ養ヘニ給フ是ニヨリテ上下貧富奇々其中尊ハ用途廣キ故ニ位田或田封
戸等ノ品ヲ立テ、不足トキ様ニセラル其位或田ニ封戸トモ皆一段ニ束ニ把ノ租ヲ出
シタリ位田トハ五位以上依位階田ヲ給リタルヲ云或田ハ大納言以上ニ給フヲ云封戸ハ太
政大臣封戸千五百ト云類ナリ此外ニ賜田ト云モノアリ是ハ后妃湯沐ノ料功臣報勞田ナ
リ令所云大功ハ世々不絶上功傳三世トモ皆々其限ニテ彼位或ノ田ニ其身薨卒セバ返
納シテ口分ニ死後收公ス凡王制ハ殊止苦政ナルヲ以テ自改寬コリ班田法モ急リカチ
ニナリ彼后妃湯沐ノ料外家ニ讓リ玉ハ功田ハ子孫寺ニ施入シ惠美押勝以大職官ノ功田
山階寺ニ維テ會ノ料ニ施入スル事国史ニ見ユ彼后妃湯沐ノ料ニ外家ニ更テハ湯沐ノ料
ニハ稱シ難ク功田ニ施入ノ後ハ寺ニテ功田トハ稱セラレバ官ヨリ給リタル田ニテハ
ナキ故ニ彼高屋敷ト云ノ意ニテ是我莊園ト名付タルナリ後々屢リ成テ莊園多ク持ケタ
ル者ハ官有ニナリ又近隣ノ莊園ヲ受得テコレカレ並併セル故屬者愈富、貧者益貧ニ

テ高家富徳ニ買得テ其家氏因々ニ出来未世ノ事ナレバ伊藤祐親ウツミカハツノ莊ヲ持タル
モ是ナリ後朱雀院寛徳年中ニ新立莊園停廢ニ宣下ツテ無其故富民ノ田ヲ集ラレ後三條院
延久ノ初始政ニ記録所ヲ被置此停廢ノ事ヲ第一トナセリ其後代々ノ聖主ニ停廢ノ命ア
リタレハ免ヤ角ヤ尚ホ止マヌ執政大臣モ田地ヲ貧ルエハ停廢ノ令出ラモ其ヲ失ハ忽
失損アルエ何カニ事寄テ莊園ヲ放ケス尚ホ新立ラミ企タルトナン後ニハ林平帝御讓位
ノ後ハ院ノ御領ト稱セラレ定レル御封ノ外ニ田園ヲ斯ク剩レ前御ノ後遺命ヲ以テ男女ノ
親王ニ分ケ給リ或一寵ヲ得ル女房又布有ノ臣等ニ分ケ下ヤレ是ヲ院ノ御処分ト唱タル
ニヨリ莊園益々殖々ルナリ元頃章極黃河定家郷所領ノ江州吉富庄為 三位局被掠度々及
訴訟賜院御教書タル事明月記ニ見エカク風俗ニナリタレバ私領ト申事稍盛ニナレリ義家
武衛家衛ヲ撃テ三年ノ戦ニ勝利ヲ得タルモ皆莊園ノ豪民ヲ麾下ニ招キ家人ヲ建タル故
ナリ頼朝流人ニテ兵ヲ起タルモ亦時改三浦一黨ハ莊園私田ノ豪民ニテ助タルナリ是レ莊
園ハ私領ニテ我終ヲ働ラキ国法ニ從ケルニ依リ頼朝之ヲ戒ルト云フ名ヲ以テ終ヘニ六十
余州ヲキニ入レタリ莊園ノ上モ土産ハ私領故其領主ニテ取り王朝ハ納メス其奉行ヲ莊
司莊官或ハ別當ナト、唱ヘテ私ニ召置タルナリ此者豪強ナルハ近隣ヲ併吞シテ終ヘ

ニ割據シ大告ト唱ルニ至レリ

地租改正 東京曙新聞 第四百九十三号

地租改正論ノ朝野ニ胚胎セシハ既ニ己巳庚午ノ間ニ初リ神田孝平君首トシテ賣買地價ニ
税スルノ説ヲ主唱シ之ヲ建議セラレタリ尋テ廢藩置縣ヲ奉リ兵食ノ大權全リ我カ中心
政府ニ復スルニ及ンテヤ政府大ニ經綸ノ策圖ヲ大藏省ニ委ヌ者中各察奮テ主務興張ノ責
ニ任セシカ就中租稅寮ハ全國稅法改正ノ規畫ヲ審案シ以テ我カ縣輔ニ啓沃スル所アリ時
ノ大藏卿大久保利通公大藏大輔井上馨君深思熟慮同寮ノ規畫ヲ採リ以テ地租改正ノ意
見ヲ我カ院ニ建議セラレ實ニ辛未ノ十一月ニ在リシト云フ當時大藏卿輔カ地租改正ノ
意見如何ヲ尋ヨルニ傳聞ニ據レハ大約七段ニシテ一ハ田畑作物ノ自由ヲ地主ニ与フルニ
在リニハ田畑永代賣買ノ自由ヲ地主ニ許スニ在リ三ハ米麥諸穀ノ輸出入ヲ人民ニ自由
ナラシムルニ在リ四ハ一般田宅山林ノ地積ヲ踏勘スルニ在リ五ハ一般地積ノ程度ヲ檢査スルニ在リ以上
在リ六ハ賣買地價ニ隨テ其租ヲ賦スルニ在リ七ハ一般地積ノ程度ヲ檢査スルニ在リ以上
七段ノ蘊奧ハ地租改正事務局ノ報告書ニ詳カナリト云フト虽モ今其ノ闡リ所ニ據テ蘊奧
ノ要ヲ次ニ畧説スベシ

従前鎖國封尾ノ時ニ當リテヤ務ノテ民ヲ山谿ニ擬固シ以テ其ノ彼此交通ヲ梗塞ス一朝玉
荒アレハ飢饉五トコロニ至リ移粟ニ惶アラス故ニ當時、政府及ビ各藩領主唯穀就中米
粒ヲ貴ニ其民ノ田畑作物ヲ拘束シ彼ノ田水ニ草芥、如キ假令其ノ收益ノ諸穀ニ優ル者
ト虽民地主ヲシテ之ヲ自由ニ植獲スルヲ得サラシム願フニ封建ノ民ニ在テ此、如キ拘
束ニ置ルニ亦止ヲ得スト虽氏外交日ニ隆ナル、社會ニ於テ地主ノ作物ヲ拘束セハ民
利將タ何ヲ以テ殖セン而シテ其國供需將タ何ヲ以テ能ク運轉センヤ是レ第一段ノ止ム
ベカラサル所以ナリト聞ク

往日ニ在テハ我國ノ財計其ノ伸縮弛張單ニ我カ国内ニ止マルカ故ニ其ノ財計、伸且張リ
以テ風波ノ財海ヲ攪破スルナキヲ謀レハ貧富ノ不平均ヲ妨クルヨリ善キハナシ是レ徳川
氏カ嘗テ田宅永代賣買ヲ禁セシ所以ナリト虽氏開國以迄ニ至テハ全ク之ニ反シ我國財海
ノ倒瀾ハ未タ嘗テ貧富ノ不平均ニ起ラスメ財産ノ安固ナラサルヨリ起ル其財産ヲシテ安
固ナラシムルノ要ハ先ツ其ノ典賣ヲ自由ニスルニ在リ是レ第二段ノ止ムベカラサル所
以ナリト聞ク

既ニ其ノ作物ヲ自由ニシヌク其ノ財産ヲ安固ニス民ノ利隨テ將ニ殖セントス而シテ民ノ
業亦タ將ニ隨テ勤マントス其然リ供需ノ氣脈ヲ一轉シ以テ之ヲ外國貿易ニ連絡セサル可
カラス是レ第三段ノ止ムベカラサル所以ナリト聞ク

徒ニ其ノ拘束ヲ解クノミニシテ之ガ節度ヲ為サレハ所謂自由ナル者適マ以テ民ヲ傷
フニ足ル其ノ賣買ノ際公証以テ之ヲ保護セラルヲ得ス公証ノ用ト賦稅ノ具ト此ノ兩者ヲ
恰好齊達スルノ術ハ地券法ヲ捨テ、復タ何ニカ在ラン然ルニ其ノ地積ノ廣狹未タ正シ
カラサレハ公証以テ施スニ由ナク租率以テ平ニスルニ途ナシ是レ第四段ノ止ムベカラ
ル所以ナリト聞ク

民ノ丈量ヲ忌ム久シ蓋シ従前檢田ノ奉常ニ増徴ノ政略ニ出ツ故ニ第四段ノ事タル處ニ之
ヲ施セハ疑懼百出得テ收拾ス可カラサルニ至ラン一必セリ之ヲ以テ地券ヲ發行スルノ初
々各地ノ地積ハ其ノ丈量ヲ各地主ニ委子政府ハ強テ之ヲ穿查セス然ルモ各地主ハ自己
所有地其積ヲ隱匿シテ以テ公証ノ外ニ遺脱セラル、ヲ畏レ地主故意其ノ地積ヲ隱匿シ以
テ公証ノ外ニ遺脱セラルハ、時ハ其所有積ヲ失フ、法地券
概則ニ就テ之ヲ參觀スニシ大概自ラ其ノ丈量ヲ怠ルナク全國ノ檢田ハ將ニ數年ヲ出ス
シテ其業ヲ竣ルニ至ラントス是レ第五段ノ止ムベカラサル所以ナリト聞ク

租ヲ收ムル民ノ最モ惑ヒナキ最モ煩ヒナキヲ貴ノ鎌倉以前ノ古制皆迂腐一モ今ニ通スル

者ナシ貫高、制蓋シ地價賦税ノ意ニ近シト虽ニ其法亦濶如シ今得テ據ルヘカラス徳川氏
ノ祖法其ノ節目ハ則テ頗ル精密ト虽ニ流弊紛乱一カ裁断、際奉テ其法ヲ一変セサルヲ得
ズ此ニ於テヤ最簡最明ノ法ヲ求ムルニ唯地價税ノ一法アル而已是レ第六段ノ止ムヘカ
ラサル所以ナリト聞ク

在昔王政ノ祖法其地ニ行ハレタル區域ハ大概畿甸ニ止マリ邊陲僻邑ニ及ハス再後武門
各族ノ祖法復皆全国ニ普及スル者ナカリキ蓋シ此ノ如キ制度ノ一大変革ニ當リ蓋シ一ノ定
規以テ之ヲ律シ畫一ノ号令以テ之ヲ提クルニ非サレハ施為ノ恣寬猛輕重東西異軌ノ失ヲ
免カレヌ量地ナリ地價ナリ其程度ノ揆査ハ中心政府ノ提理ニ出サルヘカラス是レ第七段
ノ止ムヘカラス所以ナリト聞ク

地租改正ノ要旨ハ則テ以上叙述スル者、如シニ實地施行ノ順序如何ヲ左ニ略叙セリルベ
カラズ蓋シ地租改正ノ意見ヲ實地ニ施行スルノ端ヲ開キシハ地券法二十四條ヲ發行セシ
ニ據マレリ抑、此法ヲ施行セシハ大輔井上馨君大藏卿ノ使命ヲ奉シテ歐米ニ航スルニ
際シ代リテ省務ヲ理マレタル時ニ於テセシ者ニシテ辛未十二月ヲ以テ先ツ之ヲ東京府
内ニ行ヒ尋テ之ヲ各地方市街地及ヒ貴屬地ニ推行ス是ヨリ先キ封建ノ世ニ府及ヒ各藩城

下若クハ名邑ノ如キハ其地大概無税ナリシガ此ニ至リテ始メテ租アリ壬申二月地租賣買ノ
自由ヲ全国ニ公布シ且ツ其賣買毎ニ地券ヲ授与スルノ規則十四條ヲ頒布ス會々神
奈川縣令陸奥宗光君地租改正ノ議ヲ朝ニ奉ル其說大約神田孝平君カ康午年河守
ヲ建議セシ所ト大藏卿輔々辛未九月上奏セシ所ニ由リテ云フ尋テ宗光
君奉テテ租稅ノ頭トナリ專ラ地券法ヲ興張ス是レ其ノ改租ノ意見ヲ實地ニ施
行スルニ於テ先ツ其端ヲ開キタル者ナリ

同年七月地券規則第十三條ヲ追訂シ全国ノ民有地其ノ賣買ヲ有無ニ関ハラス
一般其地券ヲ發行シ且ツ本年十月ヲ限リ其發行ヲ卒業セヨト各地方ニ令ス
其ノ八月改正局ヲ租稅寮中ニ設ケ一般稅法改正ノ議榷ヲ与ヘ就中專ラ地券
ノ事務ヲ管掌セシメシト聞ク而シテ改租ノ方策調査略ヲ備ハルニ及ヒ大藏大輔ハ
之ヲ各地方長官ニ内領シ親ノ施行ノ意見實際ニ照注スル所ヲ示シテ云フ是
ニ於テ漸ク改租ノ意見ヲ擴張スルニ至レリ

是ヨリ先キ關八州若クハ二三ノ地方畑租永納ヲ除ク外地租皆穀納ヲ限リ其
運搬納付ノ煩雜實ニ甚クシク弊害隨テ其間ニ百出スルヲ以テ此ニ至テ始テ

○
行ハシタル
時

其ノ拘束ヲ解キ穀代金納ノ自由ヲ許サル是亦夕貢租上更革ノ著ルシキ者ナリ
六年三月大藏大輔正院ノ允ヲ得テ各地方官ヲ東京ニ會シ地方要務ノ問題
若干項ヲ議セシメ大輔親リ之ヲ議長トシ議題中其最モ重大ナル者ハ地
租改正ノ法ニシテ當時各議員ノ説如何ヲ聞クニ大別ニ三派タリト云
前十年乃至ノ金位ニ笑シテ地券反別ニ賦課シ漸次各地ノ位ト其ノ租金ト交
々相適當スルニ至ラシメント希望スル者ナリ枝葉ヲ強難スルヨリ寧ロ根
抵ヲ更植スルニ如カス漸乎石盛ヲ瘞シ檢見ヲ止メ地價賦税ノ盡一ナル新
法ヲ行ハント希望スル者一ナリ地租ノ改正セサル可ラサルハ則ケ固ヨリ
ナリト虽レ古例旧慣ハ處ニ痛除ス可カラス故ニ五六年間姑ク徳川氏ノ旧
規ニ因リ專ラ中心ナル檢見法ニ從テ田租ヲ收メ以テ各地田租ノ偏畸ヲ矯
正シ而シテ漸次地券ヲ授与シ民ノ漸ク旧態ヲ脱シ新制ニ慣ル、ヲ族テ然ル
後ケ畫一ノ新法ヲ行ハント希望スル者一ナリ

○
核契ヲ除ク熱望スルニ非サルハナシ議長乃ケ議員中若干員ヲ撰シテ安
後ケ畫一ノ新法ヲ行ハント希望スル者一ナリ

トナシ地租改正法ヲ按セシム按成ル會々大輔故アリ處ニ辭職ス參議大隈重信君
其ノ事務總裁トナリ議場ヲ總括シテ該案ヲ議負ニ領テ遂欵其ノ事理ヲ審議セ
レテ始メテ決ス總裁乃ケ之ヲ正院ニ上奏ス二三日ニ過スレテ院議之ヲ可トス而
シテ其上諭ヲ以テ全國ニ頒布セラレシハ即ケ同年七月二十八日ニ在リシナリ是ニ
於テ乎地租改正ノ議全ク行ハル
第一派ノ説ヲ擴充スルニ其意蓋シ謂ク舊慣穀納ハ其運搬納付極メテ煩シメ
民ヲシテ其勞費ニ堪ヘザラシムルノミナラス毎歲市場穀價ノ昂低素ヨリ常ナリ
國庫ノ財計得テ預算ス可ラサルカ故ニ穀納ハ金納ノ便ニ如カサル明ナリ然ルモ
各地每號ノ收穫地價ヲ逐一細算シテ始メテ之ニ税スルカ如キハ其煩擾果シテ
如何ソヤ寧ロ毎村毎郡ノ租額即ケ前十年乃至若干年平均地租ト為スニ如カスト
其ノ穀
代金額ニ算出シ以テ之ヲ各村各郡ノ定額若干年同定者地租ト為スニ如カスト今
ニシテ之ヲ顧ミシハ該派ノ説ハ頗ル中庸持重ナルカ如シト虽レ當時即ケ
四月時議場七十餘員ノ議者中該派ニ左祖スル者最モ少ナカリシ所以
者ハ何リヤ各州各郡各村ノ地租某郡ニ在テハ極メテ偏重某郡ニ在テ

ハ極ノテ偏輕ナルハ人ノ能ク知ル所ナリ而シテ當時ノ議負即チ地方官ハ其
所管ノ地租偏重ヲ病ム者凡ソ十ノ七ニ居リシト聞ク然則チ其ノ改租ヲ議
フルニ當テ重租地方ノ長次官ハ銳意田租ヲ痛掃シ以テ彼是租額ノ輕
重ヲ全国ニ平均セント企テシナラント思ハル然ルヲ該派ノ説ニ從ヘテ遂ニ
全国租額ノ平均ヲ欲セス唯各州府ノ偏輕偏重ヲ漸クシテ姑ク止ント望ム
是レ當時衆議負カ該派ヲ排斥スル者ノ居多ナリシ所以ナルヘシ
果シテ右ニ述ル所ノ如クナラシメハ重租ヲ病メル地方ノ長次官ハ大概孰
法ニ熟中セシヲ知ルヘキナリ後世ヨリ之ヲ皮相スレハ第二派ノ説ハ實ニ急
進ニ過キタル者ノ如シト虽ニ深ク其ノ狀勢ヲ觀察スレハ當時此説ニ左祖
スルノ多カリシモ豈ニ已ラ得ケル者ナレトモシテ舊横租法ニ從ヘテ當
ニ各郡各村ノ偏重偏輕ニ涉ルノ弊アルヲ免ケレサルノミナラス顧ルニ我
帝國數百年遷經濟支離滅裂ノ餘弊ヲ承ケ一朝外國貿易ノ刺衝ニ當
ル先ッ其本ヲ抜キ其源ヲ清ムルニ非カレハ國計何ヲ以テ立タン而シテ所
謂坂本清源ノ道唯拙速投機ニ在リト云フヘシ是レ尙場ノ議負ニ最ニ
該派ニ在祖スルノ多數ナリシ所以カ

第三派ノ説ハ最ニ持重ナルカ如シト虽ニ蓋シ實際ニ適シ難キ者ナキニ非ケルヘ
シ膏テ潤リ徳川氏ノ旧規ハ檢見收租ヲ主トシ檢見ノ妙處ハ意匠ノ活用ニ
在リ徳川氏ノ稅吏大約其職ヲ世ニシ醫獸ヨリ稅吏租牒ノ裏ニ成長シ以
テ該地方ノ稅務ニ服事ス地ノ肥瘠穀ノ豐歉ニ依ル眼ハ算トナリ手ハ計ト
ナリ寛猛輕重方寸ニ瞭然トシテ毫モ惑ノ所ナシ其人太ク不良ナルニ非ケル
ヨリハ以テ收租ノ平準ヲ維持スルニ足レリ然ルニ亦ホ屢ニ其ノ流弊ニ苦ノリト
雖新以降ニ至テハ陸羽ノ人肥筑ヲ治メ稼土ノセ加越ヲ管シ管廳ト部
民ノ間動モスレハ事情ニ勝リ甚シキニ至テハ言語ヲ用ヒ且相通セサル者
アリ檢見ノ妙處ヲ此ノ如キ官民ノ間ニ求ムルモ亦難カラス且ツ寧ロ薄稅
ニ失スルモ重歛ニ流レサルハ地方官ノ常情ナルヘシ其情ノ弊タル現ニ某ノ地方
ニ於テハ武断以テ地租ヲ輕減シ雜稅ヲ蠲除スルニ至リシヲアリト云フ然
ルヲ今第三派ノ説ノ如ク地方官ニ委ムルニ檢見ヲ以セハ特ニ其ノ精熟カ
テ收租ノ將ニ日ニ減セントスルヲ推知スヘキナリミナラス明クニ維新

地租

以後地租檢見、為逐年減、偏シタル实例ナキ、非スト聞ク然ルモ若シ其減祖、效能ヲ純テ窮乏寒民ニ覃及セシメハ即ケ美ナリト虽モ徒ニ漫然減去シ其私利ハ却テ豪富ニ帰スルニ過キカラシメハ檢見、德タル果シテ何クニカ在ル而シテ此弊ヤ往々ニ免カル能ハサル所ナルヘシ。是第三派ノ説ニ亦タ左祖スル者ナカリシ所以ナランカト思ハル

此、觀察ニシテ誤謬ナカラシメハ畫一紙法ノ實ニ己ムヘアラサルヲ知ルベシト虽モ老練家ノ語ル所、據ニ地租改正法新級ノ始ト既行、終トテ對照スレバ驚リヘキ変革アル者五ニシテ其一ハ地價性質ノ變革、其二ハ地價調査ニ作用ノ變革、其三ハ田尺ノ變革、其四ハ凶荒減租ノ變革、其五ハ田畑地目ノ變革ナリト

日本貨幣本位 神皇正統記 治十二年五月下院

抑モ金銀兩本位、日本ニ行ハル、ヤクニ幕制、金銀貨ニ通用高ノ制限ナキヲ以テ之ヲ明徴スルニ足レリ維新ノ後、於テ夙ニ貨幣改鑄ノ大計ヲ定メ政府カ造幣寮ヲ大阪ニ設テスルヲ決セシニ當リテヤ世論ハ或ハ大阪、其地

ニ非カハラ議シタルモ當時廟堂ノ見込ハ大阪ノ我國ノ中央ニ位シ又神戸港ノ接近スルアリテ他日、於テハ必ラス貿易ノ中心タルヘキニ相違ナシト信ゼシニ依テ断然造幣寮ヲ大阪ニ建ルニ着手シタリ、再来七年間、經驗ヲ以テスレバ奈何セン貿易ノ焼点ハ常ニ東京ニ集ルノ勢カナルガ故ニ益々世論ヲシテ之ヲ東京ニ設ケスノ大坂ニ設ケタルノ不便ヲ訴ヘシムルノ情況ナリトモ備テ貨幣改鑄ノ議アルニ臨ニ當局者ハ現ニ幕制、金銀兩本位ヲ繼承スル為ニ貿易市場ニ於テ常ニ不測ノ弊害ヲ被ルヲ患ヒ之ヲ單本位ニ一定センヲ望ミ廣ク衆説ニ諮詢セシニ當時横濱ニテ實驗論者ノ名ヲ得タル東洋銀行支店ノ支配人某等ハ支那印度地方ハ銀貨通用タルヲ以テ到底日本國ノ計ハ銀貨本位ノ便宜利ナルニ若カサルヲ説キ英公使モ亦コレヲ賛成シタルニ付キ當局者ニ或ハ之ヲ是計ト思惟セシムルモモリモト聽ケリ然ルニ英國ニ派出セラレタル委員ハ銀貨ノ漸ク貿易國ヨリ擴弁セラレ、大勢ナレバ日本前途ノ長計ハ今日、於テ早リ金貨本位ヲ定メ東洋銀世界ノ難ヲ共ニスルノ福ヲ辭セサル可カラサルト諱シ又米國ニ派出セラレタル

委員も同じく金本位に非かれば歐米通商、爲に不利ナル而已ナラズ坤輿ノ大勢に背馳して結局不利、溝瀆タルベキニ由リ千八百六十七年巴里、萬國通貨會議、趣意に基キ日本に於テ(第一)金貨ヲ本位トシ(第二)千分中ニテ九百分ノ純金ト定メ(第三)メタリック法ヲ以テ量目ヲ定メ改米ニ向テ萬國通貨ノ先鞭ヲ着テスルニ若カズト議ミタルに付キ廟議ハ断然此ヲ是ナリトシ乃ケ明治四年、款條條例ヲ以テ法制ヲ頒布シ五圓金貨ノ純分ヲセガラム半トシ(即ケ一圓ノ純分一ガラム半二十四、純分三十グラム也)他日歐米各國ニテ萬國通貨法ヲ奉行スルに至ラハ日本ノ五圓、米國ノ五ドルハ英國、一ポンド、仏國ノ廿五フラン、日耳曼廿マルクヲシテ同量同性ノ便利ヲ得セシメント冀望シタリ故に當時外國ニテ萬國通貨主議ノ論者ハ噴々トシテ紛糾シ日本國ニテ是ハ大計ノ蒿夫タリシハ頌揚シ日ナラズシテ世界一般ニテ通貨法ヲ行フマキ勢ニ論シタリ且其實際ヲ見シハ各國ニテ已レガ量トスル所ヲ是トシ今日及フマデ此ノ通貨ハ理論タケニ正マテリテ我國ヲ降リノ外ハ未タ其ノ米ニ政、実行セラルルに至ラザル也

斯ノ如ク明治四年に於テ断然金貨ノ單本位ヲ用ヒ五十錢以下ノ銀貨ヲ補助貨ニ定メタリト雖も却テ貿易市場ヲ顧ミレバ實際ノ取引ハ依然ハシテ洋銀ヲ用ヒ條約ノ明文ト習慣ノ因襲ニ制セラレテ一旦ニ洋銀ヲ海關ノ收税及高賣ノ取引ヨリ廢止セシムルヲ得ス而シテ洋銀ハ此ノ金貨本位ノ爲ニ是モ其專擅ノ勢カラ減殺セラレサルニ付キ乃ケ洋銀ヲ市場ヨリ擯作センガ爲ニ列國銀ヲ鑄造シ四百十六ゲレイン之ヲ開港場限リ通用セシメ既ニ此時ヨリシテ實際ニ於テハ金銀兩本位ノ實アラシメタリ然ルニ右ノ一圓銀ハ其量目ノ洋銀ヨリ輕キト其ノ未タ信用ヲ支那地方ニ得ザルトノ故ヲ以テ洋銀ヲ驅逐スルノ目的ヲ達スルニ至ラサル前ニ於テ既ニ銀價ノ昂低アル毎ニ政府ハ必ス多少ノ困難ヲ免シカルニヨリ数年ナラズシテ事故ニ托シテ一圓銀貨ノ鑄造ヲ廢止シ金貨單本位ニ復シ夫ノ洋銀ノ勢カラシテ益々市場ニ旺盛ナラシムルニ任カセタリ此時ニ當リテヤ米國ニ於テ貿易銀ヲ鑄造シ之ヲ東洋ニ輸送シテ洋銀ニ顔頑セント謀リタルニ因リ我邦ニ於テモ同シク之ニ倣ヒ更ニ四百廿ゲレインノ貿易銀ヲ製シテ曩ノ一圓銀ノ地位ヲ

古有之レシ又再々金銀兩本位ヲ實際ニ用ヒテ以テ今日ニ至リタルニ幸々今東
 洋支那印度地方ニ於テ至尙確信ノ通用銀貨ナキヲ以テ此機ニ乘シテ我ガ
 貿易銀ノ流通區域ヲ擴張シ以テ洋銀ヲ驅逐セント望ミ先ツ銀貨本位ノ
 知ヲ布令セラシタルナリト思ハル然バ則テ明治四年ヨリ十一年五月二十七日マデ
 ハ其名コソ金貨本位ニアリツレ其實際ニ於テハ未タ曾テ金銀兩本位ニ
 ノ跡ヲ止メナリシ也ト言ハサル可カラズ

助一ヨリ 輸出入比較表 輸出品元價金額 輸入品元價金額

一年	一五、五五三、四七二、四七五、七五	一〇、六九三、〇七一、四四、五五
二年	一三、九〇八、九七八、四〇、二五〇	二〇、七八三、六三三、四、七五
三年	一四、五四三、〇一三、五九、四〇	三三、七四一、六三七、五、八〇
四年	一七、九六八、六〇八、七、一五	二一、九一六、七二七、七、四〇
五年	二七、〇二六、六四七、二、一六	二六、一八四、八一四、九、七〇
六年	二一、一四二、〇二四、七、七九	二七、六一七、二六四、〇、五八
七年	一八、七八〇、〇七八、七、九〇	二二、九二四、五八七、〇、八九

八年度	一八、〇七七、六六〇、五八、六〇	二五、〇九四、七四二、〇、八〇
九年度	二七、五〇三、四五七、七、三、八〇	二五、一三〇、八九七、八、三、三〇
十年度	二六、九〇八、六〇七、九、二、〇〇	三一、九三三、三五二、六、三、二〇
十一年度	二四、六二四、七六〇、二、四、一〇	二九、八一五、三五三、四、九、〇〇

利根川圖誌自序

嘗聞有獻策者曰漕運全藉海船今應參以河舟下諸利根川達諸江戸
 海以助其不足當一都於信之輕舟澤足其人力以運于曲川所漕之米致
 諸碓氷川且其鑿石弗險抑亦有術焉山中固饒新藝諸石上石熟而
 水沃之石如驚螺石碎水通可以船可以筏且其役丁夫一里一亭三里
 一舍肩々以送踵々以迎勞可以逸餓可以飽又曰導海船於鉞子口運
 諸印幡沼鑿地為渠通諸檢見川達諸江戸海可以免東海風濤之險
 且沼之近傍可以墾種然亦有四難曰人力乏也苟多役之則徒為煩冗
 用幣難給曰淤泥多也旋掘旋填曰沙土鬆也旋積旋崩曰西風烈也歲
 々颶沙下流以壅土則極見川亦將有後累也然此數事皆有善處之法苟

有能者將不難云又曰斷鹿島之沙丘於其最狹之處則利根川之水落於鹿島浦乃通溝渠於十二橋壑田園於十六萬石此數者皆係利根川之事吾生其傍不能無感姑記其所聞見以為此書而如夫教策則與感之因以冠篇首其是非則吾所不知故文中不及也且吾素乏字饒有毀譽亦何管焉出門一笑大江橫

安政二年乙卯季春

德川氏、時東京、利、集リシト
徳川氏著日本經濟論抜萃

夫、人質及、冬勤交代、制ハ六十餘州ノ利潤ヲ江戸ニ偏聚セシムル者ナリ何ナレバ諸候ノ地ノ買手タルヘキモ、ヲ江戸ノ買手タラシムルナリ（故ニ諸候地ノ賣手亦タ江戸ニ来リテ賣ル故ニ人口ト高トハ江戸ニ偏集セリ）米納藩札、制ハ米價ヲ江戸及、大坂ニ下タシ金銀貨ヲ江戸ニ驅逐セシムル勢マリ諸候ヲ何訣ヲ競ハシメ寺塔ヲ築キ河流ヲ壅ラシムル等ハ諸候ヲ空渴シ其利ヲ江戸ノ商賈ニ得セシムルノ策ナリ是ヲ以テ海内ノ利ハ江戸ニ偏聚シ江戸ノ地ハ自然ノ有様ニテ集蓄シカタキ程多量ナル人口ト高トテ集蓄田セリ諸候ノ地ハ自然ノ有様ニテ蓄ヘ得ヘキヨリ少量ノ人口ト高トテ蓄ヘタリ

赤松義知識

年号	輸入、越前、高、輸、出、越前、高、輸入、越前、高	輸出、越前、高、輸入、越前、高	南島輸入、貸付、利息	南島越前、貸付、利息
明治二	七、一七、三、五、七	五、〇、八、〇、二	二、〇、九、三、六	四、八、〇、〇、〇
明治三	一、六、二、五、三、九	九、〇、二、九、三、五	七、二、七、八、四	七、五、〇、〇、〇
明治四	二、一、七、七、五、〇	三、四、三、八、三、三	八、七、三、四、三	九、三、〇、〇、〇
明治五	七、八、九、三、三、六	三、八、五、六、三、二	七、八、三、三、六	九、三、〇、〇、〇
明治六	八、〇、三、六、五、二	四、五、〇、九、〇、二	八、〇、三、六、五、二	八、三、五、八、二、四
明治七	四、四、四、五、〇、八	一、二、八、五、九、八	八、七、三、四、三	
明治八	二、三、三、四、五、七	八、〇、三、〇、二	五、二、四、二、五	
明治九	三、三、三、四、五、三	八、〇、三、〇、二	二、八、九、二、二	
合計	六、一、三、八、〇、九	四、四、九、六、三、六	九、九、七、五、五	七、三、五、八、三、四

日本貨幣ノ増加高

同債ヲ年々テ日本ノ貨幣減少セシ高ナリ

同債ヲ年々テ外國ヨリ輸入シタル高品ナリ

同債ノ高品ヲ年々テ外國ヨリ輸入シタル貨幣ナリ

日本經濟學士ノ誤解 全上抜萃

右ノ表ヲ以テ明治二年以降外国交易ノ略ヲ詳密ナル景況ヲ知ルニ足ルヘシ明治元年以前ノ事ハ
余之ヲ揮クニ道ナキヲ以テ之ヲ掲載スル能ハス

右ノ表ヲ以テ日本ノ通貨ハ明治九年六月ニ至ルマテ七三、一五八、二四圓ヲ増加セリ猶ホ列
邦ニ十萬圓程ノ貨幣ヲ大坂ニ於テ鑄造セシカレ其多クハ旧貨幣ノ改鑄ナルヘク好シ
又改鑄ナラスシテ日本ノ通貨ヲ増加セシモノアルヘシト其位ノ高ハ商品ニ増加セシ處
ルヘキニ付莫入セス

然リ而シテ此増加シタル七三、一五八、二四圓ノ内テ四五、二九六、三六〇圓ハ既ニ輸入ノ差ヲ償フシカ
外セリ故ニ當今ノ日本市場ニハ猶ホ二七、八六一、八四四圓ノ餘分ナル通貨残存セ
リト云ハカレハ此貨幣ハ日本ノ商品ニ對シ過分ナルカ故ニ早晚外出スルモノナルヘシ
通貨ヲ國中ニ増加セハ必ス輸入ヲ増加ス而シテ通貨ノ輸出此ヲ償フニ足ラカレテ明治
二三年ノ景況是ナリ此蓋シ旧外債ノ為メナルヘシ商品輸入ノ超高極テ多クシテ而シテ
貨幣亦輸入スルヲ以テ明治五六年ノ景況是ナリ此蓋シ新外債ノ為ナルヘシ商品輸入
ノ超高極テ多クシテ而シテ其他一國ノ體裁ヲ為スモノ必ス百般ノ事ニ付テ金銀ヲ出納スヘ
シ然レモ商品変セスシテ而シテ貨幣ヲ増ハハ貨幣必ス輸入スヘシ商品変セスモノ而シテ貨幣

ヲ減セハ貨幣必ス来ルヘシ其去リ其来ル必ス經濟ノ法ニ因テ然ルモノナリ全国一體ノ止ニ於
テ得失アルニ非ス特ニ商品ノ変シテ通貨トナリ通貨ノ變シテ商品トナリタルマテノ事ナリ將何ヲカ
憂ヘ何ヲカ恐レシ

日本ノ經濟學士ノ輸入ノ差ノ發スル所以ヲ知ラス貨幣ノ増加セシ故ニ金貨ノ外出スルヲ知ラヌ
或ハ稱シテ濫出ト云ヒ或ハ惡シテ商業凋衰ノ兆ト云ヒ喋々之ヲ咎メ咸々之ヲ憂ヒ深思
熟慮シテ終ニ左ノ諸項ヲ以テ金貨輸出ノ源因トシ數ソヘ五ツルニ至レリ

- 第一 輸入ノ差
 - 第二 外債ノ利子ヲ拂フ
 - 第三 輸入ノ外国人ノ給料
 - 第四 海外留學士
 - 第五 巡回大使及駐劄公使
 - 第六 金銀ノ造幣局ノ割合
- 右ノ何レモ大過アルニ非ラカレズ斯ク數ツエツルハ豈ニ特ニ之ニ止マンヤ今日日本ノ金
貨輸出ヲ論スルニ如此繁雜ヲ要セス唯々通貨ノ商品トシ割合ニ外國ト同シカラカ

ルニ因ルト云ハ、足ランノミ

アダムスミス氏其著書ウエルスヲ子トシヨシ第二篇第十葉ニ曰ク歴史上ノ記載ニ於テ見ルヘキ最モ難貴トシキ軍争ナリシ當百年間ノ仏蘭西トノ戦ニ於テ其價ヲ償ヒタルモノハ通貨若クハ民間ニ蓄貯セル金板若クハ貴族ノ財宝ニハ最モ僅カニ委頼セシト見ルヘシ抑モ此戦ハ英國ノ為ニ殆ント九千萬餘磅余ノ費用ナリキ當今ノ公債七千五百萬磅ノミナラス地租一磅ニ付キニシルリシノ増税及漸償公債トシテ借用セルモノ等即チ且ナリ此費用ノ三分ニ餘ハ外國ヨリ拂ハレタリ即チセルマニ、ポルトガル、アメリカ地中海ノ諸島港東西印度等ヨリ拂ハレタリ英國ノ王ハ貯蓄セル財宝ヲ持タリナリ又タ民家ノ金板ガ亦タ此大数マテ鎔解セラシト云フトナリ聞カサナリ而シテ此國ノ貨幣ハ千百萬磅以上マリトハ信セラレサリキ志ル年金貨ノ改鑄以來其分量大ニ減少セリトノ事ナリ故ニ此ノ金貨ヲ以テ最モ多数ト思考シ三千萬アリト假想セヨ若シ此貨幣ヲ以テ償ヒタラニハ此六七年間ニ少クトモ二回程ハ此金貨幣ヲ輸出セサルヘカラス此一例コソ政府ノ金ヲ軍備ノ為ニ貯フルノ謂ハレナキトテ證スヘシ何トナレバ若シ其償ヒ全ク貨幣ニ歸スルトモハ英國ノ貨幣ハ悉ク除去セサルヘカラス此際英國ニ於

テ貨幣ノ乏シキヲ憚ルカサナリ外國交易ノ利ハ此戰爭ノ間ハ尋常ヨリモ利多ク殊ニ終末ノ比ニ至リ盛ナリキ

故ニ先年ノ戰爭ノ費用ハ金銀ヲ以テ拂ヒタルニ非スシテ重ニ英産ノ商品ヲ以テ拂ヒタルヲ知ルヘシ若シ政府カ商社ト約定シテ外國ニ金ヲ輸送セシムルトキハ此商社ハ外國ノ社中ニ通シテ之ヲ拂ハシムヘシ而シテ商社ニ於テ外國ノ社中ニ償辨スルハ金銀ヲ輸送センヨリハ寧ろ商品ニテ償ハンコヲ務ムヘシ若シ彼國ニ於テ英産ヲ要セサルキハ此商人ハ寧ろ彼國ニ死テタル手形ヲ買得ヘキ他國ノ商品ヲ送ルコトヲ務ムヘシ商品ノ輸出ハ大ニ利アリ金銀ヲ運送スルモ此利ヲ生セサルナリ

先年普仏戦末ニ於テ仏ハ一億萬フランクノ償金ヲ拂ヒタリ然リ而シテ佛ノ輸出ハ非常ニ増加シ普ノ輸入ハ非常ニ超越シタリ是レ亦タ通貨ノ商品ノ割合ニ平均ヲ保リ、勢ヒアルカ為メナラスヤ然レド仏ハ決シテ一億萬ヲ取返セシニ非ザルナリ唯タ先ニ與ヘタル貨幣ヲ取リ戻シテ商品ヲ手ヘタル誤ナレバ夫張リ一億萬フランクハ唯タ附与シタルナリ前表ニ於テ日本英國ヨリ外債ノ輸入セシ時ノ景況ヲ熟視スルハ如此キ小額ノ金高サヘモ凡テ通貨ノ有様ニテ未ダナルコトヲ知ルヘシ何トナレバ通貨ノミヲ輸出セハ商品ト通貨ノ割合

ヲ混淆スヘケレハナリ

合衆國ノ保護法ハ其國ノ為ニ利益ナキ

田口氏著自由貿易
日本經濟論摘要

大ニ合衆國ノ地タルヤ金ヲ生シ世界ニ供給スルノ國ナリ然レバ天然ニ於テ輸入常ニ輸出ニ越ヘサル
ヘカラス蓋シ金ヲ生スルノ國ニ於テハ金價ハ之ヲ生セザル國ヨリモ廉ナリ(地金ニテモ貨幣ニテモ共
ニ廉ナリ)故ニ是レヲ國內ニ收蓄センヨリ直ヲ求メテ之ヲ外國ニ沽ルニ如カス抑々如何ナル物品
ヲ論ヒス善キ直ナル所ニ賣ラレテ之ヲ幣キ之ヲ賣ルハ一人ノ為メニ大利ニシテ國家ノ為メニモ大利
ナリ故ニカリホルニア、鑛夫ハ其金ヲ合衆國ノ他ノ州ニ賣ラレテ之ヲ賣ルヲ利アリトス何トナレバ
カリホルニア州中ニハ其價ニ廉ナレバナリ合衆國モ亦タ他ノ金ニ欠クセザル國ニ賣ラレテ之ヲ
賣クヲ利アリトス何トナレバ合衆國中ニ於テハ金價安ケレハナリサレハ合衆國ニ於テハ金ヲ生
スル國柄ナルニ付キ如何ニシテモ輸入ノ常ニ輸出ニ越エシテ而シテ其越エルハ却テ合衆國ノ利益
アリト云ハサルヘカラス何トナレハ其國產ナル金ヲ善價ニ賣リ捌キタル訣ナレハナリ
然リ而シテ合衆國ハ不換紙幣七億弗ヲ發行セリ假令ニ此紙幣ハ交換シ難キ空券ナルニ
シテモ現ニ幾分ノ信用ヲ得テ人民此ヲ拒ムモノ無キヲ見レハ實ニ不充分ナカテモ貨幣ニ
大物能ナルノ交易ノ媒介トシテ價ノ度量タルヲ得ヘシ既ニ貨幣ノ代用ヲ為サハ七億弗

紙幣ハ七億弗ノ貨幣ヲ増シタルト同一理ナリ否ナセ億弗ト言ヒテハ餘リ多キニ過クレ
トモ今日米洲ニ於テ現ニ一割一分位ノ打歩カアルユヘ六億三千萬弗ノ貨幣ヲ増シタ
ルト同一理ナリ既ニ貨幣多クテレバ其價下ル其價國內ニ下レバ之ヲ外國ニ用ユレバ利
益アリ

今更ニ一歩ヲ進ンテ何エニ保護税ノ貨幣輸出ヲ防ク能ハサルヤヲ推定セサルカラス瀧マリ
高ク雲際ヨリ落ッ落ツル所ノ水ハ湧躍シテ幾多ノ水流ニ向テ流ルルマリ此水ヲ貯エント欲
瀧ヲ環シテ堤ヲ作シテ一時能ク水ヲ貯ラ然レバ其水ト堤ト同一ノ高サニ登ルニ至リテハ此
堤ハ更ニ水ヲ防ク能ハサルナリ更ニ落ル所ノ水ハ堤ノアルト無キトニ懈セス悉ク氾濫シテ
去リ此水ヲ憂ヒ更ニ堤ヲ高ス其水一時流出ヲ拒マルト虽モ寸時ニシテ水亦タ之ニ
滿ケ更ニ注入スル所ノ水ハ悉ク溢ルニ至リ合衆國ノ保護税ヲ用ヒテ金貨ノ輸出ヲ
防ク能ハサル亦タ此理ナルニ保護税ヲ以テ幾分ノ貨幣ヲ國中ニ集蓄スルヲ得ヘシ
ト虽モ更ニ生スル所ノ貨幣ハ悉ク溢流セサルヘカラス今日ノ如ク大割ノ保護税ヲ課ス
スルモ猶ホ輸入多クシテ貨幣ノ外去止マラサルモハ貨幣既ニ大割ノ堤ニ滿テ更ニ生ス
ル所ノ貨幣ハ此堤ヲ越テ溢流スルニ非ラヌヤ然ラハ合衆國ノ如キハ現今貨幣多

キ乎六割、堤ニ滿ケテ而シテ外國ト水卒ヲ保タル乎、莫ニ然リ何ヲ以テ是ヲ知ルヤ、物價ノ貴キヲ以テ之ヲ知ルナリ、物價ノ貴キハ貨幣ノ安キニ非スヤ、貨幣ノ安キハ貨幣ノ多ニ非スヤ、斯リ貨幣多クシテ世界ト水卒ヲ得ケルモノハ保護税ノ堤マルニ因ルニ非スヤ、嗚呼、貨幣國中ニ滿ケテ而シテ其價卑シケレハ果シテ何ノ利アルゾヤ

米商心得ノ事 古俗ヨリ振草セシ者ニ據ルル 米商必携振草

一 二月中ノ相場ニテ年中ノクセヲ見通シ置ヘシ若シ初相場旧冬ヨリ高キ時ハ大凡六月迄上リ又安キハ大凡六月迄下ルヨシナリ

一 並ノ月ニテモ丑ノ日飛上リ或ハ大ニ下ル時ハ又次ノ丑ノ日大ニ高キヲアリト知ベシ

一 二季ノ彼岸ニ酉ノ日アレバ必ス其年大風アリト、ソノ荒シモ一季ノ彼岸ニノミアル時ハ妨ケナカルベシ、總体彼岸ハ一日ニテモ毎日急リナク心ヲ付テ天氣ノ模様ヲ察セサルベカラス、彼岸ニ風ナケレバトハ秋ニ風フクトテモコフコナシ但シ秋ノ彼岸ニ七日ノ内一日ニテモ九月ハカ、ルハ米作ノ凶兆ト考ベシ

一 一年ノ四季ヲ二季ニ分ケ二季ヲ三月九月西月ニ見テ積ルコトアリ或ハ春夏ハ三月秋冬ハ九月ナリ、壁言ハハ三月安ケレバ夏米ツヨク素ヨリ三月ノ相場ニ見ヤ

ウアリ、其見ヤクニ依リテ天地黑白ノ差トナル事アリ若シ此相場二月ヨリ下リ三月ニ同株据リテ持合フ時カ又二月高ク三月安シト云フモ同月中ニ一日モ二月中ノ安直段アラサルハ高キ方ト知ルベシ、三月高ケレバ夏米安シ三月安ケレバ夏米高キ方ト思フベシ

一 夏中長雨ノ年ハ秋ニ至リ天氣宜シカラシ

一 六月ノ土用中ハ最モ心ヲ番ムベシ、何トナレバ土用ハ四季ヲシテ中心ナレバ土用ニ入ル日ヨリ六日ノ内ニ丑ノ日アル年ハ必ス作物アシク若シ入ル日ヨリ六日ヲハッレテ丑ノ日アル年ハ支ナカルベシ六日ノ内ニ丑ノ日アレバ寒立早ク秋風ヲ催スベシ、人身ニハ知サレ氏草木ニハ知ル易キ者ナリ又六日ヲハッレル時ハ寒立モラソカラシ、若シ寒立早キ時ハ作物アシク其上六日ノ内ニ丑ノ日アル年ハ必ス相場高下アラクシテ大凡高直ガテナラン人此丑ノ日ヲ忌ミ嫌フ所以ハ丑ノ日ノ丑ノ刻ニ初テ秋風立コトアレナリ、六日ノ日取ハ假ニ土用ニ入ル日ヨリ六日ノ間ヲ秋三十日ト定メ土用一日ニテ秋五日ツト積リ五六三十日トナルナリ

一 六月ノ節ニ入ル日、雨降レハ作物アシキヨシ、後令一粒ニテモ雨降レハ甚

シク尤モ右ノ節ニ入日ヨリ三日程ミ降レバ結局差シタル障ナシ、若シ節ニ入ル日陽ヲ入レバ妨クゲナリ陰ヨリ入レバアシカルベシ、但シガフト降レバアシ、何トナレバ節ニ入ル、日雨降リトクレバ土用ニ雨ナリ且節ニキフト降レバ土用日和アシキモノナル故ナリ

一丑ノ日ガ土用ニ入日ヨリ最初、三日ノ間ニアレバ大ニアシク後三日ノ間ナレバ最初三日ノ間ホトニ障リナシ、サリナクテ此後三日ノ間ニ有ルト、ナキトハ甚シキ違ナリ

一六月ノ節ニ入日ト土用ニ入日トハ陰ニ入ルカ陽ニ入ルカ能ク氣ヲ付ツベシ、但シ陽ニ入ルトハ子寅辰午申戌ノ日又陰ニ入ルト去フハ丑卯巳未酉亥ノ日ナリ

一土用上六日ノ内ニ丑ノ日アル年ハ相場ノ高下荒ッ又六日ノ内ニナキ時ハ下リガケナラン

七月八月九月ノ三ヶ月ヲ以テ十霜極ノ三ヶ月ト見クテ事即チ秋三ヶ月相場ニテ或ハ七月八月安ク又八月ヨリ九月安キ時ハ仕舞相場安カルベシ又七八

月ヨリ九月高キ時ハ極月高仕舞ト見ルベシ
一土用ニ丑ノ日有リテ秋風吹ケハ八月頃必ス上ルモノナラン若シ格別上ラレバ十一月ニ至リテ高クナルコトアルベシ

一世ノ人氣ニ随ヒ其年々ノ底直段ヲ知ル事コシタシ、第一ナリ
一天井直段ハ大方七八月頃ニアルモノナリ但シ米沢山アル内ニ古天井直段出ルキハ必ス下ルモノナリ右天井ノ直段ヨリ秋作新米ノ直段都合ニテ譬ヘバ拾ヌ下リ豊年ナレバ今少シモ下ルナリ相場次第ニ下ルニナラズ其上ニ三日ノ間一ヌツ、高下アル内ハ其所ヲ見合セヨリ、近キ事モアルベシ

一次第ニ上ル時ハ高直段持合ノ時必ス下ル事アルナリ又次第ニ下ル時ハ持合ハ上リ下地ナラン落キラス上リモセス中ニテ高下ハ分明ナラス押負シ方ヘカタツクモノナリ

一春下リ六月下レバ此時大下リアルナラン賣置ニヨキ月ハ三月六月九月ト云、冬三ヶ月ハ時ニ應ヒ掛引スベシ但シ六月ハ天災ニヨリ大高下アレバ賣買ニ最モ心ヲ用ヘルベカラス

一五月大水ト聞カバ米賣事ナカルベシ勿論大旱トテモ亦然リトス
一六月土用天氣悪キ時ハ米賣事宜シカラス但シ後ニ至リ日和直リ相場引下カルトモ秋

ニ至リ收獲少ケレバ必ス上ルベシ

一ケナリ賣、ケナリ買、腹立賣、腹立買、天井ヲ賣ラス、衣ヲ買ズト云フコトアリ是最モ心ヲツクベキ事ナリ

一氣ニ當ルト云事アリ假令ハ賣米アルキト上ルベキカト氣ニコタヘル事アルモノナリ其日必ス米一ハヘニスベシ翌日ニテモ賣直シアル物ナリ買米アル時モ亦此心持ナリ

一モウハマダナリ、マダハモウナリ、云フ事アリ此心ハ譬言ハハモウ底ニテ上ルベキトス、ム時マカナリ云心ヲ今一應モカヘ見ルベシ、マカ底ナラス下ルベキト思フ時、モウ、心ヲ考フベシ、必スマカノ心アル時ヨリ上ルモノナリ

戸ノ字 玄内放言

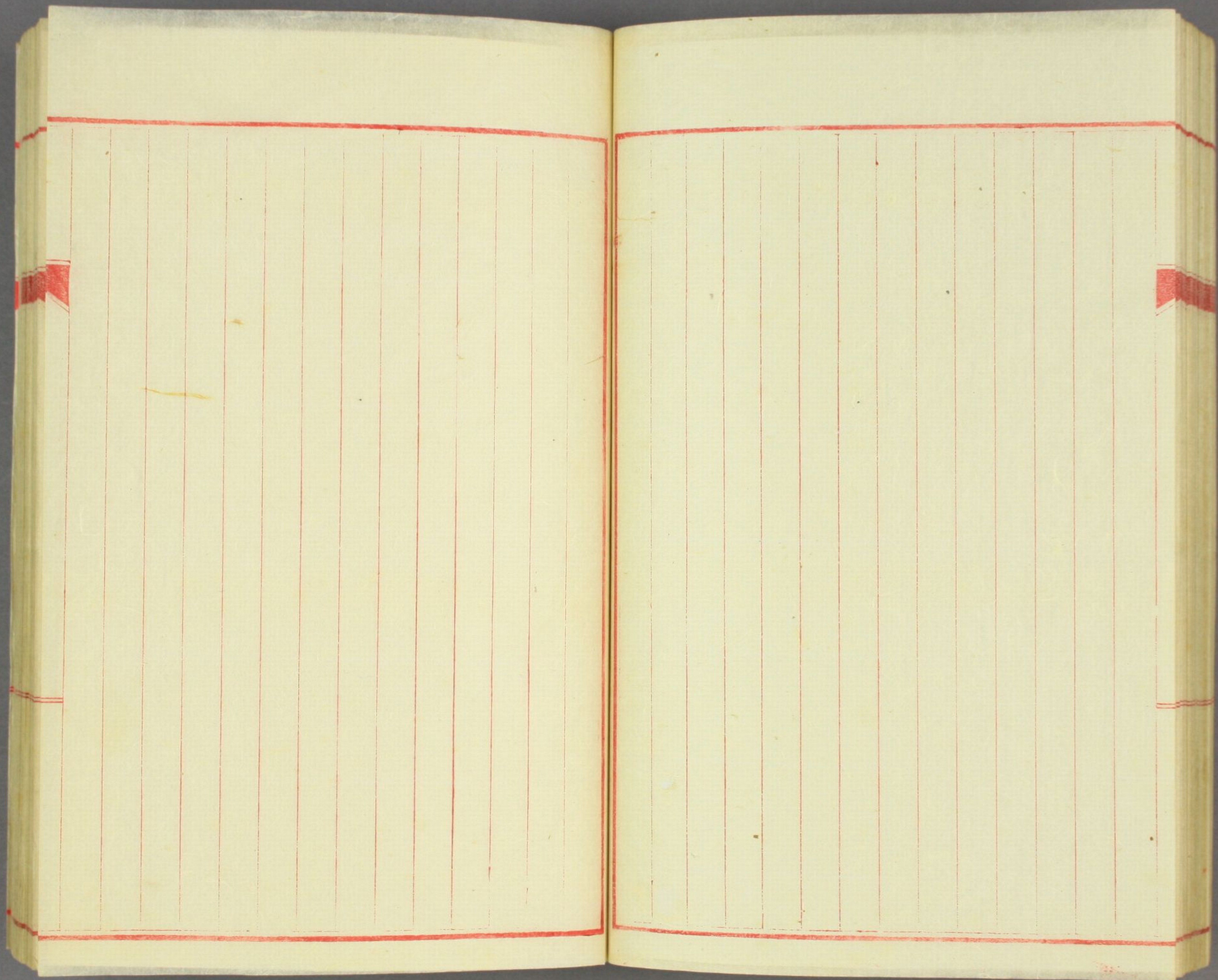
太平記ニ江戸遠江守アリ、コレラノ人ニ其地ヲ名乗タレバ江戸、地名ハナホ古ヨリ唱タルナルヘシ初ハ莊ナリシニヤト或人ハウヘド然ラズコ、ハ江村ナリ初ハ總ニ船泊ル処ナレバ江戸ト唱タルナルヘシ何トナレバ淺草今戸船川戸(表川)ニ昔ハ漢戸ナリケルヨシ也應仁天明ノコロマテモ今戸船川戸、アルコトヲ聞ケルハ城邑ナラリレバナリカ、レバ江戸今戸、戸ハ鳴戸由良、戸ノ戸ノ

如リ淺ト泊ノ略辭ナラシ岸陸ノ水戸モコレナリシトハミナトノナリ者ケリ水戸ト書キタルハ淺又淺ノ假字ナリ丸テ戸ト唱ル地面ニ水辺ナラヌハ稀ナリ伊勢ノ神戸ハ官戸封戸ノ戸ナレバコレトウシラス鳥羽ハ泊ノリヲ首リ川ノ横音相通ス鳥羽ト書ハハ假字ナリ又港場ノ畧辭ト云ンモ由ナキニ非スリハレ先聲ヲラタヤカ也トスベシ

隱戸ノ瀬戸 傍古漢字西遊記

安藝國隱戸ノ瀬ト云海アリ此處ハ國ノ南ノ山邊ニ突出テ六七里海エニ出タリ其山ノ陸地ニ連ル處甚ク細ケレバ海へ出タル處程ヲ山ヲキリ窟ヲ切り通シテ舟ノ通フ海路ヲ新ニ作りシナリ其所人カラ以テ切明タリシ事ナレバ兩方ノ岸セマリテ其間ノ潮行甚急ニテ舟人ノ悲ル、憂ナリ平清盛安藝守ニテ此國ニ居給ヒシ時毎度往來ニ此處餘ニマリ道ナレバ驚キナリト云又藝州ノ陸地ヲ通リシ時其大道ノ作り様ヲ見ルニ他ノ國トハ違ヒテ多クハ真直ニ作りタリ元來山國ナレバ直ニハ付カタキ道ヲ山ニ登リ谷ニ下リテ無理ニ近道ニ作りナレリ日本ノ道路

ハ其始ノ大方行其基薩ノ差回ナリト云事ナリシカ何ノ国ノ道モ山ヲレハ
其裾ヲ通リマハリテ谷ヲ傳ヘ行キ城ル犬ハ山坂ヲ登リ下ラズ平坦ノ
處ヲ通ル樛ニ付タル者也曰茲おニ成ラハマハリ道ナク大方直ニ行極
ニ山谷ヲ厭ハス豈リ下リテ道ヲ付タリ是モ平相国ノ手ニ成タル
ニヤ



合衆国輸出入税

明八月二十日
東京日新報

吾輩ハ米國経済学者著書ニ據リ米國ノ輸出入高計表ヲ見ルニ一八三〇年ヨリ毎年
輸入高ヲ増加セシニ一八三七、一八三八、兩年ニテ俄カニ減少シ一八三九年ハ又甚ク増加シ
一八四〇年ニハ輸出ヨリ少ナシ試ミニ之ヲ左ニ證ス可シ

一八三六年輸入、越高	六一、三一六、九九五
一八三七年、	二二、五六九、八四一
一八三八年、	五、二三〇、七八八
一八三九年、	四一、〇六三、七一六
一八四〇年輸出、越高	二四、九四四、四一七
一八四一年輸入、越高	六、〇九四、三七四
一八四二年輸入、越高	四、五二九、四四七

右ノ如ク僅々六七十年ノ間ニ於テ輸入ノ越高ニ於テ驚クヘキ増減ヲ生スル者ハ纔ニ幾分
ノ税ヲ減シタル故ニモ非ス又之ヲ増タル故ニモ非サルヘシ必ラス他ニ根柢スル所ノ原
因ヨリ起ル事ナリト想像セサルベカラズ

此原因ハ他ニ非スハ乃チ紙幣之ナリ一八三六年マテハ米國ニ於テ毎年紙幣ノ高
ヲ増加スルニ随ガニ輸入品ノ高モ又從ツテ増加セシケル一八三七年ヨリ一八五七年マテ
ノ間ニ於テ頻リニ理財ノ改革ヲ為シ銀行ヲ停業シ紙幣ヲ支消シタルニ付キ其状
ヲ見レハ紙幣ノ増減ハ著シク輸入ノ増減ヲ制シタル蓋シ米國史ヲ業スルニ一八二二年
ノ戰爭ヨリ其ノ紙幣ハ追ツテ増加シ四千万圓ノ高ヨリ遂ニ一億萬ニ至リシハ一八六六年ノ
事ナリ此年ヨリシテ追ツテ銀行ヲ停業シ紙幣ヲ支消セシメ一八二〇年ニハ五千五百万圓
ノ高マテニ減少シタル輸入品モ亦然リ一八〇七年ノ頃ハ七千万圓ノ額ナリシモ戰爭鎮定
後ハ盛ニ増加シ一八一六年ニ至リテ一億三千万圓ニ上リ又コレヨリ次第ニ減ジ一八二〇年
ニハ六千万圓ニ降リタリ一八二〇年ヨリ一八三三年マテノ間ニハ米國紙幣増加スルハ
米國人ノ増殖スル割合ヨリモ早ク輸入高ノ割合モ隨テ増加セリ一八三三年ヨリ一八
三七年マテノ間ニ於テ米國ノ紙幣ハ夥シク増加シテ二億二千二百万圓ニ昇リケンバ
輸入高モ亦コレニ從カバ八千万圓ヨリシテ一億六千九百万圓ニ増加セリ一八三七年ヨリ
一八四三年迄ノ間ニ現在通用ノ紙幣ヲ支消シ二億二千二百万圓ヲ減シテ一億二千八百
萬圓ニ降シタルニ付キ輸入高モ亦昔日ノ一億六千九百万圓ヲ減シテ五千八百万圓ニ降

ラレタリ一八四三年ヨリ一八五七年ノ間ニテ再々又紙幣ヲ増加シ彼ノ一億二千八百萬田ヲ
 シテ四億七千四百萬田ニ昇ラシムルヨリ輸入高モ亦六千四百萬田ヨリ昇リテ三億三千
 七百萬圓ノ巨額ニ至リタリ尤モ此ノ計表ハ甚ダ精密ナラサルベシト雖モ粗ソノ通用紙幣
 ノ増減ト輸入品ノ増減トハ極テ直接ノ關係アルヲ知ルニ足ルベシノ米國ニ於テ一八二九年ヨリ
 一八六〇年マテノ紙幣并ニ輸入品ヲ比較シタル表アリ併テ左ニ挙テ其ノ關係ヲ證ス
 (一)

年曆	紙幣	輸入品	紙幣	輸入
年	百萬	百萬	圓	圓
一八二九	九六	五八	七、七〇	四、六一
一八三〇	九三	五六	七、二〇	四、三一
一八三一	九一	五三	八、八〇	六、二五
一八三二	八七	五〇	一、〇〇〇	六、二五
一八三三	八三	四八	一、二〇〇	六、二五
一八三四	八〇	四六	九、九〇	四、一五
一八三五	七七	四三	一〇、七〇	五、〇三
一八三六	七四	四〇	一〇、七〇	六、六〇
一八三七	七〇	三六	一〇、七〇	七、〇三
一八三八	六六	三三	一〇、七〇	九、八八
一八三九	六三	三〇	一〇、七〇	一、八八
一八四〇	六〇	二七	一〇、七〇	一、八八
一八四一	五七	二四	一〇、七〇	一、八八
一八四二	五四	二一	一〇、七〇	一、八八
一八四三	五一	一八	一〇、七〇	一、八八
一八四四	四八	一五	一〇、七〇	一、八八
一八四五	四五	一二	一〇、七〇	一、八八
一八四六	四二	九	一〇、七〇	一、八八
一八四七	三九	六	一〇、七〇	一、八八
一八四八	三六	三	一〇、七〇	一、八八
一八四九	三三	〇	一〇、七〇	一、八八
一八五〇	三〇	〇	一〇、七〇	一、八八

府下高低表 洋口社談第五十二号板
 大川通久

高低標地名

海平面上高距數

- 青山六道辻甲賀町 十九尺八寸
- 青山南町四丁目二番地 十丈八尺
- 四ヶ谷川 十丈二尺四寸
- 麻布六本木所光專寺 十丈一尺二寸
- 麻布一本松氷川社 九丈三尺五寸
- 半藏門外 九丈二尺六寸
- 赤坂紀伊國坂上 七丈九尺五寸
- 赤坂門 七丈四尺余
- 葵町二番地 四丈八尺五寸
- 白金村寛林寺 四丈二尺二寸
- 麻布宮下末廣社 二丈九尺六寸
- 麻布四橋東福寺 二丈六尺七寸

櫻田門

二丈四尺余

虎門

二丈二尺五寸

愛宕社華表

二丈〇〇三寸

下谷上野廣小路

一丈九尺一寸

全信濃坂下

一丈七尺五寸

赤羽根橋

一丈六尺四寸

日本橋南詰

一丈六尺二寸

神田萬世橋

一丈六尺

京橋

一丈五尺九寸

西国橋南詰

一丈五尺一寸

芝金杉橋

一丈四尺八寸

高輪大木戸

一丈三尺八寸

本芝四丁目

一丈三尺

下谷金松三島神社

一丈三尺

蓬萊橋

一丈二尺六寸

浅草鳥越社

一丈二尺五寸

馬場先門

一丈二尺四寸

永代橋西詰

一丈二尺三寸

下谷通新町四通寺

一丈二尺二寸

永代橋東詰

一丈一尺九寸

一石橋

九尺六寸

浅草本願寺

九尺六寸

吾妻橋際

八尺八寸

靈巖島新船松町

八尺五寸

深川八幡宮

八尺五寸

本所北辻橋際

五尺四寸

本所法恩寺

四尺五寸

深川洲壽禪天門前

三尺九寸

但最高最低差八丈五尺九寸ナリ

市ヶ谷八幡社

九丈四尺八寸

芝爰岩山上

八丈六尺六寸

牛籠赤坂社前

八丈五尺八寸

田安門

八丈四尺四寸

市ヶ谷薬王寺門前

八丈四尺

牛込喜久井所

八丈三尺五寸

本郷真砂町

七丈四尺

駒込追分

七丈四尺

白山前町

六丈七尺

市ヶ谷門

六丈二尺六寸

牛込神樂坂上

六丈二尺

湯島天神社前

五丈八尺八寸

牛込門

四丈

小石川久堅町

三丈七尺

小日向水道瑞本法寺

三丈二尺

水道橋

二丈四尺七寸

神田橋

一丈四尺五寸

一ツ橋

一丈四尺

雉子橋

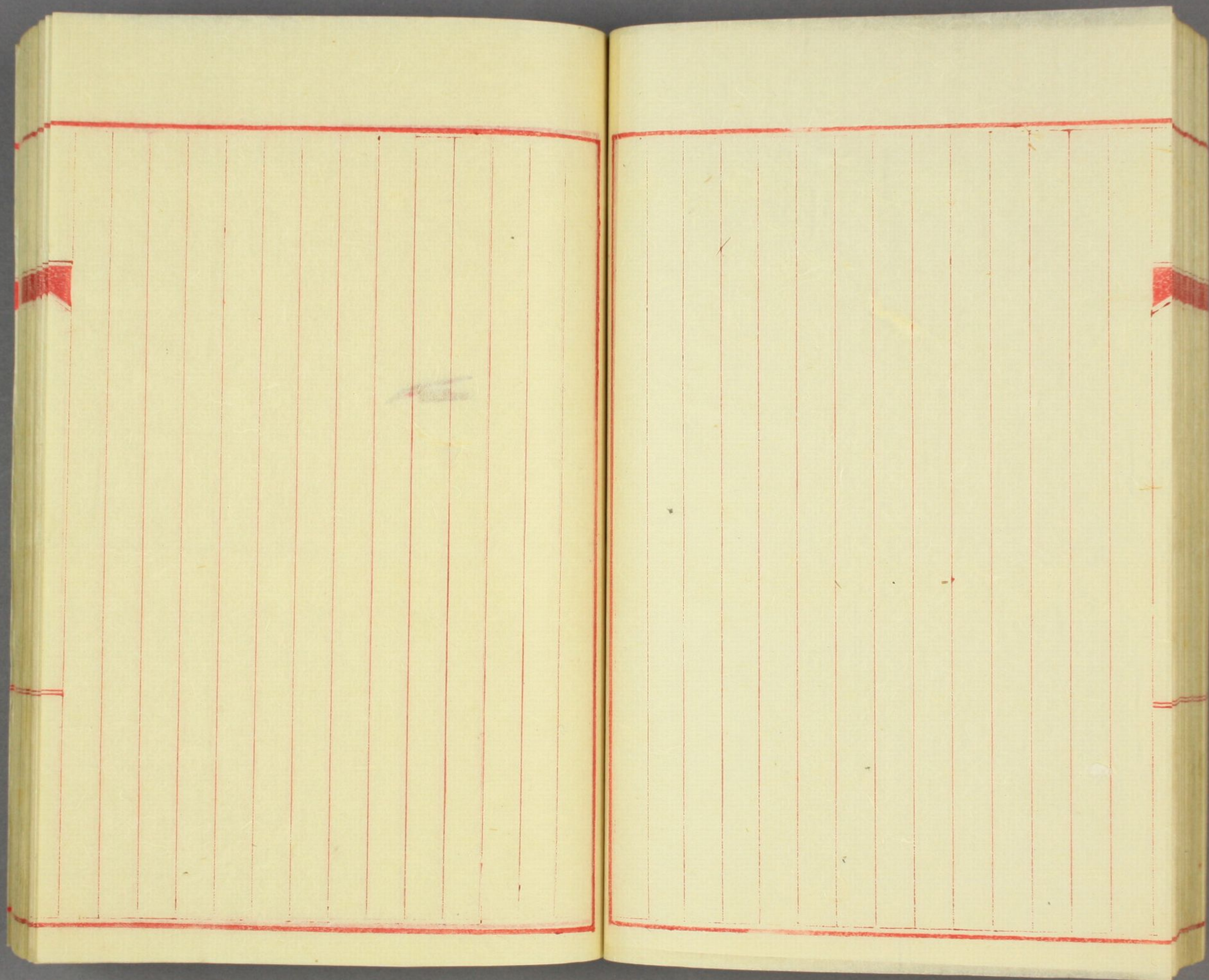
一丈二尺

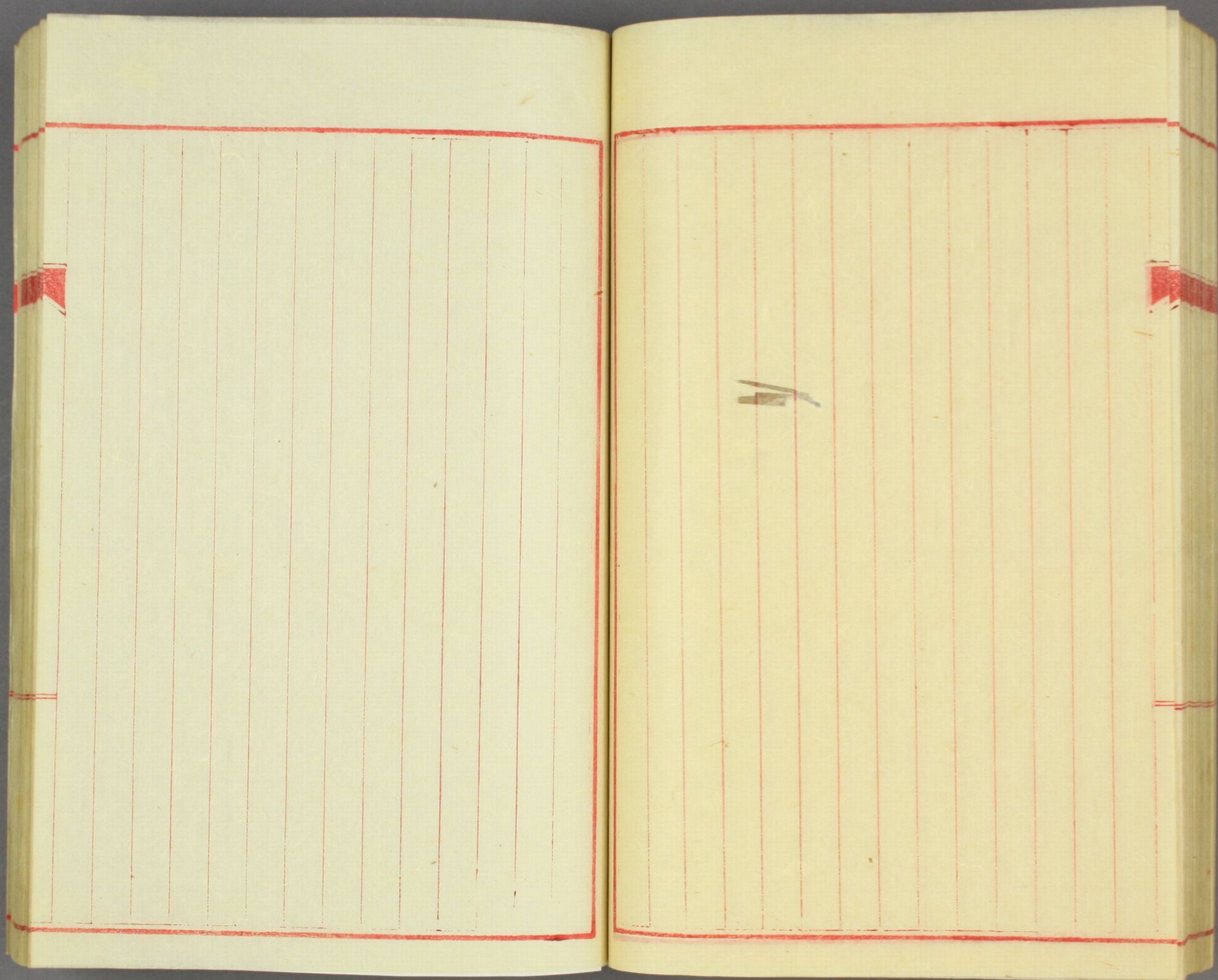
木挽町海軍操練所

七尺五寸

駿ヶ臺東紅梅町

六丈六尺





日本人ハ身軀ヲ強壯スル方東京日日新聞 第千六百三十三号

吾曹ハ茲ニ日本人民々概テ身軀ノ強壯ニ及リ所アルヲ證センカガ最ニ讀者ニ接近スル
ノ一例ヲ挙示スベシ夫レ我邦ノ兵制ニ據リテ姑ク四萬ノ定備兵負ヲ要シ毎歲共三分ノ一
ヲ徵募スルト假定セハ毎歲ノ徵兵ハ一萬三千餘人ナルベシ而シテ明治七年ノ調査ニ據レハ
十五以上廿歳マテノ男子ノ數ハ二百二萬二千七百六十二人ナリトス試ニ之ヲ五分スレハ
四十萬四千二百六十八人強ニ當ルニ付キ乃チ日本全州ニテ廿歳ノ男子四十萬餘人ノ内ヨリ
僅々一萬三千餘人ヲ徵募スルノ割合ナレハ徵兵合格ノ強丁ヲ得ルニ容易ナルベキ筈ナレ
ト現ニ徵兵使及ヒ医官ノ報道ニテハ往々合格者ノ徵數ニ不足アルニ苦シシ時機ニ應シテ
ハ其合格ヲ左右セサレハ需ムル所ノ兵負ヲ徵シ難シトスフ迄ニ至レリト傳談セリ之ヲ聞
ク我邦徵兵ノ軀格ハ仏日ノ制定ヲ抵表シテ以テ太ク我邦ニ適應セシメタル者ナレバ敢
テ得カクキヲ非常ニ望ム程ノ合格ニハアラスト然ルニ歐洲ニ於テハ人口三千萬乃至四千
萬ノ國ニシテ三四十萬若クハ五十萬ノ常備ヲ徵募スルニ我邦ノミハ堂々タル帝國三千三
百六十餘万人ノ人口ニテ四萬ノ強丁ヲ得ルニ差支アルハ其根由ハ日本人民カ身軀ノ強壯
ヲ及クニ出ルニ非ズ

東京小民救済

朝野新聞第千二百二十二号

明治維新、際ニ於テ東京ノ小民ハ其貧困ニ堪ヘズ、動モスレハ動揺ヲ為ス、操リ政府ハ之レニ産業ヲ付与スルノ方途ヲ考案シ之ヲシテ下総ノ十三牧ヲ開墾スシメント欲シ三井小野以下豪商二百六七十名ヲ勸メテ一會社ヲ設立シ二十萬田ヲ貸下シテ開墾ノ資金ト爲シ窮民ノ牧地ニ移住スルモ、ハ一家ニ畑五段歩屋敷地五畝歩ヲ与ヘ而シテカ家定ヲ作リ一口ニ就キ日カニ米五合ト錢百文ヲ三ヶ年間ニ給付スルノ約ヲ結ビシニ府内ノ人民ハ紛々トシテ之レニ赴キ爭テ開墾ニ從事セリ然ルニ其間ニ於テ種々ノ弊害ヲ出生シ未ダ一年ナラサルニ會社ヨリハ前途ノ目的ヲキテ政府ニ申請シ開墾ノ事業ハ遂ニ瓦解ニ歸セシカ會社ニ於テハ二十萬田ノ外ニ八十萬田ヲ消費セシテ以テ再三之レヲ歎願シ政府ハ其二十萬田ヲ追徵セス共八十萬田ノ金額ノ爲ニ小間子ト稱スル二千余町ノ牧地ト牧馬二三頭ヲ并セテ會社ニ下附セリ然ルニ貧民ハ米錢ノ給与ヲ廢止セラル、ヤ否ヤ直チニ米糶ヲ授テ先キテテ東京ニ歸リシテ以テ其起及セシ土地ニ概テ荒蕪ニ歸シ現今十三牧ニ於テ僅カニ村落ヲカスモ、ハ概テ其ノ近傍ヨリ來往セシ小作移民ト稱スルモノニ會社代理ト移民ノ例ニ常ニ紛議アリト

京坂鐵道築造經費

東京朝野新聞 千三百四号

左ニ掲ケル所、一表ハ即大坂京都兩府、間其距離十一里〇五丁余(大約英里九七里ト五分之一)ニ通セラルベキナローゲイジ(鐵道軌線)狹キモノヲ云フ鐵道之新築經費ヲ概算スル者ニシテ此概算ハ二千五百卅三年二月十七日日本鐵道建築之大技師英人ボイル氏ノ手ニ出タリト云フ表中分ケテ十九項トナス

- 第一 鐵道敷地 此平方坪四拾五万〇〇五十一坪餘 此地價金七万貳千四百九十圓
- 第二 鐵道ニ關スル切通シ隄防溝渠植坪地面、裝飾等此立方千五十四万五千八百七十五坪(英坪大約百〇九万七千七百五十七ヤルド)此工價金八万七千〇七十三圓
- 第三 鐵道ヲ護スル諸柵 此延長間敷八百四十圓(英ケイーン)大約八百ケイーン 此價金九千九百十四圓
- 第四 鐵橋 此延長二千三百十尺 此價金二十三万八千八百七十七圓
- 第五 石橋及煉火石及木橋 此橋數二十三 此價金四万三千九百圓
- 第六 路底ノ諸渠及溢水ヲ防ク門戸 此價金十四万七千七百〇二圓
- 第七 溢水除及水門 此延長二千四百四十二尺 此價金十萬二千八百八十圓

- 第八 鉄製水樋 此價金七千圓
- 第九 線路ヲ横截スル收徑 此徑數百〇二 此修築費金六千九百九圓
- 第十 河堤ノ修繕 此延長三百八十五間 此費金一万四千圓
- 第十一 下水路ノ更設 此延長拾一里〇五丁餘 此更設費金二千七百九圓
- 第十二 堤陂ニ植付ル竹ノ價 此延長五千〇六十間 此價金二千九百四十圓
- 第十三 鉄路里程及其高低標 此延長拾一里〇五丁餘 此價金千三百六十圓
- 第十四 鉄路ノローゲージ線 此延長十一里〇五丁餘及取亭遊路等 線ヲ加ヒ通計十五里餘 此鉄路價金三十四万三千四百三十八圓但大約一里ニ付二万二千八百九十五圓 八十七錢弱ニ當ル
- 第十五 轉換車臺及号信器 此價金貳万圓
- 第十六 取亭(ステーション) 七亭 此價金貳万五千圓
- 第十七 住宅(諸職吏ノ住スル所) 此價金四万三千圓
- 第十八 運轉器(鉄道列車) 此車數七十五輛 此價金二十一万四千六百八十五圓
- 第十九 船齋ヲ要スル諸品・運賃及建築ニ屬スル諸雜費 此雜費金四万二千九百卅五圓

合金百四十一萬九千七百三拾圓

此外ニ

臨時入費十四万四千七百八十圓ヲ要スルヲアルベシ之ヲ統計スレハ

統計

金百五十六万四千五百十四

但大約 一里十萬四千三百四圓余

明治八年紀事卷中三菱會社ノ件

初、同濟會社郵便汽船會社等 設立スレバ沿岸航海ノ實權ハ米國太平洋郵船ニ專有セリ
 レタリ去年一月十八日、官令ヲ以テ日本政府ハ三菱商會ニ貸シ与フルニ四艘ノ汽船
 フ以テ上海横濱ノ間ニ每周ノ通航ヲ開テ太平洋郵船ニ拮抗セシメ九月ニ至リ此三菱
 ニ附スルニ官艘十四艘ト共五万圓ヲ以テシ益々内海沿岸ノ通航ヲ盛ナラシメタリ
 此時、當テヤ太平三菱ハ持用ノ勢ヲ張ルカ爲ニ互ニ乘客荷物ノ運賃ヲ低下シ各々敵
 手ノ自滅ヲ期望スルノ姿ヲ顯セリ是ヨリ先キ太平洋郵船社ハ横濱上海ノ文線ヲ日本政府

ニ賣ラシトテ企テ之ヲ發言シタレ民事故アリテ荏苒セシ十月ニ及ニ遂ニ適宜ノ代價ヲ以テ三菱ニ賣渡セリ尤モ此ノ太平郵船支船買入レノ代金ハ日本政府ヨリ之ヲ三菱ニ貸与ヘタル所ナリ明治元年會計簿算表ニ金八十万圓三菱會社ニ貸金トアルヲ以テ之ヲ徴スルナリ

幕吏ノ干渉北方丸創録卷九下

又中國ノ内ニテモ筑後肥前ノ様ニ引水ナリ堀水ヲ汲上ル処ニアル由然レレ之ハ多ク踏車トテ少サキ水車ノ様ニシテ羽根ヲ柄杓ノ如ク作り田ノ水口へ移ス城州淀川ノ水ヲ水車ニテ城内へ例込ム様ナルモノナリ先年右ノ踏車ハ人夫ノ掛リモ少ク利方宜シク見ユルニ付久留米族ニテ其仕方ヲ馴レタル中國浪人ヲ抱ヘ領主ノ入用ヲ以テ車ヲ數多ク持ヘ村々へ渡シ踏方等ヲ右ノ者巡村シテ教ヘ田毎ニ仕掛タル処水ハ柄杓ニテ入り田ニモ移レハ桶ニテ汲上ルヨリ運カニ劣リ悉ク田方渴水ニナリ旱損セシニ付百姓奉テ願上踏車ヲ止テ元ノ汲水ヲ成タリ又其翌年ハ右ノ浪水者世話ニテ播州ノ粃種ヲ取寄タリシガ此稻ハ悉ク穀多ク作りテ徳用ノ由村々へ販ニ三斗宛相渡シ植付ケリシニ草生ニ宜シク生長シタル処實ハ頃ヨリ何レノ村方ニ仕付タルモ穂枯致シ都テ白枯ニ成リ種ニ取レス領主地主トモ損失ニ成リタリ故ニ之モ夫限りニ止ニ成リ畧寛政ノ始ノ甲州ニテ或ル代官勤役中田ヲ耕ス

ニ馬ニテ牽スルヨリ牛ノ方利方宜シク其上馬ト違ヒ牛ハ飼方ノ入用モ少クホムルニ價モ安リ馬ハ女ケ子供ニテモ口取致サテ耕手計リニテハ行ハレサル故兩人ノ手ヲ費シ牛ハ耕手計リニテ口取モ入ラズ百姓ノ勝手宜シク夫故上方筋ハ田畑ヲ耕スニ馬ヲ用ユルコトナリ牛計リニテ牽スルニ付甲州モ一四牛ニ致スベキコトヲ支配ノ村々へ申渡シ右代官ノ古郷成上方筋へ申遣シ牛五匹ヲ自己ノ入用ヲ以テ買入庄屋ノ内ニテモ可成働キナル者ヲ見立テ五箇村へ預テ牛ノ遣ヘ方ヲ教ヘ田ヲ耕サスルニ百姓ニ支配代官ノ申付ニ任ヒ牛ニ牽スル処成程口取モ入ラス飼方ノ入用モ少ク勝手ノ様ニ辨シレ馬ハ田ノ隅々マテ歩キ四隅トミ犁田ク故耕シタル儘ニテ人手掛ラス牛ハ隅ノ方ニ行掛ルト早々廻ルユヘ隅々へ犁田カス三四尺四方ノ隅ノ方残ルユヘ復整テ以テ四隅ヲウナヒ其上歩行運ク役令ハ馬ニテ一日ニ一反ヲ耕スモ牛ニテハ漸々三四畝ヲテハ耕サス又甲州ハ山稼多クアリテ宿場ニアル故農業ノ障ニハ駄賃馬ニ出ヌハ山ヨリ柴藪ヲ附出シナトスルニ馬ノ方宜ク古人ヨリ馬ヲ使ニ来リ彼是差引スレバ馬ヨリ牛ハ利方ニ宜カラス依テ此次第ヲ申立免許ノ儀ヲ村々ヨリ願フニ付代官モ詮方ナリ右ヲ遠回ノ上方ニ返スコトニ成リ難キユヘ江戸へ出セシニ車牛ニハ少シモ例ニ合ハス扱ナリ信州へ下直ニ臺梯ヒタル由畧又越後編奈良駒等ヲ

織出ス集ト云草ハ羽州ヨリ出ルコトナリ羽州ニテ集ヲ作ル土地ハ甲州ニ似タル由故甲州ニテ之ヲ作り出サハ利益多カルベシトテ右代官ノ世話ニテ集ノ種ヲ求メ村々ニ造ル様ニ成タリ勿論某ハ甲州ニモ野方原地ナトニ自然生ズシ江戸駿河臺ノ土手ナトニモアリ是又百姓不得心ナカラ代官ノ云付エハ黙止難リ畑ヲ潰シテ作り出タリ勿論羽州ニテノ作り方肥シ等ノ仕方ニ相違シテ作ラムルニ随分生長シテ能出来タリ大ヲ羽州ニテ為ハコトク皮ヲ剥製法シテ青等ニ成タルヲ布ニ織セタル処地性甚タ宜シカラス下カノ麻ニテ織タル布ヨリモ至テ弱リペラニトシテ一向用ス之モ一年ニシテ止ミタリ

東京質營業 東京日々新聞 第七百五十一號

現行ノ質渡世營業ノ東京ニ行ハルヲ見ルニ抵當ハ衣服ヲ以テ一般ノ品類トシ其期限ハ之ヲ六ヶ月ニ約ス六ヶ月ヲ過レバ輒ケ流レトナル其ノ利息ハ之ヲ四種ニ別ケ(第一)四以下ノ質ハ置立脚上ト相對ニテ定ムレバ概テ十回ニ付月廿五錢ノ利息ヨリ多カラス(第二)十回以下ハ一回ニ付三錢ノ月利(即年三)第三一回以下ハ廿五錢ニ付一錢ノ月利(即年四)廿五錢以下ハ錢質ニヨリテ異同アレハ大抵ハ一錢ニ付キ六毛乃至八毛ノ月利ヲ收ム(即年四)但シ墨財首飾ノ如キハ之ヲ道具質ト唱ニ復具蒲團ノ如キハ之ヲ萬高物ト名ケ共ニ以

上ノ定限ヨリ多クノ利ヲ收ムル也是レ豈ニ驚リベキノ高利ニアラハヤ而シテ其ノ然ル所以ノ理ヲ尋ナルニ尋常ノ質屋ハ概テ資本ニ十分ナラサルヲ以テ其ノ積リタル質屋ヲ再ニ下質ニ預ケテ資本ヲ流通ス下質ハ即ケ質屋ノ為メ質屋ニテ恰ニ英國銀行ハ英國一般ノ銀行ノ為メ銀行タルニ等シ此ノ下質カ質屋ニ於ケルヤ其ノ質物ハ公債証券金銀塊ノ如キ不朽物ニ非リルカ故ニ此回ニ付キ月廿五錢(即年三)十五回ニ付キ廿五錢(即年四)非ガレバ貸金ヲ内サ、ルニヨリ質屋ハ自カラ置立ニ向ヒテ高利ヲ收ムル猶英國銀行ノ利息年三分ノ時ニハ倫敦ノ諸銀行ノ年四分ヲ收ムルニ同シカラウルヲ得ス

専門特許ノ弊 日口行吉著 日本經濟論

太宰氏ノ經濟學政篇ニ曰リ日本ニ於テハ諸道ノ學者板藝マテ多クハ専門ニシテ其家ヲ世カニシ國家ニ任テ其俸祿ヲ世カニス故ニ藝術漸ク拙クナリテ堪能ナルモノ出来ル事稀ナリ又夕事ニ因テ其業ニ賤クナリ士人ハ肯テ學ハヌモアリ是レ専門ノ失ナリ専門トハ一家ヲ立テ其業ヲ傳フル事ナリト蓋シ古時上ニ執政ノ大臣ヨリ下ハ乞丐ニ至ルマテ皆ナ此風習ヲ帶ヒタリ然リ而シテ商家ノ専門特許ノ如キハ更ニ甚シキモノアリ余ヲ聞リ往時享保ノ比凡百六十前江戸ノ市中十組同屋ナルモノアリ社ヲ結ビ約ニ定メ漸ク專賣ノ形ヲ成

セリ而シテ其ノ利益ヲ專有スルノ障トシテ永代大橋西国、三橋ヲ修葺スルヲ擔負ス故ニ
又タ三橋同屋ノ目アリ冥加金一萬二百圓ヲ年々收ム其後文化、比ニ此等ノ同屋ハ政府ニ請
フテ株式ヲ受ケ當時菱垣廻船積荷同屋ナル者アリ又タ此仲間ニ加ハシ是ヨリ人買ヲ定メ
更ニ加ハテ許サス純然タル專賣社トナリテ日本ノ商業悉ク其管割スル所トナレリ其後
天保ノ末改革アレバ又本ニ復セリ故ニ今日ノ人ノ同屋ト云ハハ皆テ專賣會社解スルマ
テニ至至シリ

本邦小判輸出福沢氏通
貨論後章

開港ノ初ニ日本國ノ大損ニハ小判輸出、一條ナリ當時日本ニテハ保字小判以上ノ古金ヲ
通用スルト甚タ稀ニシテ多クハ一步銀ニ朱金等ヲ以テ之ヲ賣買シソルモノナレハ小判ハ通
貨ニ非ハ品物ト云ヘシ而シテ此品物ナルモ、開港前ハ決シテ下直ニ非ス保字小判一枚ヲ
買フニ一步銀四箇ヨリモ少シク高ケレハ之ヲ高直ナリト云ヒシトナレバ其高直ハ唯紙幣
ニ等シキニ朱一步ニ對シテ高直ナレバ正銀ニ對スレハ甚ク下直ナリシエハ外國ノ洋銀ヲ
輸入シタルカガニ大ニ損モヲ蒙リタルトアリ

條約面ニ日本ノ貨幣ト外國ノ貨幣トハ同種同量ヲ以テ引替ヘシト記シタリ故ニ外國

商人ハ四シルリシグニベシス、價ナルトルラ一步銀三個ニ替ヘ之ヲ以テ金、小
判ヲ買タルニ片百ヲ以テ三百ノ利ヲ得タリ

本邦綿製造十一年十一月
中外物價新報

内國各地ヨリ東京ニ輸入スル綿、ヲテ其ノ數額、多キ往昔ハ和州及ヒ摂河原、産出即チ
大坂ヨリ來ルモノ第一ナリシカ中古ニ及ヒ尾州ニテ盛ニ産出シ大坂ヲ壓倒シテ第一トナ
リ近古ヨリ又三州ノ綿作大ニ振起シ且ツ秋場ナレハ綿ノ吟味能ク行キ届キタルヲモテ頗
声價ヲ博シ遂ニ又尾州ヲ壓倒シテ三州ヲ第一トナスニ至レリ近來内國一般ニ唐綿唐糸
金巾ノタノニ國産綿ノ需用減セシハ世人ノ知ル所ナレハ試ニ内國各地ヨリ東京ニ輸入綿
ノ數ヲ擧シニ安政ノ頃最モ多キ歲ハ一萬駄(三十六萬貫目)ニ下ラス然ルニ昨年ノ入荷高ハ
僅カニ四千駄(十四萬四千貫目)ニ上ラス殆ント三分ノ二ヲ減セリト云ヘリ是ハ現今ノ同屋
ハ軒ニテ取扱フモノニ、此地地廻リト唱ニ常野武州等ノ産ハ同屋ノ管外ニテ勝手賣買ナ
レハ其裁許アルヲ知サレバ一項ハ餘程、産出アリシナルベシサレト近年産出ノ減少セシ

ハ又下リ綿、比ニ非ヘシ

日本寺院、教肥前正司寺棋篇
延海同卷秘録九

水府候、著迹武家一般鈔ヲ拜見スルニ日本寺院四十六萬九千六百四十七ヶ寺

禪宗一萬百八ヶ寺黄檗九千百ヶ寺真言一萬千百ヶ寺法相五百三ヶ寺天台千八百二十

ヶ寺淨土十四萬二十ヶ寺遊行六萬七千六ヶ寺大念佛千五百ヶ寺西本願寺四萬五千一ヶ

寺東八萬八千三百五十ヶ寺高田七千五百二十ヶ寺日蓮八萬三千二十ヶ寺是外律宗華嚴

モアラシ

利息 全上

利息ハ國ノ盛衰ニ應シテ高下アルエヘ妄リニ突ノカタシ國盛ナレハ法ヲ出サストリヘハ
自下低トナル衰ル時下低ノ令ヲ下セハ却テ民間融通セス民ノ憂トナル亦親疎直不直ノ者
ニ由テ銀主ノ酬酢モアリ大抵月ニ歩ハ天下ノ通用ナリ上方日歩ナリ是ハ正キ法ナレハ
遠陲ハ農工ノ徒美術ニ拙リ且不便利ヨク行ハレス大都會ハ素封多ク財貨潤沢ユヘ五六朱
ヨリ八九朱ニ迫ニ至ル若シ候國ニ於テ衆ニ擬テ下低ニ貸ス者ハ其賞有ルヘシ備前芳烈公
是事アリ自餘ニ視做上萬民ノ為トナルナリ

都會ノ地ニ車錢ト名ケ一貫文ニ一日百文ノ利息ヲ取ル舌ヲ捲クヘキ高利ナレハ内情ヲ測
リニ亦窮民ノ時ノ救助トモナルユヘ強テ谷ムヘカラス貸賣一錢ノ資本ナキ時彼一貫ヲ
借テ品物ヲ買入レ此ヲ販ヒ一日ニ三百文ノ利ヲ得テ銀主ニ百文ノ利ヲ返シ残錢二百文ヲ
以テ其日ヲ過ス

郷村ニ斗付ノ米ト云事ナリ是モ國豊ナレハ自然ト下低ス別卷ニ述ビ通リ米一苞ヲ四五斗
ニ貸テモ其年極月ニ一斗ノ利ヲ付ク若シ不納スレハ元利四斗トナリテ翌年ハ五斗三升三合
三勺トナリ八年ニ十苞ト成是高ニ又利ヲ付ハ百苞トナル是モ八年積レハ千苞トナル都
合ニ十四年ニ元米一苞ハ千苞トナル今是ヲ禁シテ利ニ利ヲ割ヘス何年不納スルトイヘハ
元米ニ利ヲ加ル事令ヲ下スヘシ

羽州庄内ニ本洞孫四郎ト云者ノ貸方ハ市町ニ於テハ莫ニ良キ法ナリ假ヘハ錢六貫文ノ借
用ニハ一年一割ノ利ニレテ六貫六百文ヲ一日ニ割レハ十九文トナル是ヲ毎日取互ルユヘ
借者モ逼ラステ皆納ス是ヲ日錢ト名リ城下ハ勿論國中過半借ラサル者ナシ

長州萩府ニ熊屋ト云屬家アリ大夫及ヒ士庶人皆借用上ヨリ金庫ノ番銀火ノ更モ付ケ置
カルハ大量ノ法ナリ責キ諸候トシテ自ラ諸產物或ハ子錢家ト為テ蓄積センヨリ右ノ者

ヲ守銭ノ役ト思ヒ貨殖ノ職務ト致シ置カハ多クノ官吏モ用ヒス何時モ其蓄積ノ金庫ニ異
ラズ

米澤公ノ干涉 公上卷ノ九

或邦ニ放樂戲場ト名ケテ上ヨリ入費ヲ出シ或ハ富家ヨリ助金シ衆人奉テ群觀ス羽州米沢
鷹山候ノ代ニ本戸銭百文ヲ上ヨリ補給シテ四十文ト定ラレ是事仁慈ニ似タレ其ハ正キ
道ニ非ス云々

幕府ノ干涉 公上

或都府ニ千戸計ノ民屋アリ新制ヲ建テ諸商賣一式ト宛ノ穀物屋ハ五穀一通リ呉服屋ハ吳
服ノミト各種ノ職ト令ラ下セ月ヲ逾ス瘵シタリ皆萬屋ナリ是法制ハ海内ニ於テハ大坂
ナラテ西ノ難シ大坂ハ一切ノ品物日本中ニ賣ルル百ノ地ニ一ニ式ノ町有テ書籍ハ心齋
橋筋華種ハ道修町金物ハ華種町陶器ハ横堀同職儼居シテ互ニ相勵ミ敢テ暇障ヲ偷マス精
カス故ニ鮮国ヨリ品物ヲ買メ自國ノ物價ニ方フレハ上ニシテ下直ナリ近年島製産ノ
品ヲ賣ルレ下品ニ行レス諸國ノ市町ニ於テハ萬ノ品一軒ニ賣ラカレハ衆人ノ難儀ナ
リ故ニ其家ハ一式ツノ危札何枚モ投ケ置ヘシ先年華船日本本後ヲ作リテ持渡リシニ

彼地ノ當ハ莫緒無シ水夜ハ莫緒在テ一方ハ大梅一ツエヘ之ニエ夫ヲ附テ一方ニ偏ヒテ莫
緒ヲ五ツ崎陽ノ者一人モ買メス無用ト爲テ捨シ事ナリ是製方當然ノ理トイヘ凡日本
人情ニ合カルエヘ毛用ト成テ瘵レタリ

風流好事ノ弊 大田錦城著 文政之人
格憲漫筆

百年前マテハ學者實實ニテ皆有用ノ學ヲ爲レタリ近時物茂卿ノ徒ヨリ學問皆空詩浮文ニ
流レテ經義道學ヲト講スル人少シ此二十年以來ハ學問益浮薄ニシテ書畫文墨ニノミ主リ
風流ヲ以テ學問トナスニ近年ハ奢侈ノ餘習ニテ學問學問ノ書ヲ讀ミ義理ヲ講スルヲハ得
知ラス唯書畫器ヲ好ミ筆硯文房ノ具ヲ集テ學者ノ態ヲ裝飾シ無學文盲ニテ藝苑ニ懸
入シ學者文人ノ名ヲ冒サント欲ス學者モ其徒ニ化セラレテ書ノ一葉ヲ讀ムニモ不及讀ミ
タリ也文字ヲ校スルニ過キス何等ノ義理何等ノ妙所アルヲモ不知シテ是ハ床板ナリ是ハ
古寫本ナリト云事ニナリテ典籍モ書畫器物ト一様ノ玩物トナリ學問モ風流好事茶人古董
ノ部類トナレリ故カ故ニ此二三十年來ハ學者學問ヲ業トハセスノ書肆古董ヲ業トスル

寛永ノ頃道中賃錢 梅翁隨筆

寛永元年八月廿七日道中賃番ノ内江戸ヨリ品川マテ上下ノ荷物一駄ニ付銀三十四文板橋マテ三十九文帰リ馬ノ駄賃ハ同前ノ事但シ人足ハ馬ノ半分ナルヘキト右ノ通り定メアリシ且右同日出シタル御書付錢 壹兩ニ付四貫文御定ノ上ハ勿論壹分ニ壹貫文タルヘキト有シ也其頃ハ人馬賃錢右ノ如クケルノ事ナレドモ是ニテ雇ハレシモノモ不五ナリ世ヲ渡シナリ

本朝農商人數高 同上

宝曆六丙子年人別改帳人數高帳ヲ去ル御役所ニテ仕立タリ下帳ヲハカラス見ル事ヲ得テリ其前人數都合貳千五百九拾壹萬七千八百人内男三百八十二萬八千六百五十四人女貳千貳百九万百七十六人也日本國中ノ惣高貳千五百七拾萬六千八百九拾五石餘但松前對馬ハ

此外也禁裏御料貳萬石奉院新院五十石ツ、但シ御入用多キ時ハ公儀ヨリ都合力アリシ也女中殿切米九百石金貳千兩根家親王公家庶民跡比丘尼御所都合百七拾三人知行高九八万貳千貳百貳拾九石九斗也諸大名ハ貳百六拾貳人知行高千七百六拾貳萬千六百六拾五石

多葉粉起原 菩提集 三年保十二年 和足軒友山ハナニ氣著

我等若年ノ時或ル老人ノ物語仕ハハ多葉粉ト申物ハ古来ハ是ニテ慶天三年中始テ切支丹宗門ト申事ノ世ニ廣リ申節ヨリ多葉粉モ始リト也然ハ元來南蠻國ノ土産ノ草根ニテ之有之ヲ武以前ノ儀ハキセルナトモハリ細工人ニマレニ故カ直段等モ六ヶ敷末カノ者ハ水ノ申儀ニ成リ兼ツ付竹ノ筒ノ期先ニ節ヲ以置ハ穴ヲ明ケテ火皿ニ用ヒテ多葉粉ヲツキ吸申ト有之候也其元ハ西國筋ヨリハヤリ出中国五畿内ニテモ我人ハヤリハハハ東國筋ニ於テハ多葉粉ヲ給申儀ハ誰モ不存コトク有之ヲ所ニツツノ程ヨリ段カトハヤリ出キセルヲ仕ル細工人ナトモテ成ツテ以テ竹ノ筒ヲセリ杯ト申物モ少成行後々ニハ葉リ由件ノ老人物語ニ仕ケル事ニ然ハ多葉粉ハヤリ初ト申ハサノミ久敷事ノ様ニハ不被存ト也

多葉粉御禁制、儀ハ台徳院様御代ノ儀ニ有之、向々葉粉ヲ作リ申州敷ト諸国一被仰出、
ヲ以向後御城内ニ於テハ諸人ヲ葉粉ヲ給フ儀トテハ御法度ニ仰出、由高札ノ儀ニ有
之、武御城ニテ御養魚ノ湯吞所一各寄集リテ葉粉ヲシ、居ッ所一土井大炊頭殿御
老中ノ節風ト御趣ノ儀有之何レモ仰天ニ致手ニテニ多葉粉道具ヲ取隠サレ、ヲ大炊頭
殿宣フニハ御番底ニリコ、襖ヲケテ申様ニト申着座アラシ只今ハ何レモは吞
ウ我ホモモ振廻ノ様ニト申ウハ何レモ迷惑ニ致免角、挨拶モナリ赤面ノ躰ニは座
ニハ再三所望ニ甘是非ナリ袖ノ内懐ノ中ヨリ多葉粉入キセルナトヲ取出シ、差出
ラ大炊殿は取ツテニ三服ニ御吞ツテ不存寄珍敷物ヲ給迄分ニトテ座ヲは立ッカ又立帰
リ給ヒテ今日ノ儀手前ニ各モ同前ノ事ニ重テヨリハ必スは無用ニト上ニ於テ殊外は嫌
々格事ニト申アラレ、申テ其段内ニ申送リト成リ其以後ハ湯吞所ノ多葉粉ハセ
レト相止ト也

江戸町方以前諸壹買物品 全上

十七年計以前ハ御當地ノ町中ニ豆袋屋番具屋油元結屋ト申儀ハ一ツ軒モ見當リ不申
事ニ、子細ハ大火事以前ノ儀ハ大各方ヲ始末々ノ男女共、皆ハ皮豆袋ヨリ外ニ用ヒ不
申有之、處ニ酒ノ年大火事以後諸人共ニ皮羽織頭巾ノ支度專一ト仕ルニ片席ノ皮ノ入用
多ク成ツヲ以皮豆袋ノ直段高直ニ罷成、片末々ノ者ハ男女共ニ水綿足袋ヲ用ヒ申加リ、
成右皮足袋入用ノ節ハ一切皮屋ニテ調ッ付前ニカンバンヲ出シ申ニハ及不申、此ハ水
綿足袋ヲ用ヒ申ニ付以来足袋店ト申儀初リ、也扱又伽羅ノ油ノ儀七八十年前迄ハ前髪
立ノ見小性杯ノ儀ハ格別其外上下共ニ年若キ男ノ髪ニ油杯ヌリ付ト有ハナマコル儀
ニ致ト也其時代ニハモミ上ノ額髪ト申儀ハヤリ尤侍ノ中ニモ有之候ハ先ハ步行若黨
ノ小者中間ノ類ニ餘多有之、其輩ハ蠟燭ノ流レテ油ニテトキニルノ松ヤニ杯ヲカエテ伽
羅ノ油ト名付用ヒ申コト有之タル事ニ、故ノ儀ニ、其外油屋ト申テハ藥種屋杯へ申遣
調ット有之タル事ニ、其外ニ油屋ト申テハ見カケ不申、且又當時モテヤレリ文七元結ト
申儀ニ以前ハ無之儀ニテ上下共ニ午前ニテヨリヒキモ致用ヒタル儀ニテ有之ト也扱
又若キ若キ頂迄ハ御當地ノ町方ニ於テ丈ト申モノハ希ニモ見當リ不申有之、ハ武家ノ町
方ノ下々ノ給物ニハ大ニ勝リタル物ハ無之コト有之ニ付冬向ニ成テハ見合次第ノ打殺
シ愛敬仕ルニ付テハ儀ニ有之ト也

洋銀

東京日々新聞抜萃

世上一般ノ所謂洋銀トハ何ゾヤ北米墨是哥國ニ於テ鑄造スルノキシカントルヲ云
フ也此洋銀ヲ何故ニ日本貿易場ノ通貨タルニ至リシヤ向ヘハ安政五年ノ米國條約ニ外
國ノ諸貨幣ハ日本貨幣同種ノ同量ヲ以テ通用スヘシ(金ハ金ト銀ハ銀ト量目ヲ以テ比較ス
ルヲ云々)方ノ國人互ニ物價ヲ償フニ日本ト外國トノ貨幣ヲ用フル妨ナシ日本人外國ノ貨
幣ニ慣レサレハ開港ノ後凡一ケ年間各港ノ役所ヨリ日本ノ貨幣ヲ以テ亞米利加人願次第
引換渡スベシ云々ト約シ其餘各國モ亦皆コレニ倣ヒリ而シテ此約ノ不利不富ナル今日ニ
於テハ固ヨリ論ヲ俟ヌメ明白ナレ氏當時通交貨市ノ事ニ関シテハ日本ノ上下ヲ挙テ毫末
ノ智識経験ナキ時節ニテアリケレバ此約ヲ甘受シテ彼カ術中ニ陥リタルハ信ニ不得已ニ
出タルノ不幸ナリキ儲テ安政六年六月開港ノ際ニ迫リ幕吏ノ識者ハ同種同量ノ約ヲ履
支那諸港ニ流通シテ貿易ノ媒貸ヲ成スルノ洋銀ヲ三分ニ通用セシムルノ不利ナルヲ悟リ
乃チ水野筑後守等ノ創意ニ基キ新ニ南鑄銀ヲ再鑄シ其二箇ヲ以テ洋銀一箇ト同量同質ナ
ラシメ之ヲ引換ニ充テ外國人ニ對シテハ從來ノ一分銀ハ紙幣ニ比シク政府ノ極印ヲ以テ
通用スルノ法貸ナリ日本真量ノ本位銀貨ハ此ノ新南鑄銀ナレハ洋銀ノ引換及ニ通價ハ此
南鑄銀ニ比較スヘシト主張レタリト云々氏措カナ當時ノ一分銀ハ實ニ本位銀貨ニシテ其

流通ハ世上ニ普ク新銀ハ未ダ世上ノ耳目ニ慣レサルノミナラス其鑄造ノ高モ極テ少ナ
リ且ツ南鑄ニ箇代價拾五匁ノ量目ハ却テ一分銀三箇代價四拾五匁ヲ重キ尤モ不都合ノ
馬脚ヲ露レタルニ付キ忽チニ外國公使領事等ノ論辨ニ説破セラレ威カニ壓抑セラレ南
鑄ハ開港後數日ヲラスメ通用ヨリ擴弁セラレテ廢物トナリ日本政府ハ遂ニ一年ノ間ハ外
人ノ請求ニ從ヒ其一分銀三個ヲ以テ洋銀一箇ニ引換ヘ与フルノ不幸ヲ受ケタリ然レ氏當
時市中ノ洋銀相場ハ決シテ四拾五匁ニ至ラサルカ故ニ政府ハ外人ニ迫ラレテ或ハ嚴重ノ
布告ヲ發シ或ハ其極印ヲ洋銀ニ折テ種々ノ方途ヲ施シタレニ之ヲシテ銀三分ト同價ノ通
用ヲナサシムルヲ得ルニ付キ中外商人相互ノ取引ハ之ヲ時價ニ任セ官府ノ收税ニハ
洋銀百枚ヲ一分銀三百十一箇乃チ七十七匁三分ノ割合ヲ請取リ又慶應二年ノ改稅約定ニ
於テ外國貨幣ノ交換ヲ便ニセンカ爲ニ造幣局ヲ盛大ニスヘキ旨ヲ約定シタリ斯ノ如ク洋
銀ノ市價ハ當時一分銀ニ對シテ概テ四十五匁内外ノ相場ナリケルカ明治二年ニ至リ更ニ
二分金ニ對シテ其相場ヲ五テ明治四年ヨリ今日ノ紙幣ヲ以テ其高低ヲ比較スル事トハ相
成リタリキ

金銀相場ハ大藩ハ遠近一般ニハ決シカタクシ蓋シ大抵ハ上ヨリ宛ノ置カサレハ西貴族ヲ憾
ス本ナリ或人余ニ問テ云或大藩頃日金銀直段ヲ領中存一ニ定メラル是令行ハルヤ巷云
海岸ノ長キ領内ナラハ随分行レン若シ海遠クシテ廣キ國ナラハ行レス其故ハ金ハ銀ヲ以
テ直ラ五ツ銀ハ錢ヲ以テ直ラ五ツ然ルニ他邦ヨリ正錢ヲ取寄スルニ馬一駄ニ金五兩ヲ買
テ直ラ五ツ銀ハ錢ヲ以テ直ラ五ツ然ルニ他邦ヨリ正錢ヲ取寄スルニ馬一駄ニ金五兩ヲ買
文錢ハ百八十文ニテ一斤アリ雜錢ハ二百文ニテ一斤
故ニ駄賃四百文ハ金五兩ニ掛リ一兩ニ八十文ハ高直トナルノ理アリ海岸ハ船賃僅ナル故
各別金子ニ掛ラヌ

民間ノ貸借ヲ廢棄スルノ成果 今上卷之十上

文化年中或領分ニ富國ノ基業ヲ洲カント伶俐ノ者ヲ召ス是者利口捷敏日ニ月ニ興利ヲ
説クユエ諸吏ニ誦惑セラレ君寵ヲ蒙リテ竟ニ内官ノ列ニ加ハリ萬事ノ任組ヲ計ル或時怒
議シテ今已ニ匿之ニ及ヘリ故ニ富之教之ト云聖語ニ循ヘ先民間ノ貸借ヲ廢棄シテ其後教
令ヲ施カハ上ノ仁恩ヲ感戴シテ必ス信用スヘシ然レハ一時ニ令ヲ下サハ恐ラクハ穩ナラ
ス先ツ五年延債ノ令ヲ下シ田島ハ永代生租ノミ拘ラス年限ノ田島或ハ質入ハカヘシ五

年ノ期至ラハ又五年十年ト延取テ漸ク人氣ヲ弛メテ念ヲ絶シメント奏スレハ同僚モ小ヲ
殺シ大ヲ助ル良術ト俱ニ同意ス云未タ令ヲ發セサルニ遽然ト洩レテ其猶母舊ノ族驅廻リ
テ親好ノ富家或ハ僧巫ニモ往キ急難起テ死セントス何兩貸クレナハ救所ノ大恩終身敢テ
忘レス期約ハ時ヲ延カスト潜クト賺シ欺キ借ル者甚ク多ク數日ヲ過サス都府中閱キ質屋
ニハ我先ニト衣類刀劍雜具ヲ質往ケハ主人モ甚ク不審ニ思ヒ暫ク辭ス或ハ古衣穀物酒肴
屋一切ノ店方ニモ借取リスル事ニハ蓋非親縁ノ差別ナク無理ニ推借致事少カラス既ニ令
命下レハ質屋ニ往テ往取者引キテ專主モ快ケテ夢ノ如ク執掌シテ終ニハ劣齋或ハ狂
猶ノ者モテリ云諸所群黨起テ領内鼎沸カ如ク親類朋友モ喧嘩口論日ニ絶エス間ニハ銀
主モ恙ニ堪ス債ヲ責レハ法度ニ背クト入牢スル者モ有リ訴訟罪罰告狀限リナク藉口門
ニ充ツレハ延尉モ絶食ノ間モナリシテ惘然タリ左レハ是ヲ是ト獄ルハ難カラストイヘ氏
是ヲ非トセリレハ法令ニ逆テ政裁判ニ甚ク困リ後ニハ取揚ケス風俗一時ニ僣僣スル事聞
國未聞ノ一大変ト云此固ヨリ上ヨリ起セシ事ニハ賢臣良士之ヲ如何反スル事ナシ云五六
十年前加州ニ是ニ類スル新制有リト聞クニ今ニ於テ商賈は今散スル事毎年絶エトト
聞ク

水戸米穀程、制藤田魁著

我々藩ニハ入穀ノ禁アリ其法尤嚴ナリ是ハ穀ノ價ニ賤シケレハ士民ノ雜儀トナル故平年ニハ一粒タリニ他國ノ穀ヲ境外ニ入ル、事ヲ禁シ境内ヨリ出ス事ハ禁セハ扱テ領内穀價ノ貴キヲ憂フル中ハ他國ニ出ス事ヲ禁シ又凶年ニ至リテハ平年ニ引カヘ入穀ヲ許シ出穀ヲ禁ス其開例ニヨリテ自古ノ謂ニル常平ノ法ニ叶ヘリ是カシコリモ始祖威公ノ定メ給フ処ニシテ不易ノ良法トスヘシ

水戸ノ財政公上

夫レ富ミ且ツ貴キ者アリハ貧ク且賤キ者アリサレハ財ヲ借リ貸スル業モ自ラアルヘキ理ニテ和漢古今ノ同キ所ナリ然レ氏富ノル者ハ少ク貧キ者ハ多ク國中ニテ代々俸祿ヲ知行セル人々モ十人ニ九人ハ貧キヲ憐フ其故由ヲ尋ヨルニ知行若干ヲ領シヌレハ祖父ノ世ニシカレバ、事アリテ公ヨリ若干ノ金ヲ借リ侍リ父ノ代ニモ亦若干ノ穀ヲ借リ侍リ近頃何某ヨリ若干ノ財ヲ貸ソタルヲ年々納メ返シヌレハ今マノ當リ領スル知行ハ僅カニ若干ニナリスト歎キケル類ニ十人中ニ六七人モアリヌヘシ君康子ノ年再ニ水戸ニ下リ給ヒ偏ヒニ諸士ノ武備ヲ勵シタマフニ諸士ノ貧キエヘンヲ知ロシ召シ先ツ年ヨリ其年ニ至ル迄

迄オ、ヤケヨリ貸ソアリシ金銀米穀多ク少キヲ云ハス古キ新キヲ論セス悉ク棄テ給ヒテ賜リタル由ヲ仰セラレ扱其年諸士ノ知行スル祿ノ半ヲハ年々貯財貸リテアリシ人ニ返サレメ猶借タル財ノ残レルハ明年ヨリ聊カリ、年々返シヌヘキ事ニ定メ給ヒ郡官市尹ノ府ニテモコレニナリテヘテ國中ニ申下セシカハ貧キ者ハ新ニ金穀賜リタル心地ノ大ニ悦ビ富ノル者ハツレナキ業サニモ思イケレ氏公ノ金穀ハ残リナクステ給ヒルヲ聞テ已レノミ利ヲ失ヘルニ非スト思テ止ミヌ合書ハ略ス扱テ此時公ケノ財モ残リナク捨テ玉フナラハ下カニテ互ニ借リ貸シスル財ヲモスワヘキ旨仰セテアマホシキト申上ル人マリシニ人ノ臣カク者君ノ賜モノヲ受クルハサレ事ナレ氏朋友又ハ商人杯ニ借リヌル財ヲモ費イテ悦フ士ハ我カ家中ニハ得アルマシ速カニコソ返シ得ス氏未長ク償ヒテ信義ヲ失フ可カラスト宣ヘテ斯リハ仰ヒ出サレヌ欺クテ本ヨリ國用ニシキカ上莫大ノ金穀ヲ棄テ給ヒケレハ其職トモ心ヲ苦メケルニ君兼テ紀伊ノ南龍公國用ノ當リ作リ給ヒ基盤ノ目ヲモリタル如クナルヲ五色其外サマシ、色ニテ分ケ此ノ用度彼ノ用度ト定額ヲ記シ譬ヘハ甲ノ用度多キ年ハ乙ノ用度ヲ減シヌル如クニシテ領中ヨリ納メタル金穀ノ中ニテ事足リヌ様ニ定メ給フ事ヲ深ク感シ給ヒ諸士ノ職ニ仰セテ年々領中ヨリ納ムル處ノ米穀金銀ノ數

山海ノ貢ナト詳ニ記サレノ扱テ天朝幕府ニ捧ケ給フ者ヲ初メ諸士ニ賜フ処ノ祿或ハ宮室
衣服厨客軍旅ニ至ルマテ是レヲ數ヘシムルニ納リタル金穀ハ少クシテ出スル用度ハ多シ
其故由シテ尋子給フニ水戸ノ封内尾張家紀伊家ニ比シハ其半ニモ足ラスサレト三家並ニ
給ヒテ何事モ同シサマニ成シル事是レ国用ノ足ラサル根源ナリ然レモミナラス土地惡ク
ノ米穀少ク古ニ比シハ民力衰田野モ荒レテ貢納愈少シ宮室衣服飲食且ハ昔ヨリモ費
素ニマシマセト世ノ中何レノ物ノ價古ヨリ一倍二倍ニ増シヨレハ其費多シ諸士ノ祿モ
罪有テ削ラル、者ハ少ク勤勞アリテ新クニ賜リタル者ハ多シ其他財用ノ足ラサル故ヲ
具サニ申上ケレハ君御給ヒテ用金ノ日々ニ多キ事如何ニモ其理リナキニ非スサレハ充ニ
角ニ入ル事ヲ計テ出ス事ヲ成スニアリト宣ヒ諸有司ノ左ハカリ勤勞ハナケレト年々ニ滿
ヌレハ祿ヲ増シ賜リ其子孫ニモ傳ヘシテ改メ給ヒテ祿ハ何カ許リモ賜ヒヨレト子孫ニ傳
フル事ハ容易カラヌ業ニ定メサレハトテ世祿ヲ止メ給フニ非ス持傳ヘ諸士ニ賜ハル處
ノ俸祿何十何萬石ト限リ其中ニテ餘レル祿アレハ必ス諸士ノ中ニテ功勞アル者ニ賜ハリ
一石ヨリ五石ノ用度ニ限シ給ハス其限レル祿ニケル内ハ有司ノ年ヲ経タル者アリテ
ニ世々ノ祿ニスル事ヲ得ヌ扱テ醫師馬乘鷹師其他鐵炮師弓師ナト諸士ノカ技ヲモテ仕フ
ル者ハ其初皆人ニスクレシ故ニ若干ノ祿賜リタルカ其子孫ニ至リテハ其家業ヲモ傳知ラ
スノ徒ニ父祖ノ祿ヲ傳ウルモノ少ナカラス斯ノ如キタクヒハ悉ク沙汰シ玉イテ今マノ旨
リスクレタルモノニ賜ハリヌ

寛永ヨリ享保迄ノ風俗 太宰純春書其語

我父ハ寛永ノ中頃ニ生レテハ十八歳ニシテ享保ノ中頃ニ終レリ云慶長元和ノ頃シタル男
ニモ女ニモ我親ニキ者アリテ寛永ノ頃ヲ年ノ盛ニテ経タリト云フニ男ハ冬革ノカケケ
革ノ袴ヲ美服トシ女ハ紫ノ革ノ襪子ヲヨキゲハイトセリト云フノ襪子ハ我幼少時迄ニ残
リテ有シテリ婦女ノ帯ハ金襴ヲ美服ノ限トシ黒地ニ梅櫻松ヲトコロニ織ツケテ是ヲ鉢
ノホリ帯ト名付ケテ珍重シケリ廣ク僅ニ難尺、二十計ヲ心トシテ綿ナト入ル、ゴトナシ
四月ヨリ八月マテ婦女ノ礼服等錦ニテ廣キ難尺ノ八分計ナルヲウレロニ結テタル、ヲツ
ケ帯ト云今ノツケ帯ハ昔ノ帯ヨリモ廣シ今ノ人ニ昔ノ事ヲ語レハ空事ト思ヒテ露
信トセヌ此等ハ我々日ノ首見タリシ事ナレバ詐ニ非ヌ田キ事知タル人アラハ尋問アベ
レ凡テ男女ノ衣服帯ハ極テ儉素ナリキ男子モ女子モ十四五歳迄ハ長キ袖ヲ着ルノ昔ハ
難尺一尺七八寸ヲ極トセシニ莫享ノ頃ヨリ二尺斗ニナル夫ヨリ漸ク益々長リ成テ迄ノ頃

ハ二尺四五寸ニナリヌト見エ婦女ノ帯ニ貞享元禄ノ比ヨリ漸ク廣クテ今ハ難尺ニテハ
九寸ニ及ヘリ綿ヲ以テ襦ノ如ク男ノ肩衣ト云昔ハ麻ノ幅難尺ノ八十斗成シニ貞享
元禄ノ頃ヨリ幅一尺ニ及ヘリ寛永ノ比マテハ婦女細キ麻繩ニテ髪ヲ束テ其上ヲ黒キ結ニ
テ巻シニ其後麻繩ヲ止テ紙ニテ結越前国ヨリ粉紙ニテ元結紙ト云物ヲ造リ出シテ海内ノ
婦女皆是ヲ用エ夫レヨリ結ニテ巻コトモ止テト我父ニシテ見テ語リ聞セリ今ノ人皆
ニハ信トセス凡男女ノ髮形我等ノ見及ヒテヨリ再未モ裁カハリカシツラン今ノ昔ノ形モ
残ラス昔ノ婦人ハ髮多ク長サ大ニ餘ルナト云テホノタリシニ近頃ハ髮少ナク短カキヲ
良トスル風俗ニナリ髮多キ女ハ髻ノ内ヲ或ハ切或ハソリテツリス此風俗ハ京ノ婦女ヨリ
モ移リキツレリ此事ニ限ラス都テ男女ノ風俗言葉遺物ノ名マテ近頃ハ京ニ似タル事ヲ
京ハ公家ノ外工匠高沽ノミナレハ人ノ柔懦ニテ利ニカシコク江戸ハ武家ノ都ナレハアツ
マケドノ心粗暴ニシテ利ニウツシ然ルニ三十年コノカタ江戸ノ人京ノ風俗ヲマ子テ故ニ
武士ノ心モ昔ニカハレリ唯京ノ婦女ノ帯ヨリ蒙衣スルノミコソ未江戸ニウツラ子江戸ノ
婦女外ニ出ルニ昔ハキマハト黒キ結ニテ以テ面ヲ包ミ目ハカリヲアラハシケルカ其後綿
ニテ以テ面ヲ包ミシト我比餘リ宝永ノ頃マテシカ成キ今ハ少キ綿ヲ頭上ニ戴キタル而已

ニテ面ヲハウケサテハレヤカナル顔ニテ道ヲ行様ヲモハエケニ見エス男ハ面ヲアラ
ハスヘキ物成ニ此頃ハアミ笠ノ上マテカ、ルヲカアルハ珍シカラス曾ノ如クナル帽子ヲ
カフリテ面ヲカクスモ有常ノ頭中ニ覆面ノ如クナル物ヲ作ツケテ目計ヲ露シテ道ヲ行
ミアリ昔ノ女ノ如ク人目ヲ忍フモノ、ミ多ク成タルニヤ又此頃ノ男ハ小袖裏ヲ紅ニシ成
ハ紅ノハタキヌヲ袖口長ニシテ腕ヲマトフ斗ニヒラカスル者多ク見エ女ハカヘリテ縹
ノ裏白キ裏ナトヲ着ルノリ此等ハ男女所ヲ易フト云ヘシ

以前江戸風呂屋ノ模様 落穂集

我輩若年ノ頃ハ右ノ風呂屋当地処々ニ有之候ヲ以テ儘ニ寛申ノ風呂ノ茂ハ朝ヨリワキタテ
晩ハセツヲ打ッヘハ仕廻夫ヨリハ昼ノ内風呂入共、垢ヲカキ申ッ湯女共セツ切ニ仕廻夫
ヨリハ身支度ヲ致シ暮時分ニ至リ得ハ風呂ノ上リ場ニ用ヒタル格子ノ間ヲ座敷ニ構
ヘ金屏風ナドヲ引廻シ火ヲ燈シ件ノ湯女ニ衣服ヲ改メ三味線ヲナラシ小歌様ナル者ヲ
謡ヘ客果ヲ仕ル事有之ツト也右ノ風呂屋木挽町四ニモ一ニ軒モ有之ツト也右野ハ兵衛
組下ノ御徒庶ニ某件ノ風呂屋前ニ於テ喧嘩ヲ仕セシ手痕ナトヲモ員ニ申ッヲ以テ御詮議
トナリ場所カラ宜シカラヌエ付御仕置ニ仰付タル儀ナト有之其以後間モナリ御停止

仰止江戸町、風呂屋悉く浸し増上寺門前ニ只一軒御免の湯女ハ御制禁つた也

葎葉茶屋運上 桂翁隨筆

江戸中町口、道端ニ出セル葎葉張、茶店是迄ハ運上ニモ及サシカ此度一カ吟味シテ一日
五文の、運上納ムルヤウニ申渡サレケル凡江戸中ニテ貳万軒ニ餘リ九千ニモ近ト
リ此度ノ運上ヲモスニ付テ灯ヲトホス事ヲ許サレケリ此運上一人ニテ僅ノ事ナレ凡毎
年一萬兩程ノ御益ナリトゾ

江戸流行落書 全上

此頃江戸ノハヤリモノ 長大小ニアシロ篋 小額ノコレテ拍子添

麻看板ニ藁草履 大銅乱ニ白茶柄 糸ニ麻羽織

京苗ニ薄色豆袋 軍堂皆傳惣免許 諸藝ノ見分ムク騷

武藝ノ先生御役替 免許目録金次第 替リノ早ニ御役人

昨日ノ立身今日不首尾 刺下奴ノ御小納戸 御番御免ヲ小普請入

摺拜借ニ幸賦沙汰 振付大窓ノ御役人 役人四ノ時差扣

往古ノ役替金次第 当時ノ立身縁次第

明治五六年輸米数量 物價新報 十二年五月三日

五年

香港一 百二十四万八千八百八担三六

厦門一 十四万一千六百六十一担九四

福州一 一万三千八百十三担六二

マニラ一 七千五百十三担六〇

上海一 九十六担三四

悉徳尼一 一万二十三担三八

桑港一 二万七千六百六十一担四三

倫敦一 三万四千三百九十六担五三

シンハイ一 四千九百七十八担八九

汕頭一 二千六十二担五〇

ノ百五十六万六千七百八十三担一六

内譯

横渡ヨリ 六十六万三千九百五十七担七
 兵庫ヨリ 八十一万五千二百十八担三八
 大坂ヨリ 八万七千六百七担〇八

六年

香港一 二十一万二千九百一担三五
 厦門一 八十八万九千九百九担二六
 福州一 四千五百五十五担
 逸徳尼一 一萬七千八百三担一四
 ノルボルシ一 一万六千九百九十五担一二
 桑港一 六千十担四三
 倫敦一 七万二千六百十担三二
 ノ 百二十一万三千七百三十四担六二
 横渡ヨリ 十六万六千五百三十九担三五
 兵庫ヨリ 百四万七千九百九十五担二七

共計 二百七十八万五千九百七担七八

此石凡ソ百二十万八千九百廿石余

江戸風俗 藍川員正恭著 譯海

此頃江戸ノ風俗女子ハピンハシト云鯨ノ骨ニテ作リタル細キモノヲ髪ニ入レサス髪ニク
 ヤケルトナリテ伽羅ノ油ヲ付ルニ宜シトゾ小袖或ハ袴ナトノ裏ハ大カタ紫ノ結ヲ付ル
 ナリ赤キ結、切レ浅黄紫ナトエテ髪ヲ束テ結ハアマリ用ヘス甚敷ハカウテエピンヲ作
 置テ髪ヲエハスニツクリピンヲカシコミテ結タテノ髪、如シテ居ル也又京都ヨリ女ノ髪
 結トテ遊ニ老女ト来リコレニ婦人髪ヲ結フテモロフ云

江戸男女衣服 落穂果

我等若キ頃迄、女中帯ヲ見申サハ万ノ巻物、類ヲハニツ割ニ致シ縮羽ニ重ノ類ハニツ
 割ニ相定リタル如有之、就中高田様掛リト申ハ右ノニツ割ヲ又三分セバニツケテ其端
 ヲ結ヒラシメテ差置申如リ有之ニ此ニ四十年斗リ以前ヨリ巻物類ヲニツ割結類ハ一
 トハバツ其依ニテ用ヒケレノ結ヒ、所ヲモ移レリ大キニ不致ヒテハ不叶コトク其成
 ヲト存

江戸省板草 延宝五年

- 一 大名屋敷教凡五百二十拾ヶ所
- 一 小名屋敷教凡二千八百七拾ヶ所
- 一 寺院、教凡八百五十余ヶ所
- 一 神社、教凡百貳拾ヶ所
- 一 所教凡百町、余
- 一 橋教凡貳百七拾ヶ所

明治六年

輸出 二千百十四萬二千十五四七〇九
 輸入 二千九百十七万八千六百六十八四九三五
 合計 五千三十二万百八十四四六四四
 比較輸入増八百三萬六千百五十三四二二六
 明治七年

輸出 千八百七十八万七十八四七九九
 輸入 二千九百十七萬八千六百六十八四九三五
 合計 五千三十二萬百八十四四六四四
 比較輸入増八百三萬六千百五十三四二二六
 明治七年貨幣及地金輸出入

輸出 十三百九十九万五千二百二四〇二三
 輸入 百七萬千七百三十四五四一
 比較輸入ヨリ輸出、多キ一 千二百九十二万三千四百七十一四四八二

金貨高金利

明治七年六月大藏省南務局 調査ニルテ口ナリ

地券抵當
 五千四以下三千四迄 年一割五分六厘
 三千四以下二千四迄 口一割七分
 二千四以下千四迄 口一割八分

土藏家作抵当

九百回以下七百回迄

回二割一分

七百回以下三百回迄

回二割八分八厘

三百回以下百回迄

回三割八分

雜子抵当

回五割一分三厘

五十回以下三十回迄

回五割五分三厘

百回以上且百三回迄

回六割二分八厘

五十回以上二百回迄

回七割三分

五十回以下

回九割

十回以下三回迄

回百零八割

土地見様ノ事 北方落穂集卷之一

用水堰溝ノ如クシテ浅キハ水懸リノ自由ノ場ナリ是等ノ地ハ田々麦ヲ作リ而毛作
ノ地ト知ルヘシ用水堰溝深キハ遠方ヨリ水ヲ引ナリ水元遠シ用水堰多キハ高場ナ
リ用水多キハ水損ノ地ナリ四壁モナク又有レ班ニメ都テ大水ナキハ水入場ナリ

此辺ニハ水塚トテ村ノ百姓居所小高ク築上タル地アル者ナリ村上ニ大川ナリ抱ヘ
或ハ村下ニ一ニ里ノ洞ノ大ナル流有ハ水落アリ、大水ノ節逆水登リ水溢却テ
逆水ニテ水損多キモノナリ垣ノ根元黒キハ深場ナリ又稲株高ク苜ハ深場ナ
リ但固ノ田ノ様ニ見ヘテ株高ク苜タルハ去年ノ水損場ナリ

村柄見様ノ事

其村ハ入り四壁茂リ家居并田等ノリ兼キハ亘敷村ナリ村柄ヲ見ルハ高ト人馬
ノ数ヲ見合知ルヘシ高百石ニ付人数百人ニ当ル村ハ上村ナリ馬是ニ准ス又藏人高
人医師山伏道ニ等シ民多キ村ハ良キ村ナリ繁華ニテ右舩ノ者渡世ニ亘キ故
是ニ集ル村方人数多キ村ハ福祐故他村ヘ出ル奉公人ナシ地方ハ他村ヨリ入
込故人数多キナリ其外大舩ノ奉公人有故人数増スナリ

又村ハ八壁班ニ或ハ四壁ミナリ家居垣等ノ破レテ庭ノ構ニ草深ク見ヘルハ
因窮ノ村ナリ又何トナリハ見透スコトクニテ物淋ニキ舩ナルハ至テ因穴野ノ村ナリ又
家居見苦シリトテニ其村ノ山林萱野等ナリ秣場葭場等ノ有ル所ハ内澄能
ナモノナリ如斯ノ村ノ多クハ

民権の伸縮 東京日日新聞社説

東京市民の権利ハ昔日ノ江戸ニ盛ニシテ今日ノ東京ニ衰ヘタリ之ヲ恢復スルハ夫レ行政區畫ヲ郡区ニ止メ所村ヲシテ自治セシムルノ議ニ在ル乎(即チ地方官會議第一号議案ノ目的)何ヲ以テカ之ヲ昔日ニ盛ニシテ今日ニ衰ヘタリト云フカ曰ク幕政專政ノ昔日ニ在リテハ江戸八百八町ノ市民中ニテ曾テ一人ノ權利ヲ説キ自由ヲ講スル者ニ無クセテ民権ノ何事タルヲ知ラザリシト虽氏實際ヲ顧ミシハ東京市中ハ改権ニ干渉セラル、最ニ少キカ故ニ慣習故例ニ於テ知ラス識ラス自治、則ニ導キ市民ヲシテ自カラ其權利ヲ煥發スルノ氣象ヲ指揮スルヲ得セシメタリ極メテ手近キ例証ヲ以テ之ヲ徵センニ昔時子民ノ武士ヲ見ル哈モ奴隸ノ主人ニ對スルト一般ノ通勢タル武門特権ノ日ニ當リ独リ江戸市民ハ亦モ此武門武士ヲ恐ル、一無ク百萬石ノ誅責モ痛擧ラ肩ニスルノ賤夫モ路ニ過フテ相讓ラザルガ江戸ノ榮ナリ双カラ腰ニスルノ武士ヲ恐レテハ江戸ニ居住ス可カラサル也ト誇言スルヲ以テ常套語トナスニ至シテ是レ明クニ天子ノ平等権ヲ以テ人定ノ種族権ヲ排斥セシト試ミテ現ニ其幾分

ヲ保有セシ者ニ非スヤ又造次顛沛ノ禍ニ於ラモ一府ノ榮譽ヲ愛慕シ云ハ所カハ江戸ノ恥ナリト云フヲ以テ常ニ互ニ相獎勵シ誓言テ第二流ニ居ラザランコトヲ期セシハ江戸市人ノ熱望ナリキ是レ實ニ一町一都ヲ自家視シテ以テ其愛國念ヲ貴重セシ者ニ非スヤ此般ノ事實ハ十年前コト吾曹カ實地ニ御見セシ所ナレバ讀者ト虽モ亦必ラス各自ノ經歷ニ於テ其然ルヲ所知スベキ也

斯ノ如キ精神、常ニ江戸市人ノ言行上ニ顯ハレタル所以ノ者ハ他ナシ自治、能ク都市ニ復行セラレタルガ故ナリ何ヲカ自治、江戸ニ行ハレシト云フ乎曰ク行政區ハ町奉行所ニ限リ町年寄(今ノ区長)名主(今ノ戸長)ノ如キハ町白ニ人民ニ屬シ自治ノ十分ニ市中ニ行ハレタルカ故ナリ例ハ町觸(今ノ布達)ノ如キモ町奉行ハ之ヲ年寄ニ傳ヘ年寄ハ之ヲ名主ニ傳ヘ名主ハ之ヲ家主ニ傳フノ手續タリシト虽モ町奉行ノ行政區域ハ其之ヲ年寄ニ傳フル大ケニ止リ其以下ハ即チ市中ノ協議ニ出ルノ制ナリト云ハサル可カラズ夫ノ年寄三家(館、樽、喜多村)ハ世襲制ナレバ姑ク之ヲ置キ名主ト地主ノ間ノ關係ハ如何

ナリシ乎ヲ見ヨ名主ハ世襲ノ實アリシモ敢テ其職ヲ官ニ奉スル者ニハアラス
シテ之ヲ其町ノ地主等ニ命セラシタル者ナレバ之ヲ任先スルノ權ハ乃ケ居付地主
等ニ在リキ名主已ニ斯ノ如キニ付キ名主ノ町代(今ノ町用掛)等ヲ抱入ニモ皆
決テ居付地主ニ仰キツルヤ明ナリ居付地主トハ江戸ノ方言ニテ自己ノ地面
ニ居住スルノ地主ヲ指スノ謂ニシテ其町ニ居住セサルノ地主ハ都テ其權利ヲ
居付地主ニ委託シタルニ由リ居付地主ノ權威光榮ハ一町内ニ赫々トシテ常
ニ各主ハ我ハハ屋人ナリト公言シ各主モ亦自カラ之ヲ公認シ敢テ官權ヲ假リ
テ町内ニ臨レテ得ス又自身番ト唱ヘタル建物ハ一町内地主ノ公有物ナリ家
主ト唱ヒタル町吏ハ地主ニ命セラルルノ差配人ナリ而シテ共ニ官廳ノ公認ナル所
タリキ地主ノ權利ハ是ノ如ク夫レ重シ故ニ地主タルハ極テ之ヲ鄭重ニシ凡ソ地
面ノ賣買ハ必ラス名主立會ヲ以テ之ヲ自身番ニテ取行ニ新ニ地主タルハ赤
飯ヲ炊キテ之ヲ町内ニ披露シ(所謂地主弘之)初メテ地主ノ寄合ニ列シテ口ヲ
相談ニ答ルルノ權利ヲ得タリ如何トアレハ町八用ハ悉ク町小間ノ法ヲ以テ之ヲ
地面ニ課シタルニ付キ名主ハ必ラス之ヲ地主ニ謀ラサルベカラサレバナリ地主ノ承

諾ヲ經カレバ例規外ノ出納ヲ成ヌヲ能ハサレバナリ而シテ地主モ亦コノ相談ノ整
ヒタル以上ハ急ニ臨ミテハ無利足ニテ町八用ノ主替ヲ成シ差支ヘナカラシムル
ノ義務ヲ帯ヒ一町内ノ事ニ於テ更ニ苦情ヲ見サリシハ所費ハ悉ク地主ヨリ出
テ地主ハ自治ノ權利ヲ占有シタルガ故ニ非ズヤ

然ルニ維新ノ後ニ於テ江戸ヲ東京ト改稱シ市政ノ制度ヲ變更セラシヨリ
町年寄ヲ廢シテ区長ヲ置キ名主ヲ廢シテ戸長ヲ置キ町代ヲ廢シテ書記
ヲ置キ自身番名主役場ヲ廢シテ区務所ヲ置キタルヨリ夫ノ自治ハ一變シテ
政治トナリ区長ハ云フモ更ナリ戸長ノ如キ書記ノ如キハ皆傲然官吏ノ状態
ヲ極ヘ区務所ヲ以テ府廳ノ支店ト見做シ以テ地主ニ極ニ敢テ一言ヲ町
内ノ處理ニ答ルルヲ得サラシメタルバ地主ノ權利ハ此時ヲ以テ地上ニ落ケ
復タ昔日自治ノ活動ヲ存スルニ法ナク百事ニテ唯々諾々唯々戸長ノ命令ニ
是レ從ハルル可カラサルニ至リテ自治ノ精神ニ對等ノ權利ヲ喪フノ氣象モ俱
ニ埋滅スル迄ニ成リ行キタリ是レ豈ニ吾曹市民ノ權利ハ昔日ノ江戸ニ盛
ニシテ今日ノ東京ニ衰ヒ者ナリト云ハサルヲ得シヤ

幸、今郡区制、法業議決セラレタレバ東京ノ市民ヲシテ昔日ノ權利ヲ恢復シ
以テ自治タルヲ得ルニ期ス亦蓋シ遠キニテラサレバシ噫政治ノ干涉ノ度
ヲ過シバ人民ノ權利ハ從テ滅スト夫レ信ナレ哉

総州九十九里漢撈佐藤信淵著
経海要録卷

諸国漢撈、中ニ於テ其業最モ大ナル者ハ南総北総九十九里ノ海、鯨ナリ
九十九里、漢獵ハ日本総国ノ第一ナルベシ何トナレハ上総国東海見
村ノ大東岬ヨリ下総、国鉞子江、丈吹鼻マテノ間ニ漢獵ヲ以テ口ヲ
糊スルモ、四萬餘戸其首領タル地挽經主三百余家其他繩舟ヲ業ト
スル者數百家有テ各々配下、漢父ヲ養フ故ニ經主タル者ハ箇々毎年
千金以下ノ獲アリ非レハ其部下ヲ衣食スルニ足ラズ然レバ九十九里三百余
家、細師其業モ亦大ナルニ非スヤ凡海岸遠淺ノ地ハ地引綱ヲ用ルル多ク
レハ大抵ハ皆片地引ナル者ニテ九十九里ノ如ク西地引ヲ用ルル鮮シ故ニ此
地ノ大綱ハ一奉千金ノ大利ヲ得ルマテ漢業ノ第一タル所以ナリ其次ハ
西海及ニ南海、鯨其次ハ土佐阿波薩摩諸島及ニ紀州勢州伊豆安

房上総下総等ノ鉛、錘、臭ナルニシ其次ハ蝦夷國ノ松、莫、大口、莫、青、莫、鍊
錫ナリ云

漆器描金 全上

我邦ノ漆器描金ハ萬國無二ノ名産也此技中世京師ニ推禦ス而ノ其年代ヲ
詳ニセズ足利義滿ノ時ニ至テ漸ク盛トス之ヲ東山時代描金ト云後徳川氏
ノ初年京師ノ工人多ク江戸ニ移住ス再永青海、光琳、望翁、寛教、胡氏、羊庭
有徳等妙手輩出シ漸ク精工ヲ究ム當今柴田是真岩井其雄亦此技ニ
巧也凡器什ノ人目ヲ驕ハシムル者之ヲ以テ絶品トス然レバ此板極テ近ナリ
速成ノ者ハ皆下品ナリ然レバ平描金ノ稱ニル者ハ皆速成ニシ兒女素人ノ目
ヲ驕ハシムルニ足ル專匠用ル所ノ金粉數品アリ最上品ハ燒金、青金、鑿屑ヲ
用テ其精細ニ從テ微塵、極微塵、中微塵、花子、常等ノ目アリ之ニ一等金位
下ル者ヲ薄朱ト云又下ル者ヲ消粉ト云是レ金箔ヲ銷末トナシタル者也
器具ノ大ナル者ハ地濃ニ梨子地金ヲ用テ亦粗細ニ從テ大一大二大三小一
小二小三等ノ三等目ヲ以テ呼フ之亦燒金、青金、銀、直判、並判、錫等ノ品

級ナリノ抑古来漆器ヲ出ス所ハ京都大坂及ニ近江ノ日野大和ノ奈良吉野郡
其他ノ諸州ニモ多シ殊ニ京都ト吉野ヨリハ上品ノ漆器ヲ出シテ其名世上ニ高
シ然ルニ近來ニ至テ會津ヨリ種々ノ漆器ヲ夥シク出シ其勢ハ天下ニ独歩ス
故ニ今ニテハ京都ニ注文スルト虽モ京都ヨリハ竊カニ會津産ノ漆器ヲ下ス
ニ至リ又秋田ノ野代ヨリモ亦極テ精巧ニシテ都雅美觀ナ
ルヲ以テ此レモ亦甚ク世ニ貴重セラル伊豆ノ熱海ヨリモ七葉樹ヲ挽タル春慶
塗諸器ヲ出ス然レモ事ナクシテ論ズルニ足ラス箱根湯本等モ又然リ駿河ノ
府中ハ竹器及ニ種々ノ器物ヲ製シ春慶塗ニシテ此ヲ賣ル上品ニ非マズ且モ精
巧ナリ且ツ夥シク出ス

州壑 佐藤信景著
土性辨板萃

鹹泥 第六等 洋等潮水ノ盈壺ニテ塩鹹味ナル泥ヲ云フ凡ソ潮入ノ場所ハ皆
草カ或ハ葦ノ蒲菰ニ三角等ハ能蓄衍スルト虽モ穉ヲ植ルハ成熟スルヲ能ハ
サル者也此ハ鹹氣ヲ脱去ラサレハ穉ヲ作ルヲ能ハサル故ニ此ヲ田トナスニ
先ツ海手ノ方ニ潮除ノ堤ヲ築テ潮水ノ来ルヲ最ク止メ且又近キ所ノ流川

ヲ堰番テ其水ヲ流シ入テ能其鹹氣ヲ脱キ去リ而シテ先ツ出雲種古志種
等ノ下米ヲ植ヘシ余カ若年ノ時ニ長州矣曾テ州作ノ志アリテ平生極テ質素
ニ暮リテ教十萬兩ノ大金ヲ納戸ニ積ミ且後周防國三田尻ニ隱居シテ州作ノ
業ニ取掛リ三田尻近海ニ遠浅ナル内洋アリシテ海表ニ隄ヲ築キ潮水ノ入
来ルヲ止メテ悉ク新田トナサシムラ欲シ度々隄ヲ築立海手ヲ塞キシカハ大
風吹キハ其隄破シテ潮水ノ入来ルヲ止リ難ク困苦マラル余時ニ遊歴シテ彼
地ニ至リ家傳ノ勢子石ヲ置汰ヲ教ヒリ因テ其後ハ如何ナル難風マリト
虽モ堤防ノ絶テ損傷スルヲ初メハ塩焼瀆トシテ土地ヲ固メ漸々新
田ヲ開墾シテ耕作ヲ始メシニ次第ニ能豊熟シテ夥ク米穀ヲ生シテハ
萬石許ノ新田興リ塩ヲ焼出ストモ廣大ナルニ及ベリ河州ニ遊テ海濱
ヲ巡覽セシニ州作スヘキ場所アルヲ以テ其事ヲ傳達セシニ大坂ノ所人鴻
池善右エ門余カ教ニ從テ二萬石余ノ新田ヲ河州ニ開ケリ其他三州矢矧川
吉田川遠州天龍川大井川駿州富士川等ノ諸大河海ニ注ク所ニハ州作スヘ
キ土地甚ク多シ且又関東ノ内洋ニハ廣大ナル州作場アリ即ケ下総ノ國

市川ノ海ニ注ク所、堀江村ト猫実村ノ海岸ヨリ上総国富津村ノ海岸ニ至ル、
千潟二十里、向テ三里沖ニ勢子石ヲ置テ此ヲ開作スル者ナシ、昔ノ米
百万石ト塩二百萬俵ヲ、ラエスヘシ若又木更津及柿寄五井八幡濱野曾我
野寒川登戸検見川馬加舟橋等ノ諸港ヨリ故障申セルト必アルベキナ
レ、此ハ富津ヨリ行徳マテ二十里、向海岸通ニ新川ヲ鑿リ上総ノ小系
川養老川五井川草刈川等ヲ始トシテ下総ノ五龍浦川千葉稲毛川馬加川
鷲沼川舟橋川等大小流レハ、水ヲ悉ク此新川ニ會合シ河舟ニテ新斗根
川ニ通スルキハ運送ノ不自由ナルトハ絶テナキト也唯漢士等ハ新田ノ濱ニ出
テ漢事ヲ働クヘキ、且又江戸町中ノ内湍外湍ヲ始メル、泥埋リテ川舟
通行甚難法ニテ所ニヨリ時ニヨリテ通行ノ叶ハル所モ有テ困窮スル
少ナカラス殊ニ関東ノ諸川坂東太郎ヲ始トシテ古斗根川綾瀬川秩父川
多麻川其他鉄鉋洲沖ヨリ岳川佃沖三股洲ノ辺等泥ト沙トノ埋リタルト甚崇
クシテ大小船ノ往來極テ難澁ナリ因テ常浚ノ法ヲ立テ石諸所ニ埋モレル塗泥
ヲ取除キ此ヲ彼開作場ニ実ル者ナラハ世上ノ禍ニテ除テ國家ノ宝ヲ生スル也別

ニ財用ヲ費スノ患ナクシテ西使ノ功業ヲ成就スルナリ若夫石ニ説タル埋レル泥沙
ニテ開作場ノ濱ヲ實ルニ足ラサルキハ相州東シ海岸ノ山ヲ削シテ此ヲ舟ニ積ミ風
ニ引セテ相埋ムルキハ格別ノ骨折モナク新地成就スヘシ此事既ニ成ニ及ニテ
ハ関東ノ大宝ニテ假令船岡アリト虽モ米塩ノ手支スルトハナカルベシ殊ニ勢
子石ヲ置時ハ夥ク砂聚リテ其所ノ自然ニ埋ル者也先ツ塩濱最初ニ成テ
大ヨリ次第ニ新田ニ及フベシ又内湍外湍大小川々ノ出洲及土砂等モハ頗ル膏
腴ニ塩礬ノ氣ヲモ含有スルヲ以テ此ヲ新田場ニ実ルキハ佃キタル初年ヨリ
作物ノ豊熟スルヲ論スルニ及ハス抑此内洋ハ自然ノ天勢ニテ漸ク南方ニ湖
水ノ退リ理アリ既ニ天文元年我曾祖父崇徳翁石濱ニ在ル時ニ隅田綾瀬ノ
辺ニ潮入ノ所甚多カリシト云リ然ルニ是歲享保九年ニ至リ百九十二年ノ間ニ
潮水ノ南ニ退リテ既ニ二里ニ及ヘリ是ニ由テ此ヲ視レバ今ヨリ後千五百年
ニ及ルノ間ニ此海南ニ退クテ猿島ヨリ北方ハ大概陸地ト為テ市川仲川
大川多麻川ノ外ニ水ノアル所ハナリテ唯内洋ノ渾キ所ハ沼ノ如クニナリテ
遺ルニシ故ニ此内洋ノ千潟ヲ開作スルハ天勢ニ從フナリ也

幌内煤田開採岩内煤田改良着手、概畧

明治十二年四月發布
起業公債并起業第一次第一回報
吉 大藏省回債局起業公債掛編述 郵便報知新聞十二年五月九日

幌内煤田、北海道石狩郡札幌開拓使本廳ノ東北凡ソ十八里許、在リ
廣袤凡ソ一里余ニテ群山起伏樹木茂生ス其煤炭ノ開採、堪ユヘキモノ凡ソ
七層ニシテ厚サ三尺三寸ナルモノヨリ五尺八寸ナルモノ、至ル米田ノ地質學
士「ライマン」氏ノ畧測ニ據ルニ此煤田測量區域凡ソ拾一方里余ニシテ海面下
四百尺マデヲ算入スレバ煤炭ノ量ハ無慮一億零々ニ拾壹萬五千噸、多キニ
至ルベシトシ只幌内一山ニ止ルノニシテ其他本山ニ接近シテ漸次開採ヲ期ス
ヘキ者枚挙ニ遑マラスト云々
今擬開採ヲ創シトスル者ハ幌内第六露土煤層ニ其炭坑ノ位置ハ早川村ノ南
東ニ在リ煤炭ノ坑ヨリ直ニ斜道或ハ輸車路ニ由テ鐵道停車場ニ輸送シ是
ヨリ凡七里ノ鐵道ニテ幌内太田ハ上言ハルニ輸送シ此地ニテ少クモ貳拾五噸以上ノ
荷船ニ搭載シ汽船ヲ用テ之ヲ曳シテ石狩川口或ハ直ニ小樽港ニ運輸シ是ヨリ
内外各港ニ輸スルヲ得ベシ

岩内煤田ハ北海道後志国岩内郡茅渕ニ在リ其煤炭ノ開採、堪ユヘキモノ凡ソ六
層ニシテ「ライマン」氏ノ測量區域内ノ炭量海面下凡ソ三千尺或ハ四千尺マデヲ算入
スレバ三千八百五拾五萬噸ナリ其炭質ハ之ヲ幌内ニ比スレバ稍下ルト云々炭坑ハ海
岸ヲ距ル僅ニ三拾町内外ナルヲ以テ從來開採ニ從事シ斜道輸車路等今
至ルマデ猶ホ之ヲ使用シ其煤炭ハ既ニ多少各地ニ輸出セリト云々然レモ其開採
法未タ充分ナラカレ故ニ這般專ラ改良ヲ主トシ且リ新ニ二條ノ輸車路ヲ
添井茶津内ノ函館ニ架設シ又添井ノ小灣ニ水堤ヲ築キ以テ運漕、便ラ開カ
シトス

借帳 柳菴種業卷之一

水曾ノ贅川驛ニ宿リシ時亭主某カ家ニ古ク持傳ヘタル文ヤリ讀解カク
キ節々明ラメテ云ツ、取出スヲミレハ天文永祿ノ頃ノ消息ニテヤノ
賞スヘキ書モナカリシカ慶長三年ノ端書アル帳ニ御精不トハ一返不
ヤッ極念大ナリト云々板乃物、市先ナレト申出ル事、今モ志ラシ
情左申ヤリト云々タルアリ世ニ於ニキ心スレハ難抄ニセハヤト筆紙ヲ取出ル

亭主止テ云ソレハ此宿ニ限ス捕井 數厚也ニ四キ驛舎ノ客帳ノ端書ヤリ
影抄ナラテモ真ノ物ヲ登ラズニ夜明ナハ此帳綴直シテトアルニ付ヘテ兼ヲ收メシ
カ翌朝去主トテ忘レタレバ歸ルサニ必ス心構ヒシニ障アリテ勢川ニ宿ラス凡テ
此驛ヲ度往來シタルニ遂ニ得ズナリニキ度長ノ頃ハ旅人糶ニ合セ付テ一日ニ
充テ十日路ヲ行ニニ休セ合テ齋ノ驛舎ニ着テ湯ヲワカシ糶ヲ喰テ寝ルマ
テナリシカレバ湯ノ木ノ代四キカテヲ拂ヒ往來セシトナリ然ルヲ旅人自糶ヲ
湯ニホトハスヲ煩ハシトテ驛舎ニ打任セテ頼メハホトバシ過シテ糶ノカサヲ殖
シ誠ハ糶ヲ掃ルモノ有シヨリ帳ハシメニ書付置コトナリトナリ人量ニ依テ
思ハハ軍防合ニ兵士人コトニ糶六斗ヲ儲シメシモ伊勢物語ノ八橋ニテ糶食
タル源氏物語玉葛ノ長谷ニテ豊後分カ御堂ナト打合スト、ムワカリシモ、糶
ナルヘキハ論ナシ道明寺ニテ製スル根本旅行ノ用意ナルベク

宿賃 全上

寛永三年五月御上洛ノ時路次中宿賃御定書トテ令條記ニ見ヘタリ

一人ノ四文 一馬ノ八文

但自分薪焼ハ一人ニ二文馬ニ四文馬屋モ之之自分薪タキハ二文

馬屋ハ之之共亭主ノ薪ハ四文タルニシ

一京ニテハ馬屋之之ソトニ撃キ、自分ノ薪廿四文ノ事

以上 寛永五月

今考フルニ寛永錢四文ハ金一両千分一ナリ 然レハ今ノ錢六文五分ニ寄
ルト云ヘケレトモ慶長金ト今ノ金ト目方又同シカラス、通用ノ愛モ詳カナラ子ハ
引替テ賜ハリシ割ニテ知ニ大抵一倍ニ寄レバ此四文ト云テ今ノ六文五分ニ直シ
此ヲ倍シテ十三文ト知ヘシ八文ハ廿六文ト知ヘシ

産見原 柳産值学

小田原、北條氏に仕タリシ遠山神四郎景氏ト云シ人ハ武藏国久良岐郡金利谷
ニ云地、領主タリ地理ヲ尽ス術ニ妙ヲ得タリシトナリ其一ニラ樹クニ或者景氏
ニ産見原ハ四方六里ニ及フヘシ鍾倉將軍家ノ時ヨリ新田ニ取立ハヤト企
ツルハアリシナレバ其コトナルニイタラシソハ思慮精カラス故ナルヘシ今之ヲ思
送シ玉一ナハ末代マテノ益ナラントソ、ノカシケレハ暫時物ヲ業スルサマナリシカ業
ヲ取テ四方六里ハ徑一里半ナリ此田歩凡一千四百九十九万七千六百歩ナレハ町
段法ニテ二千九百十六町ナリ路敷畔畝ナリ引去テモ二千町許ノ田畑ナリ
ヘシ農夫四千許カ佃農ナリ田畝ハサナクテ作人多キハ利アツテ人ナクナ
ラ田畝多ハ損フカシ新田ヲ思立シヨリ古田ノ荒サランコトコソ歎ハシケレト
云タリシトナリ

農工高、恒産 合上

良農夫一人婦一人劇數キ、日雇一人ニテ田一町ヲ耕ス種一斛蒔テ穀四十斛
ハカリテ獲ヘシ摺テ米七斛モ有ヘシ御年貢諸掛五斛許ヲ納メテ残十
五斛許マリ其内五斛ハ田ノ主ニ納メ全ク十斛許カ作得ナリ又畑五段ハカ

リヲ耘シ大根二万五千本ヲ得一及五千積リ賣テ百廿五貫文許ニナル二及根
積リ此内糞ノ價五ヶ貫江戸へ舟賃二両二分運賃四十貫ヲ引全廿八
貫七百五十文カ得分ナリ但此五段ノ内三段へ麦ヲ作り六斛許モ得一及
御年貢三貫モ上納シテ廿五貫七百五十文許四兩ト米十斛麦六斛ヲ一夫
一婦一年ノ辛苦料ト知ヘシ是内夫婦ノ食麦三斛六斗米一斛余ヲ引
キ又日雇ノ扶持麦一斛八斗米五斗ヲ引キ三月餅等ノ米三斗余ト種穀
一斛ヲ引又子女マシバ其食料一人ニ九斗許ト積リ又親屬故田ノ會食
二斗ヲ引バ米七斛二斗ヲ残ス金七兩余ニ充ヘシ畑ノ得分ト合セ十一兩
ニ過ス塩茶油紙ノ費二兩許農具ノ價家具ノ料二兩許薪炭茅一兩
余夫婦衣服子女ノ料共マター一兩二分余春ヲ迎ヘ歳ヲ送り魂祭
年忌仙事ノ入用二兩余日雇賃一兩二分全親屬故田ノ音信贈
遺一兩許スヘテ十一兩全ヲ引キ残ルトコロニ三分ニ足ラヌ故ニ風
寒濕暑ニ侵カレ一二月ニ怠惰スル中ハ收穫ニ損アリテ医薬ノ價
充ルニ足ラヌ何ヲ以テ酒色ニ費ス余カラ得ヘケンヤト云豐

村農コレニテ農夫ノ辛苦ヲ知ヘシ

大エカ云一日工料四匁二分飯米料一匁二分ヲウケ但一年三百五十四日
内二月節旬風雨ノ阻ナトニテ六十日又休トシテ二百九十四日ニ銀一貫
五百八十七錢六分ナリ夫婦ニ不見一人ノ飯米三斛五斗四升此代銀
三百五十四匁房賃百廿匁塩醬味噌油薪炭代銀七百目一匁銀
十分年道具家具ノ代百廿匁衣服ノ價百廿匁親屬故田ノ音信祭祀
仙事ノ觀施百匁等都合一貫五百十四匁許ヲ費シテ僅ニ七十三匁
六分ヲ餘セリ若子二人アルカ又外ニ厄介アレバ終歲ノ二料ヲ尽シテ
以テ供給ニ足ラヌ何ノ有餘ヲ得テ酒色ニ耽樂スルコトヲ得ント云是工
匠ノ勞ト産トヲ勘知ノ大略ナリ

菜籠ヲ搭テ晨朝ニ錢六七百ヲ携ヘ蔓菁大根蓮根芋ヲ買ハ我カノ
背カキリ肩ノ痛ムス肩トセス脚ニ信セテ卷ニ聲アリ立蔓菁ノ大根
ハイカニ蓮モツ芋ヤ芋ヤト呼ハリテ日ノ足モハヤ西ニ傾クコロニ家ニ還ルヲ
見レバ菜籠ニ一匁ハカリノ残レルハ明朝ノ晨炊ノ儲ナルヘシ家ニハ妻

イキタナク晝寐夢マタ覺ヤラス懐ニモ替ニモ幼稚キ子等二人許ニ横
臥ニ並臥タリ夫ハ我家ニハ菜籠ヲ夕ヨセ室龜ニ新サレク一敗布、紐
トキ翌日ノ本貸ヲ窺除ニテ房賃ヲハ竹筒へ納ナドスス頃妻眼ヲ
覚シ精米ノ代ハト云スハト云テ二百文ヲ擲出シ与フレバ味噌モナシ醬
モナシト云又五十文ヲ与フ妻ニ麻笥ヲ抱テ出ルハ精米ヲ買ニ行ナルヘシ
子供這起テ爺ヲ菜子ノ代給ト云ナニ三文ヲ与フレバ是モ外ノ方へ
走出ツ然猶殘ル錢百文余マタハ二百文モアラシ酒ノ代ニマカケン
積テ風雨ノ日ノ心老ニヤ野ナルラン是其日縁ノ輕キ商人ノ産ナリ但
是ハ猶本貸ヲ持シ見上ナリ是程ノ本貸モ持ヌ者ハ人ニ借ニ曉鳥
声キヨリ棲鴉ノ声キク近ラ期トス利息ハ百文ナリニ二文トカ三文トカ
云一兩ニ二百文ノ利息然モ一日ノ期ナリ一月ニ六貫ノ割ト知ル但借人
ハ七百ノ錢ニテ一日ニ一貫二三百文ニモ盡上ル故七百文ノ錢ニ廿一文
ノ利息ヲ除ケテ其外ニ五百七十五文ノ餘アリ依テ借モ貸モ共ニ利
イリテ損ナシ

大都ノ商人御ニ長少打交四五人モアルヘシ内ニ妻子眷屬下女等マテ又四五
人合セテ八九人ノ家ニテハ精米一年ニ十四石四斗許此價十五大兩味噌
一兩二分許將面二兩一分許油三兩許薪四兩二分許炭三兩二分許
大根漬一兩三分許菜蔬ノ料家具ノ料十四五兩衣服ノ料又十七八
兩普請ノ料六七兩給金八九兩地代廿二三兩都合百兩余ヲ費スヘシ百兩
ノ利ヲ得ルニハ千兩ノ本貸ナクテハ叶ハス但七百ノ本貸ニテ七百ヲ得
ハ易ク千兩ノ本貸ニテ百兩ヲ得ハ難シト云是ヲ武家ノ祿ニ比スルニ
百兩ハ三百石ニ准ス三百石ノ家ニテハ侍二人具足持一人鎧持一
人狭箱一人馬取二人草履取一人小荷駄二人ノ軍役ト寛永
十年二月十六日ノ御定ナリ今廿價ニテハ侍二人、給金八兩
中州八人ノ給金廿兩馬一疋秣代九兩ヲ与ヘ又十人ノ扶持五十俵
ヲ与フレハ殘百三十九俵アリ其内十人ノ者ニ塩増薪代十三兩
ヲ与ヘ然後カ我勤ト武具家具普請ノ入用六七兩ヲ引妻子下女
等ト共ニ四五人ノ費用廿兩許トシテ總テハ五十兩余ヲ用フヘシ

百三十九俵ヲ賣テ四十六兩少餘ナリ此法ニテハ年分三兩余ノ不足トナル
 寛永十一年ヨリ弘化二年マテ二百十三年ノ間三兩餘ノ不足積リテ六
 百三十六兩ノ借金トナレリ三百石ニ六兩兩ノ借金アレバ利息年分三十兩ヲ
 拂フテモ百兩ノ金僅カニ七十兩ニ減ス依テ十人ノ下僕ヲ育フコト能
 ハス是ヲ省ヘテ漸々其日々ヲ過スノミニ至ルコレ武家ノ祿法ヲ察知
 スル一端ト云ヘシ

明和九年物價 三省録 三石忍頭

明和九年大火ノ片江戸中ウリアリキタル文：

大火事ノ節相場アラマシ

- 一 銭両ニ三發八百文ホド
- 一 米百文ニ一升
- 一 戸板金一分二枚
- 一 古置三百五十文
- 一 コモ百文ニ四文
- 一 ムシロ百文ニ二枚
- 一 ヘソツ一ニタロ吉下七百五十文
- 一 松板兩ニ二十六枚
- 一 スリ鉢大二百三十二文 中百七十二文 小八十二文
- 一 スリコ木五十文 三十三文
- 一 ホウロリ 二十八文

一 小ナベ 新キ 二百文

一 ナアンドン 三百文

三省録

東鑑治承四年ヨリ日記ニテ実録ナリ其中：

- 一 炭一駄代百錢
- 一 薪一駄代百錢
- 一 糠一俵五十錢
- 一 萱一束五十錢

左

寛永ノ頃三谷通ノ若人等白馬白鞆ノカ革ノ袴白クリノ袖ヘリナド凡テ白ヲ
 以テ風俗流コトス寛文二年ノ板ノ歌惣オクニ本ノ馬ニ乗テ三谷へ
 通ヒシ駄賃附マリ

所ヨリ吉原マテ駄賃附ノ事

一 日本トテ 吉原大川

並多先ん二百も

馬奴二人出番アリ 饒白馬多先ん三百四十八文

一 飯田町ヨリ大門マテ

二百も

口前

一 浅草見附ヨリ大川マテ

並白馬二百三十二文

馬奴二人白馬一匹 白馬多し二百四十八文

是白馬ヲ好ミシ証ナリ 奇品考

全

玄慈法師カ庭刻往來ニ白紙拂底ノ旨所用及古也更非輕賤之至或ト書タレ
文三年余情ニ書タルニテ実事ニハアルマシ書状ト思シ頃日永享子嘉永
頃ノ林平中日記ニ及古ヲ用ラシタルヲ見タリ然ハ庭刻ノ文言靈事ニ非ス今世
ニハ卑賤ノ人ト云ヒ書状ニ及古ヲ用ヒヌナリ

理齋考ルニ古ハスベテ紙甚タ少クシテステニ薄墨ノ繪旨トマルハ及古ヲ紙屋
川ニテ漉込シタル紙ナレバウス墨色ナル故ニ号ク坊嶺半云

全

近年年ヲ追テ物事追重ニ相成手段多ニナルト云フ詎ハ余カ若年ノ頃サレ大各屋敷
ニ羅在御番所勤番出ノ慶御番所勤方置帳ト言モナリ其帳享保以前ハ一年
ニ美ノ紙三十枚位ニ過ス寶曆ノ頃ニ及ヒ厚サ二寸許ニ相成寛政ノ末ニ至リ三寸許

帳ニ冊ニ至リ余カ出シハ文化ノ末文政ノハジメ頃ナリ其時ハ既ニ三冊ニ及ヒタリ何
ト異事ニテモ有カト見レバ左様ニテハイツモ枯枝ノ出来タル白土カ落タノト申ス
ツ事ニテ夫々先何書ノ見合ヒ書キマノトニ通モ三通モ入故如此キ故多ニハ成
ナリ自然ト少人故ニテモ勤リカハ果ハ御ノ字等近書方キマリツ百先創帳ナ
リテハオオシニテモ勤ラス帳面サレバ不才ニテモ勤ル故帳面計緹故ヲ切者
モノト申ヨフ成行ツ召人オモ慮スル筈ナリ

全

或書ニ云奥州ノ米江戸へ廻ルコトハ寛永九年ヨリ始ルナリ其頃仙臺ノ米直段ハ兩
ニ七石四斗ナリ中頃一石分ニ六斗ナリシトゾ又兩國橋ハ萬治三年出来ニテ昔ハ將軍
ノ御意ニ不叶者アレバ大ニ不限江戸屋敷被台上本所ノ荒地ヲ被下レトナ
リ

全

享保十三年申年三月七日被仰出ツ御觸書ニ
一番所 一 秋所 一元山王 一 永富所 一 十川所 一 猿栗所

一 駿河屋 一 飯田町
古屋敷ニ家作親焼無之トモ修復マタハ親規ニ普請仕ッハ、向後葺業ガキ
等ニ仕百取ハ武家秘要集ナ

全

塵塚談ト云ル某氏隨筆記ニ云享保元元年洞諫色ノ價ノ事祖父笠船君隱定
ノ遺恨ニ近來ノ物價ト相違セシヲ抄出ス

享保十五年戊
十二月二日

一百文

と白一油五合

〃 四日

一百文

白豆四升五合

〃 廿二日

一 三百文

白木綿一反 新兵衛一祝
以産ス

〃 〃

一 四百文

岩概霜降木綿一反

〃 廿三日

一 四百四十六文

上々白米一樽

十二月六日

一 一キヤ合

上白餅米三斗六升

〃 廿四日

一 二百文

上々白米五斗

〃 廿八日

一 四百四拾文

土酒五升

經濟問答秘録

當今人心謹讓之道ヲ損テ隣端ニ田業ノ高貴有ルニ又同職ノ者ヲ榮ル者アリハ辭讓ノ道ヲ失フエエラカス風俗ニ移ル若免職ヲ願ハ先其近隣田業ノ者碍障ト為ラハ謹讓ヲ教諭スヘシ或ハ昔ヨリ名物ノ丸散藥ヲレバ且テ信テヤシ文字ヲ易ク賣出ス者モアリ其共損若ハヘキ事アリ又邦國ノ產物ニ於テモ斯ル事有ラ竟ニハ銀主互ニ意趣ヲ合ノル根本トナシ先年阿波ノ者土佐ニ往キ彼邦ノ名產藥袋紙ヲ製古シテ歸リ吾國ノ產物ニ致カント願ハ奉行ノ國益ト想ヒ上ニ訟レハヨク主テ其紙ハ土產物ナリ吾國ニハ必割取エカラス若密ニ之ヲ割取ルハ形同テ處セント余アリ國ヲ治ム者ハ斯コリ有ルヘキナリ

今

土佐ニ七宝山ト云テ數十里ノ連山有テ巨材良木茂盛ス之ヲ伐テ大坂ニ出シ舟橋等ニ莫大ノ估ヲ取ル其處ハ阿波領砂川ノ下流ニ海ニ入ル國テ阿波ノ儒夫ヲ雇ヒ何處作モテリ運賃至テ下直ナリ或時儒夫トモ材木ニ三本ヲ盜シテ砂中ニ墜ノ置シテ爾擄得テ發覺ニ及ハハ役人之テ執ヒテ阿波ニ送ル阿波ハ朝儀有テ其者ヲ

彼處に於て刑戮を以て後ハ儒夫ヲ出サスル川ヨリ流ス事ヲ禁制ス土佐ハ日下流無ハ
山ヲ巡ル事七八里ニシテ運艫叶ハス空枯ルヲ待テ大統ノ財貨毎年土中ヨリ出キ
者ヲ聊クノ欲ラシテ大益ヲ採ルハ全ナ利ニ眼ヲ觸ルヨリ生ス云

全

或邦ニ荏油ヲ產物トシテ多他邦ニ賣斥ス時ニ俗例ノ吏人有金不足ヲ計ラシテ先郷村
ニ令テ下ニ農民一戸毎ニ其登ル所ノ石數書載テ取ラシテ捧ル次ニ領中貴賤貧
富毎賤用ル所ノ油ノ石數ヲ記シテ納ム共ニ合テ計ル荏種大ニ不足ス荏種二斗ヲ一石
用五斗トス由之油ヲ他處ニ出リス故ニ田職ノ高愛作職業尽テ大ニ困窮シ農民ニ餘半
ハ賣事ニ得ス領中必止ト迫リ特ニ庄屋各主ヨリ一戸毎ニ捐キ取テテ書記
ス其暇隙筆紙ノ費幾許ヲヤ云

全

大坂ハ香物贈答ニ設ハ酒ヲハ五升ヲ送ルニ升交テテ五枚三升買ハハ三枚酒肆ヨリ
此ヲテ寧ニ紙ニ包ミ水引ニテ結ヒ産樽ヲ添テ渡ス又菓子ヲ送レハ虎屋ヨリ
饅頭十交子ニテ何枚ニ包ムニ向ヨリ人用次第ニテ取リ又他日何方ニ進物
スルニ之ヲ送テ腐傷ス事モ無ク何年當ノ置クモヨシ月又佐銀ニテ取ラントスル
トキハ二割引ニテ渡ユナリ云

全

或邦ニ興利ノ者令國中ニ用テ所ノ年一年ニ莫大ノ估銀他邦ニ散財ス之ヲ自國
ニ製シ他邦ノ奪ヲ禁スルハ大ニ利潤ト奏セバ上々人ハ下情ニ疎キ者ユ一尤ナリト
朝議ニ決シ職司ヲ建テ夥ク製作シ直ニ他產ノ品ヲ好テス製物未熟物暴ニ
其使フ所是近大坂其外他邦ノ製ハ二三年モ用辨セシニ僅一年ヲ以テサズ破壊
スルニ國民敢テ服セス孰買フ者無ケレハ市亦モ他產ノ品ヲ欲ニ賣置セシニ却テ
ヨリ其職ニ与ル者ニ時ニ潛行シ公威ヲ假テ取上ケ何ニハ僭者来テ云初テ
產物ヲ任セント計ラハ先大抵其戶數ヲ校量シ其用費ヲ考ヘ餘年三本丁
ラハ當年ハ先一十本丁作り他產ノ品ト雜ヘテ賣ラセ一十是ヨリ賣尽サハ翌年
ハ二十本丁作り之モ悉ク賣ル時ハ又明年ハ三年ヲ作り之モ賣尽サハ自國品
彌民心信用ト是時他邦ノ產物ヲ必至ト禁制ニシ國產ハ永業ヲ肇ル事
ニ一朝一夕ノ事非ス斯自國ニ生産スルト倉卒ニ他產ヲ禁スルハ高水練ト云

者なり若し製ニ下五テラハ縦合テ下リスト其氏国人信用スルハ必定ナリ我藩四五
十年前迄ハ市店統テハ豆嶋素齋ヲ賣リシニ神崎ハ城ニテヲ製法ニ漸々上
ト成ルニ上ヨリ他處製法無シ也今ニ於テハ自國ハ勿論西國ニ流行シテ豆嶋
ヲ用ケルハ様ニ成レリ瀬戸物ニ古其元ハ尾物ナリ凡文録年中我藩ニ發軔シ
古來亦曾其ノ載石ニテ天下無双ノ多産トナシ

諸國童謡俚歌

洋社談十八号
那珂通再述

薩摩兵兒謡一タテ頼良ノ詩ニ入リヨリ天下コレヲ傳誦セハ者ナシ其ノ辭ハ
肥後ノ加藤ハ来るならハ始硝有テ團子まらそ夫てもまかきに來るな
らハ首ノ刀ノ引出物ト云ル謡ニシテ團子まらそトハ即彈丸ヲ以テ膳差
ニ元ウルヲ言フアリ當時加藤清心封ヲ肥後國ニ受リ島津氏コレト境ヲ接シ戒
心ナキコト能ハス因テ暴ラ出水郷ニ築カントス此ノ謡ヲ製ラ徭夫ヲシテ唱ヘシメ
タル所ナリト云フ此謡ノ外ニモ亦「我ハ備前ノ鑪刀たもひまハセ」研きは「や
ト云ル謡アリテ佩カラ板キ舞踏スルヲ以テ常トセリ傳ヘテ言フ島津氏既ニ款
ヲ置臣大樹ニ納レテ國中無事ナルコト數年朝鮮ノ役起ルニ及ヒテ士卒ノ刀

或ハ鑪ヲ生セシ者アラシコトヲ恐ル故ニ此謡ヲ製リカラ板キ舞踏セシム實ハコレヲ
檢スルナリト是モ亦以テ其ノ武ヲ出フノ風ヲ觀ルヘキナリ其他猶降らハふれハ
つれ松ノ雪ヨキヲをれたる松ノ枝ヤある」又「あハれ我ハ身舟ならハおも
ふ君さまうちカセてあらハア無くとモ我ハ宿ヘ」又「最早おぢやるか御江
戸ハおぢやるかちもつよカ札矢も利カ也」ト云ルカ如キ數關アリト傳ケリ凡古ヨ
リ當時ノ事傳ヘテ童謡俚歌ニ存スル者少シトセス徒然草ノ野槿ニ出テタル一里
側所ノ謡ハ以テ鎌倉府ノ壁人ヲ知ルニ足リ尤田草紙ニ載ヒタル赤キ物尽シノ歌
ハ以テ聚樂第ノ時粧ヲ觀ルニ足レリ織田右府ノ浅井氏ヲ圖ル城ヲ虎御前山ニ
築キテ以テ十谷城ニ逼リシ時織田氏ノ兵常ニ謡ニテ曰ク「浅井ハ城ハちいさい城
ヤア、よい茶の子朝茶の子ト浅井ノ兵コレニ答ヘテ「浅井ハ城を茶の子と
を」やう赤飯茶の子ト強茶の子ト云コ又「信長殿ハ橋の下のカら篋いよ
ツと出て引こみいよと出てひこむも一度出たら首ヲ取ろ」ト云ヒテ今猶
近江國ニ童謡ニ存ス又其國ニ「浮世といハあさましや多勢の久徳ハ親
流キ親莊駿河ハ子互流すとかくを」ト云ハ我ハ余ト云ル謡アリ

此ハ當時新莊駿河守ハ改妻城ニ居リ久徳左近大夫ハ多賀城ニ居リシカハ左近
大夫ハ母ヲ質トシ駿河守ハ子ヲ質トシテ浅井氏ニ属セシニ後後キテ六角氏ニ
降レルヲ以テ浅井氏コレヲ怒リ二人ノ質ヲ城下ニ磔ニセシニ由リテナリトソヨ
等ノ類或ハ以テ史傳ノ闕ヲ補フニ足リテ其ノ時事ニ関涉ナキ者ノ如キハ土佐
日記ノ舟子ノ歌枕草紙ノ挿秧ノ歌讚政典侍ノ日記中ニ見ヘタル搗米ノ謠
降リテハ雲々詳雜志及庫島志ノ稱勅歌ハ文日記ノ織絹謠畫圖西指
譚ニ出タセル伊勢国日永村ノ孟蘭盆謠提醒紀談ノ筑後国ノ風流歌或
ハ下総国ノ潮来曲利根川回志ノ搗麥歌或ハ俚謠擁書漫筆ニ存ケタ
ル者指テ居スルニ是アラサレハ今皆コレヲ舎キテ其ノ末世ニ傳播セサル者
ヲ擇リ附スルニ當時ノ事ヲ以テセントス陸前国仙臺地方ニ「さんさーくれ」曲
アリテ衆庶ノ宴會アル毎ニ坐客ニ齊ニ拍手シテコレヲ唱フ此ノ謠ハ仙臺ノ藩
祖伊達中納言改齊宗天二年向父ノ仇ニ本松氏ヲ討クントシテ兵ヲ安積郡
人取橋ニ出タスニ本松氏乃援テ隣國ニ請フ佐竹岩城相馬也蘆名諸氏来

會シテ軍威甚熾ナリ改宗其ノ宗族藤五郎成実ト宥兵ヲ以テコレヲ破リ大ニ
克ツ既ニ帰リテ此曲ヲ製衣リ以テ將士ヲ宴セシ所ナリト云ヒ「さんさーくれ」
蓋野の雨かおとせめてきてぬきか、アると云へル謠即是ナリ其後国人コレ
ニ倣ヒテ製衣ル者漸多シ「此の屋坐敷いぬてい座敷鶴と亀とい舞庭
か」又「武藏鑑に紫手綫のせて遣りたや何處までも」又「雉子のぬん
鳥十松の陰ていまをよふやら千代々々」と云へル類一ニシテ足ラス又四
藩主ノ舟ヲ海上ニ送ルニナヨリテ舟子必板踏ノ謠ヲ唱フ其ノ詞ハ散樂中
ノ狂言ノ戯ニ稱シテ語リト云フ者ニ異ナラズハ想フニ富ニ足利氏世ニ行ハレシ所
謂幸若曲ナルヘシ「初春のよまひおひ〜」此まよあかハ比留十櫻となりぬ〜
さて又夏ハ卯花此垣根の水のあらひの秋あり下のその色いのも軍
子かちん此紅葉にまかふ錦かハ冬ハ雪氣の空はれい胃の星のまゝの
坐もはあぢのまを緘毛の思ふ敵を打糸や我が名を高く揚卷の手
矢ハ囊に納まりて太刀ハ箱おひ出さ〜と富貴御世とをなりりま〜
ト云へル是ナリ其ノ句ニ富貴ニ我器ヲ以テセルモ亦巧麗ナリト謂フヘシ此等ノ

誼ハ僅ナリト云レ猶上國ノ詞ニ近シ陸中國花卷驛ノ鏡躍ノ歌ノ如キコ至リテハ
知ラザル者必ス之屬ニ其ノ何言タルコトヲ解スルコト能ハルニ槎躍ハ或ハ呼ビテ
奴躍トモ云フ刺潤リシテ髣髴キ者腰ニ長カク横一槍ヲ舞シテ舞踏スルヲ
以テ名ツケタル所ナリ其ノ詞ニ「おーどーぶのてーのら」星のおやぶのつや
ぬけい大事のたまごをくのおやいふんぐいしたと鳴る「おーどーぶ」地窟
ノ義ニシテ山ヲ謂フナリト云レ「天辺ニシテ山頂ヲ言フ」星のおやぶハ星ノ爺ヲ
言フ月ノ隠語ナリ「おやいふんぐい」高ク板ケ出ルヲ言フ「大事のたまご」提燈
ノ隠語ニシテ「おやいふんぐい」たしとハ割然トシテ踏破スルヲ言フナリ
今善ナリ意ハ八月山上ニ出ツルヲ以テ提ケ来レル燈ヲ踏破セリト云フ「過キズ其報
法解スヘカランコトカクノ如シ或ハ以テ僻地ノ言語ヲ徴スルニ足ラン傳ヘテ云フ
四藩主南都氏ノ祖大膳太夫利直其族北尾張守侯愛ヲシテ此ノ花卷城ニ
居リ以テ伊達氏ニ備ヘシム此ノ城キ時島谷崎ノ稱シテ侯愛雉砦ニシテ松看ト
号ス年既ニ七十余眼漸視ルコト能ハスシテ足モ又歩スルニ難ク侍婢ニ
松子浦子ニ人アリテ其起居ヲ助クルニ此ノ城初ハ稗貫氏コレニ主ナリ稗

貫氏矣ハ和賀家ヨリ来リ其ノ家ヲ嗣キテニ氏共ニ款ヲ豊臣氏ニ納レザルヲ以テ國
降レタリ和賀氏ノ城ハ和賀郡岩崎城ニテリ島谷崎ト相距ルコト僅ニ數里ノミ
慶長五年九月閏ケ原ノ役起ルニ會シテ伊達氏隱ニニ氏ノ遺臣ヲ喉シ急ニ
兵ヲ起シテ松崎ヲ襲ハシム城中在ル所ノ兵僅ニ十八人松崎乃ニ婢ト出テ、コ
レヲ防キ遂ニ勝ツコトヲ得タリ是ニ於テ衆ト北クルヲ追ヒテ境上ニ至リ其ノ
還ルニ及ヒテ梓喜自己ムコト能ハス此ノ謠ヲ以テ凱歌ニ充テリト云ヘリ

浮島ノ話

洋々社談 四十五号
伊藤圭介也

余清夏ノ餘暇藍川ニ宗ノ譚海ヲ閱スルニ浮島ノ譚アリ曰羽州湯殿山ノ麓大
沼ト云所ハ道中ヨリ一日路北ニヨリテ見ユ地ナリ此大沼ハ実ニ大ナル沼ニシテ此
地ニ山伏ノ修験者養ヲ結ヒテ居ル者アリ沼ノ中ニ遊ヒ島ト云モノアリ水ニ
浮ヒタル島一面ニテリ時々自然ニ分シ合シ流ニ出ル或ハ風ニ向ヒ又ハ風ニ
逆ヒテ心ノ依ニ流レ行クソノ流ニ浮フ島ニ、冬ク草木生シテアリ、一面ハ々
別ニ離レテ流レ出、又行馬ヒテ一合シ又各處ニ流レ行クコト甚奇怪ナリ壯
觀ナリ別ニ人アリテ斯ク遊戯セシムルニ似タリ仍テ昔時ヨリアリト島ト号リ

越後新潟	五百目
土和山形	五百廿目
美濃大垣	四百十目
尾張名古屋	四百十目
伊勢山田	四百目
紀伊若山	四百十目
安藝廣島	四百八十目
筑前博多	四百目
安房名柄川	四百十目
佐倉	四百五十目
相模江島	四百二十目
日下原	四百六十目
上野相生	四百八十目
信濃千曲川	五百十目

以上川水ナラサル者ハ其地ノ清泉ヲ撰ヒテ毎ニ一升ヲ秤レル者ト云フ右ハ幕府ノ土木ヲ事リシ者ノ験ニシ所ナリ差渺茫ニ似タリト云ヒ其水土ノ概ヲ知ルニ足レリ

蝉丸 伊勢參宮卷ノ一 原水戸守士説

唐南朝元帝諱暕延基ト云ヘリ延基在ノ三男祿強ノ時ヨリ瘧ニテ其上齎ヌレバ遂ニ是ラ相関トイフ所ニ棄玉フ此子ノ名ヲ彈見ト云如何トナレバ幼年ヨリ琴ヲ能彈セリ故斯名付シ也今此輩ニヨリテ日本ノ蝉丸ノ事ヲ考フルニ延喜ト延基ト和ノ字音同シ彈ノ字ト形相似タリ又相関ト相坂ニ相似タリ又延喜ノ子ヲ擊玉トト彼是ト意若ク人ノ唐ノ元帝ノ故事ノ書タル抑テ日本ノ事ト見誤リ書傳ヘシナルニ彈見事ハ古史考三十一見一ツリ又扶桑仙歌集ノ中ニ彈丸ハ山科ノアリ踐男ノ子ニシテ幼年ヨリ絲竹ヲ好シテ大宮人ニ立マシテ流泉ナド曲ヲ傳シトゾ後家奎フシテ相坂ノ関ノホトリ瘧クシテウハ往來ノ人ノナサケニヨリ家奎ヲフナキシトマリ是ヤコノハ其村ノ歌ナリト云ハサニ存ヘシ

律呂文法 曲事馬琴ハ其付

床山元明ノ才子等カ作ル律呂ニハ自ラ法則アリ所謂法則ハ一ニ至矣ニ伏線ニ

禪深四之照應立之互對六者華七之隱微即是之主宰此間能樂こいフテシテ
ワキ、如し其書之部、至矣アリ又一回毎之主案アリテ至モ又案ニナルマリ案モ再主ニテ
ラハルテ得エ又伏保ト觀染ハソ、事相似テ内ニヤラエ所謂伏保ハ後ニ出エテ其趣向
アルヲ趣向以テ此ト畢始オラシト置也又觀染ハ下染ニテ此間ニイフシヨミ
ノ事也、其後、大関目、妙趣向ヲ出サントテ趣向オラソノ事、起本東歷
ヲレコシ措也金瑞ノ水滸傳ノ評注ニ、續染ニ作レリ即觀染トテ共、
シタソト訓ムヘシ又照應ハ照對トモイフ譬ハ律詩ニ對句アルカク彼ト此ト共
照シテ照向ニ對テルラ云照對ハ重傷ニ似タレハ必是日ニカテ重傷ハ
作也、照シテ前ノ趣向ニ似タルヲ後ニ至テ後出エテイフ又照對ハ故意オ
ノ趣向ニ對テルテ彼ト此トヲ照ラセ也譬ハ船虫場内カ牛ノ角ヲ以テ照セラ
ハ北越ニテ村ニ、洞牛ノ照對ニ又犬飼現ハカケ住河ニテ擊舟ノ組擊ハ
芳流洞上ニ組擊ノ互對也、這互對ハ照對トモイフ又照對ハ對ハ中
ヲ以テ牛ニ對テルカ、其物ハ内ニケレトモ其事ハ内ニカテ又對ハ其人ハ内ニ
ケレハ其事ハ、今シテラス又者某ハ事ノ長テテ後ニ重テイワリラシ内ニ必照

カテ稱メ人ニ倚頼サセテ筆ヲ有キ、或ハ他ノ詞ヲモテセシメ、其人ノ筆ヲ以テ説出
エラモテ、俯カシテ作キ、筆ヲ有カカ、為ニ者、其ハ再倦セテリ又隱微ハ
作キ、文外ニ深意ヲ有キ、後知者ヲ俟テ、是ヲ核ニシトス、水滸傳
ニ、隱微多キ、李贄、金瑞、等、イハサテ、之、原山、文人、才子、水滸、等、
長多カレトモ、評ニ、乃テ、評ニ、隱微ヲ、善、好、セシモノナリ

神祖廣松ニ在ルヤ、郡史出テ、作モラ、檢セントス、戒ヲ、曰、百姓ヲ、活シ、ス、エ、テ、ナカレ、又、殺
シ、過、エ、テ、ナカレ、ト

由也、斯、漏、板、萃、竹山、隱、散、人、著、享和二年六月、大、學、書、籍、館、寫、本

物價、高、低、自、然、任、之、如、ス、物價ヲ、下、落、セ、シ、テ、之、レ、ハ、節、候、ニ、如、ス

光年諸ノ高價ラシ玉心トアリシヨリ、其、諸品ノ、價、貴ク、ナリ、タル、モ、アリ、コ、ノ、内、ニ、モ、概、ハ、アリ、
一概、ニ、ア、ラ、ズ、一、ラ、シ、テ、中、ハ、新、ヲ、以、テ、ミ、ル、ヘ、シ、土、佐、日、向、ヲ、ハ、シ、ト、シ、テ、諸、國、ノ、山、ヨ、リ、伐、出、シ、送、
リ、來、ル、ノ、向、屋、ト、号、ス、ル、ノ、買、以、テ、販、ニ、シ、テ、商人、一、賣、出、エ、テ、ナル、ニ、此、ノ、如、ク、吟、味、ヲ、ヨ、リ、ム、リ、シ、價、ヲ、
引、下、シ、ト、命、シ、玉、ハ、積、束、リ、是、新、ヲ、其、マ、ニ、積、戻、ス、ニ、至、ル、ユ、ニ、諸、國、ノ、山、ヨ、リ、伐、木、ヲ、止、メ、テ、

運送セシバ市中ニテ焚ツクノ新木ナキニ至ル諸山へ運送ラ役スト岳トモ疑フテ伐運ス
終ニ其價前日ニ倍ス官ヨリモ如何トモエヘカラスコノ事ニテ知ルヘシ又酒紙綿布ノ糸
綿トイヘモ徒ニ價ニカレバ弊アリ大キナル害ヲ引出エシトテ物價ノハ無理ニ賤キヲ
欲スヘカラス貴ケレバ買サレハナシ唯價ハ高賈ニ任サルヘシ貴リシテ買人ナケレバ賤ク
スルノ外ナシ米穀ノ条ニテスレニ論スルカコトス一テノ理也高賈レテモ我一人ニテラズ
我貴クワリテ他人賤クワレバ我物ハウレシテ他人ノ物ハ損ニケル又貴ケレバ買ヘカラス
買サレバ自然ト下ルコト至極ノ言トイヘ至理ノ論ナリタ官ニテハ物ノ有無ヲハカ
リテ價ニカハルヘカラス先年米價貴キ時ニ搗米屋ノ價ヲ減セラルヘシト年々
既ニ天下凶歲ニシテ米少シ故ニ價貴キハ前ニ去コトク歳ノ罪ナリシナルニ南賈
ヲ罷シ終ニ搗米屋ヲ罪セラルハ何ノ故ゾヤ其元價貴シ故ニ貴キ也末ノ搗米
屋何ゾモラシランヤ又天下ノ人年ヲウナグ米ナリ一錢ニテモ賤キニホムエヘシ我一コト
賤クワリテ高賈ヲ慶セントス一錢ニテモ貴ク慶ム家ニ買フ人ナルヘシ然レバ搗米
屋ヲ呵責シ去ハ其穴ヲ矢フトスフヘシ我子留シテ又我子ノハサノミ價ノ論ナリ
此エムヘシ貴ケレバ買者フ人少シナシテ之ヲ為ニ天下ノ害ニナルコトアラン唯者傷ラ

禁シラレバ價ハ下ルヘシ本ヲ制セシメ末ヲ制スル本ノ為ルモ少ヤリテ用スルモノ減
スヘカラス已ニ為ルモノサリシ用スルモノ多シ豈ニ貴クサレテ得シヤ又為ルモノ多クシテ用ス
ルモノ少シ豈賤クサレテ得シヤ然レバ為ルモノ用スルモノ有無多クテ論セズノ唯價ノミ
ヲ賤クセントス我ハシラサルモノ物ハ多クシテニナソレノ價アリ強テ價ヲ減セント
スヘカラス已ニ價ヲ下シトスレバ唯ソノ用イサ、サハ工夫ルヘシ又價ヲ上シトス用スル工夫ス
ヘシ但ハ為ルモノヲ減スヘカラスカウラス拍子ト云一方ヲ上レバ一方ハ下ルモノノ末ヲ上
メテホヲオサユルアリ本ヲ塞テ末ヲ開リテ年々酒造ヲ減スト是ハ酒造ヲ由
サレバ價貴シ價スレテ貴ケレバ嚴禁アリト是ハ利ヲ合チテ陰釀ス酒造ヲ減
セント欲スレド先無益ノ酒家酒家ノ宴ヲ禁ズヘシヨキカナ元祿ノ頃ニ酒造ヲ減
セラレテツ、キチユノ禁アリテ酒狂ニテ失足モノハ嚴科ニ処スヘシ其飲セタル
ノモロ家々ヘシ

菜種制禁

近年菜種且油ノ制禁甚シクナリテ諸國ヨリ大坂へ運漕ノ高ヲ改メ割ルニテ手
作手紋ノ外ハ油ノ賣買ヲ禁ヌラル油ハ米穀ト異ニシテ多クケレバ多ク用ヒサレバ

少ク用ヒタトニ 幣夜ニハト云ハ 飢饉ノコトクニハ 凡ズソレモ 不足ノ中ハ 寺社ノ常燈
明日夜賣店ヲ 禁セラルヘシコレヲノヘ 打探ラレテ 然レキニ 官ニ 御益ヲ 取ラセ
ニヨリテ 様々ノイテ 輕ク出テツイニハ 諸國ニテ 某種ノ 賣買油ノ 賣方ヲ 禁セラル
ヤウニナリテ ソレヨリ 手作 干絞ノ 外ハ 賣買ヲ 禁セラル 故ニ 西國ニテ 某種ヲ 作リテ
大坂ニ 登テ 燭屋ニ 買コレテ 油屋ニ 賣出スルニテ 油屋トイハス 直賣買ハ ナラザル
ナリサテ 西國ニハ 又 其油ヲ 買下シテ 賣スルニテ 不自由ナルト云ヘカラス 何ソ天下
ノ万民コレヲ 守ラシヤ 故ニ 國々ニ 隱匿ノトアリト 雖モ 一々 禁セラル 能ハスベシ
御益ニ 遣ハルナリ 僅ノ 御益ニ ナリテ カル 天下ノ 難トナシ 歎ニシ

銅價官より定ムルニス

銅價ハ 無用ノ事ナリ 今 貴價ノ物ヲ 賤價ニ 作り出サレテ 南賣ノ 賣リ 壹買ス
モノヲ 捕テ 刑セラルソレ 民ノ 利ニ 可シルハ 恒ノ事ナリ 賣物ヲ 賤價ニ 作ラシ
貴クウリカニ 是リ 刑シ 玉フハ 民ヲ 困スルノ事ナリ 是レハ 宜價ノ 賤キヲ 止サセラシ 札
ヲ以テ 持前ノ 本價ニ 作り出サレハ 可カニシ

三都金銀貸借制度

金銀貸借ノ 丁吉野ヲ 其ニ 昔ニ 史記ニ 孟嘗君 錢ヲ 借テ アリソレヨリ 前ニ
子重 范蠡ノ 類 是ヲ 作リテ 其ニ 漢ノ 代ニハ 又多シ 其ヨリ 漸ク 多クナリ 夫レ
一ニ 日本ニモ 古一ヨリ 金銀ヲ 借テ 多クナリ 然レニ 吉野ノ 事トナシ 近年
天下ノ 金銀 多クナリ 其半ハ 大坂ニ あり 故ニ 天下ニ 是ヲ 常饒ノ 地トシ 東ノ 諸侯
大坂ニ 借リテ 用テ 辨ス 北國 西國 中國ノ 米穀ニ 大坂ニ 集ル 又 紅毛 清ヨリ 渡
来ル 藥種 砂糖 胡椒 大坂ニ 買テ 諸國ニ 送り出スル 故ニ 大坂ノ 地ニ 金銀
ヲ 買リテ 賣スル 常ノ 事ナリ 諸侯ニ 大坂ニ 金銀ヲ 借ル 事トナシ 其ノ 金銀ヲ
返サレバ 庶人ノ 官衙ニ 借ル 武家ノ 東都ノ 寺社 奉行ニ 許テ 奉 仰ス 又 此
信ニ 種々ノ 法アリテ 借ル 命セラルト 雖モ 返サレバ 終 附 金トナシ 歳々 月々
人ト 届ル 向シ 大坂ハ 異ナリ 庶人ノ 官衙 借債ニ 海ス 故ニ 再ニ 借ル 事トナシ 得
リ 又 大坂ハ 證券 十年ヲ 過ル 官衙ニ 轉レバ 江戸 京ハ 可ク ナリ 其ノ 時
并 指ト云フ アリコレヲ 德 德ト云 是利 時代ニハ 三年 五年ニ あり 故
物ト 虽モ 其ニ 五ニ 返サレナラ 其レト云ヘシ 江戸ニハ 實 臣ノ 頭 あり 又 實
政ニ あり

金銀錢貨ノ事

由乃斯滿

制度三都

金銀錢貨ノ事上古漢土ハ後貝ヲ以テ幣トスソ内貝ヲ貴ク故ニ寶貨財賄
貴賈貪貪ソノ餘金錢ニカハル字ハ皆ナ目ニ往ラコシ古昔字ヲ制スル時分ハ
貝ヲ寶貨トシ凡故ナリ高直ニ金銀鉛鐵ノ類ヲ出セトモ一トキリノ宝ニシテ通幣
トスルニ非ススヘテ墨用ニ備ハルニ説文曰古者貨貝而室萬周而有泉至秦廢
貝行錢史記平準書ニ云農工商交易之路通而後貝金錢布之幣興焉

漢土手形全上

漢土蜀國ニ民間ニ手形ヲ用ニ交易スル始ナルコトハ今京大坂ニテ用ニ振
手形ノ如キモノナルニ後コレヲ交子ト云フニ公ニナリテソノ支配所ヲ交子務ト
云宋ニ錢引ト云役所ヲ錢引務ト云ソレヨリ富子関子関會等ノ名起リ金ノ
世ニ交鈔ト云元明ニ寶鈔ト云朝鮮ニ猪貨ト云

中古御免ノ垂回通船由乃斯滿 制度部 註何人書ニカニテ知ラス

京 角ノ倉

釜屋

一艘

伏見屋

堺 伊豫屋

長崎 末次

船本

荒木

糸屋

以上九艘

長崎ノ船也大ニハ回船皆由乃斯滿ノ入ニ故ニテ書ト云今紅毛ハアリナレ又書
ト云

外国交易 全上

互利ナリ我邦ノ商船外國ニ渡ルニ勘合印ヲ以テ大内家ニシテナスソ後
堺京伏見ノ船主ヨリ海エテ多ク又外國ニテ日出一ナクモソノ平尺モナリ
琉球薩摩堺一モ入りニ莫永理ヨリ禁制アリテ清國紅毛ニ限ルヤウニ
ナリ長崎ニ役所ヲ置テ清國ノ報知ニテ建テソノ地ニ入ルヲ許サズ我邦

ハ金銀銅鐵多キヨリテ萬國ニテコレホ故ニ藥物之物器玩珠玉之類
シキリテ銅鐵ニ易ク二百年餘ニ至リテソノ數計ルハラス既ニ三徳ノ復石
先生ヲ教テアケテ外國ノ海ヲヨリ難シクニ其後今ニ至リテ百年餘
ケモノク易ク渡サレタルニ金銀銅鐵ノ不足ノイモト由ラ先生時ニ斯
ヨリ外國ノ一ツクナルハ日本ノ宝貨ニ五十年ニハ錫果ルヤウニ聞
事モヤケレハコト上百年ニ百三十一過ハトラス亦同ニヤルニ履軒先生曰鐵ハ
切要ノ物ナレバ沃山ニ出ルニ故惜ルニ足ラス銅ハ金ヲ絶タリ民
用ニ鉄タルトナレバハツカニ無レハツカニサレテスルコト深ク惜
ル論昔ヨリ多ク空論ト云ニ金銀ハ少クバ少キニテ多クバ多ク
テスル故ヨキト云ニ非スユレヲ惜ルハ心得違フ清ヨリ金銀年々
而來ス何ノエト云テ脚帳簿ニ志厚ニハサルハ一ツク内
存ハユクニ入ル平論ニテラス我國ノ銀錢浙福建ノ間ヨリ
通用スルト云々高船ハ載來ナリ琉球ノ清ノ交易ノ物ニ銀
アリ薩州ト合セテ年々銀二百萬圓江戸ノ邊ニテ古銀ノ通
吹ヒテ渡スナリコト薩州ヨリ文銀四百萬圓目キド

官一オエト云公然シテ一屢世テモ屢還ルハ我邦ニテ同
事ニ紅毛ノ一トラスト云ニ凡ノ清番交易ノ一ツク以テ無
ニカレキテ多キニ備ラサルソナリ一私ヲサレテヒロル
互市ノ利也故ニ大体ノ法ニ定マリテ間然ナレト雖
尼吏人奸商ノ私ヲ起リテ終ニ外國ノ融通ノ法ヲ失
コ万国ノ為ニ笑ル一ツクニシテアラス殊ニ紅毛ノ
奸智中ニ志一オアラスヨリ計リテ國權國利ヲ失
ヤルヤケニ一ニニテ云ハハ藥茶番物ハミナ用アリ砂糖
ハ口ヲ甘ニスルニサクナクシテヨカレニ較ニ武用
ノモノト雖我邦ニ生ズル物ヲスルニ今ノエトクニ
上品ヲ用ニ金銀ヲ費スル處用ニ立フニアス
盤中ノハ無用ノ物ナリ東都ニハアヤリ大送ナルハ
用ニ立フニ用ユルヲ甘シユルハ面ニ持テテ方合
ル似タルヲ用ユルラスコノ物昔ハ玳瑁ニテ來
リシニ制林ニナリテヨリ右ヲカレテ盤中トシ
來ルハト也タトニナリテ交ストモソノ品ニ違
ナリハ林手セルヘシユノ物ニ一ニ士庶ノ女ヲ
持タルヲヤマシム早ク其手制アリタキ
一書藉ノ類ハ其美惡ヲ論エノ目ヲカケテ輕重
ヲ以テ價ヲ立ト直ナルナリ好書ノワタ
リヤ清番一畫帖ヲ渡シ屏風襪類ヲ渡
ス皆浪華ニテコレヲ画ク新東都中
昌刀劍ヲ用ニ画ク

社等にて唯男女雜居シテ遊戯牌ノ回ヲ画クヲミノ外交易中ニハカ
類多シ古昔一時ノ法ヲ以テシ又ハソノ時ノ利欲ニヨリテ今ニ至テ改ムルナリ
吾邦ノ恥辱ヲ外國ニ顯ハス一國威ヲ損ト云ヘシコトヲハ皆執事職ノ
知ラセシカリトニテ有司下吏ノ失ル處ナリ希クハ長崎ノ牧ニ大體無知ノ
人ヲ用ヒラシ吏人商賈ノ共利利欲ヲ吟味アリテ國体ヲ損セカムヤウニアリ
タシ外國ニ通スル信ヲ奪ヒシ威ヲキスニアリ下吏共ニ高コノ意ヲシラ
スミテ公私トモニ利ヲ爭フヲ表トス故ニ外國人ミナ長崎ノ風俗ヲミテ白
本ノ風俗ミナコレナリト思ヒ彼國史ニ記ハ口措フニテラスヤ

渡江達磨 曲亭翁云同放言

常達磨江を渡るの圖畫を視るに一之を其年を踏く皮上を藎
ふ多う浮辰氏之妻を誑くものなり一からに註累志の世に
禪家を寂靜神悟を宗とする者あり達磨は吾其方より其方
幻術ありといふを其面よりせりや吾人其の圖畫を視て其難
その形一全之を其大を其小を其甚葉ハ偏舟あり一
りともあり祖庭を死識辨辨般若多羅第一首曰路行跨水忽逢
羊、獨自棲、暗渡江、日下可憐雙象馬、二株嫩桂久昌、宗
僧善卿曰、此識達磨西來始終之事達磨始來見梁武帝、
帝名行、行从行从水、故云路行跨水、帝既不契、祖師遂有

洛陽之游、故云逢羊、羊陽声相近也、祖師不欲人知其行、是
夜航蓋而蓋、故曰暗渡江也、祖師西來見梁魏二帝、此
曰日下雙象馬也、九年面壁於少林寺、故曰二株嫩桂久
九声之近也といふ

